

かのすい乃岡の兼好法師が書けり
の草とよとの世の中いふか今



諸学校の教課書のうちかすい乃岡
の事なる由書書の注釋者かたは
くめいせいといふとてなるもの何
か算をいふか或は阿含の附會はし
るものなりしは安くちうてん勢をいふ
の事なるを渡の辺り私人ぬきをいふ

序

題外

邦文比於他國之文別有妙味是邦人之所獨有而
他國人之所不能正也。能古文之傳於世者多淫靡
柔弱不可為後學之則者。獨魚好所徒就草簡潔而
不柔弱雅馴而不淫靡。以此為教邦文之書。蓋近乎
無大過焉。女人渡邊子。儉頃著述。就字新釋。常存古
余自古往徒然草者。自立安注。所以示下。數十家。

於此書之釋，紛紜析，無復餘蘊矣。予子儉更著新
釋之書，豈乃有蛇足之嫌乎。余謂不然。夫注釋之宜
於詳者，宜於略者，以於人之說者，有及前人之
說者，道春之釋，不同於立安之釋，季宏之釋，不同於
貞德之釋，然則子儉之釋之不同於古人，亦理之所
宜也。近年教育者，其邦文之宜重，學校必有學部
文之科，子儉今為第三高等中學之教官，其意蓋在

欲以此書教生徒也。余喜其選擇之得宜，而注釋之
簡明也。因叙一言，以證其有益於教育如此。

明治二十五年九月

東京 西村 淺樹 識



浪華 泊堂魚書



例言

- 一 此書の註釋は予が曩に第二高等中學校にありて授業の際ひろく諸抄の説を參考し其中最適切にして最確實かりと認むるものを採擇し之に己が斷案を加へはた語格文法の解釋をも交へて教授せしより成れるものにして其釋く所敢て儒佛の二道に偏せず専ら文詞の意義を了せしむるにあり
- 一 此書の註釋曩には簡易にして只其要領を了せしむるを旨とす故に考証の如きは猥りに之を擧げざるに爾來本書を中學教科に採用せらるゝ極めて多く従つて其註釋もまた廣く世に行はるゝに至れり是に於てか曩の簡易なるもの及び至らざるもの之を改正増補せざる可からき是即ち此書の体面を改めたる所以なり
- 一 本書の註釋古來世に行はるゝもの頗る多し然れども其說多くは儒佛の二道に偏して文脈及び語格を示せるもの未だ之あるを見ず此書本文語氣の急にして詞の略かれ約まる所には傍注して其文脈及び語法を示し讀者をして其之を解するに容易ならしむ是從來の註釋と其体を異にするを以て新釋と名づくる所以なり
- 一 此書每段頭注にのゝぐるものは語格文法及び文詞の讚或は事實の考証等にして普通の文詞の解釋とは其趣を異にせり故に更に其引用の書目をかゝけて讀者をして其說の因て出る所を知らしむ
- 一 裝束器具の類にして其品物の如何を知らざるときは明らか其事實を了する能はざるものは貞丈雜記又は裝束圖式徒然直解等より其圖式を撮りて之を卷末に掲ぐ

一書中本文の右側に、点を附するものは其段の要点にして○点を附するものは只其語氣を強めたる助辭なるを知るべし

一辭の係り結びは文法の要領にして講讀中最注意せざる可からず而して其説や諸家同じからせ今其最簡易にして確實なる「て」を以ては係辭辨の説に従ひ第二の係辭をぞかんやか（かんは係辭辨に見えずといへども其結びの格ぞと同じきを以て今之を加ふ）第三をこそと定め係りには「を」を附し結びには「し」を附せり而して其第一の係りはすべて徒にて（徒とは上よりはもぞなんやかこそその係辭かく一すぢにいひつゞけたるかりの名にて体言又はてにをへなごの辭より結びに應ずるものをいふ）切止言は皆其結びとされるを以て今其簡法に従ひ別にこれがしるしを附せき

一從來流布の板本を比較して本文に異同あるものは其右側に細字して「イ何々」と記せり是讀者をして文章上よに注意せしめんが爲かり

一凡て書を讀むには其著者の如何とその書の大意と辨へ而して其一部の意をよく明らむるを要とす故に今此書の著者兼好法師の小傳を兼好傳考證より抄出し將た一部の大意を列記して之を卷首にかゝる

明治廿二年四月

渡邊弘人

兼好法師小傳

兼好法師は南朝に心をよせし當時の世捨人なりその俗姓は吉田社司卜部兼顯の四男左兵衛兼好といへる俗なりけり

後醍醐天皇の父帝後宇多天皇の崩御をかかしま出家して木曾路に至り都へ歸り中頃伊賀國橋成忠のもとに住たるよとありて東へ下りまた都へ歸り上り双岡また吉田山又横川に住たりしを再度伊賀より下り國見山の麓田井莊にて終に法師となり正平五年（北朝觀應五年）二月三日病にかゝり同丁八日病れもりて身まかりぬ享年は種々の説あれど六十八歳といふとよく此人の時代にかなひて覺ゆれば是を以て年立をなせりと兼好傳考證に見えたり

一部の大意

徒然草は佛教を根本とし老莊の道孔子の教を枝葉とし清少納言が枕草子の文章を摸して仁義釋教戀無常故實因縁和歌管絃の道に至るまですべて世の有様を心にうかぶまに／＼書列ねしもの也されど其旨とする所は無常を觀じ男女の痴情を誡め世俗のみたれを憤りて己が志を述べたるもの也故に書中往々世を諷する趣あり又萬民の教誡となせるもの多し而して此書を作りし年代は土肥經平の春湊浪語に云ふ所によれば上卷は建武三年より以前に吉田并に双岡までかきて下卷は建武三年の後即ち延元のころ國見山の庵に移りてかきしと明らか也故に下卷の始めに心あらん友もがな都戀しう覺ゆれとあるを自からその証なり

上巻目次

一	いぞや此世の段	一
二	聖の御代の段	五
三	色好さらんの段	二
四	後の世の事心にわすれずの段	十
五	不幸に愁の段并顯基の金言	十
六	曾たゆん段并聖德太子御墓の事	十
七	あたし野の段	十
八	久米の仙人通をうしなひし段	九
九	女は髪が目出からんの段并鹿笛の事	十
十	家居のつぎくしくの段	十
十一	後徳大寺大臣の寢殿に繩はれる事并綾小路の宮の事	十
十二	神無月の頃栗栖野を通る事并柑子の木の事	十
十三	同じ心からん友の段	十
十四	ひとり灯火の事	十
十五	和歌こそれもしうけれの段并貫之家長が歌の事	十
十六	并野曲の事	十

十六	いづくにもあれしはし旅立の段	二十六丁
十七	神樂こそなまめかしけれの段并常に聞たき物の音の事	二十七丁
十八	山寺にかきこもるの段	二十七丁
十九	人は己を約にすべきの段并許由孫晨の事	二十七丁
二十	四季の段	二十七丁
二十一	空の名残をしむの段	二十七丁
二十二	月露の論の段并戴叔倫が詩稽康が詞立賓僧都の歌の事	三十三丁
二十三	何事も古き世のみ終慕はしきの段	三十三丁
二十四	猶九重の神さびたるの段并内侍所の御鈴の事	三十四丁
二十五	齊宮の段并社の名の事	三十六丁
二十六	飛鳥川の段并京極殿法成寺の事	三十七丁
二十七	風も吹あへすうつろふの段并昔見し歌の事	三十九丁
二十八	御國讓の段并殿守の歌の事	四十丁
二十九	諒闇の段并布のもかうの事	四十一丁
三十	しづかにたもへばの段	四十二丁
三十一	中陰の段	四十三丁
三十二	雪の朝に文やりし段	四十三丁
三十三	九月廿日頃の夜月見ありきし段	四十六丁

三十四	くしがたの段	同
三十五	甲香の段	四十七丁
三十六	手のわろき人も文かくべきの段	四十八丁
三十七	仕丁をかりにれこそし段	同
三十八	朝夕へたてなくなれぬるの段	同
三十九	名利の段	同
四十	法然上人に念佛の事問ひし段	四十九丁
四十一	栗をくひし女の段	五十三丁
四十二	加茂の競馬の段	五十四丁
四十三	行雅僧都の奇病の段	五十五丁
四十四	春の暮つかた文みし男の段	五十六丁
四十五	月夜に笛吹し男の段	五十七丁
四十六	良覺僧正腹あしき段	五十八丁
四十七	強盜法印の段	六十丁
四十八	くさめくゝの段	六十一丁
四十九	光親卿最勝講の奉行せられし段	同
五十	老來りて始めて道を行せんと待事なかれの段付禪林十因の事 并心戒聖の事	六十二丁 六十三丁

五十一	女の鬼の段	六十四丁
五十二	大井川の水車の段	六十五丁
五十三	仁和寺の法師石清水へ參詣せし段	六十六丁
五十四	鼎を頭にかづきし段	六十七丁
五十五	うづみし破子を失ひし段	六十九丁
五十六	家のつくりやうの段	七十一丁
五十七	久しく隔りての段付よき人とよからぬ人との物語する品々の事	同
五十八	歌物語の歌のあしき段	七十三丁
五十九	道心あらは住む所よしもよらじの段	同
六十	大事を思ひ立人は萬事をすつべきの段	七十五丁
六十一	盛親僧都の段付白うるりの事	七十七丁
六十二	御産の時甌落すの段	八十丁
六十三	延政門院の歌の段	同
六十四	後七日の阿闍梨武者をあつむるの段	八十一丁
六十五	車の五緒の段	同
六十六	冠桶の段	同
六十七	岡本關白殿の段付鳥柴の故實の事	八十二丁

六十 加茂の岩本橋本の段付吉水和尙の歌の事并今出川の近衛の事

六十九 土大根の事 八十四丁

七十 性空上人六根淨にかなへる比段 八十五丁

七十一 元應の清暑堂の御遊に牧馬の柱落し段 八十六丁

七十二 名を聞よりやがて面影たしはからるゝ段 八十七丁

七十三 いやしはかる物の段 八十八丁

七十四 世に語る事にまこと少かきの段付虚言に品々ある事 同

七十五 蟻のてとくよあつまりての段 八十九丁

七十六 つれづれわぶるの段 九十二丁

七十七 世のたがえ花やかなる邊へ法師の立交るは見苦しきの段 九十三丁

七十八 世の中にもて扱ひ草をいろふべき人ならぬ身にて語りこふ事 九十四丁

七十九 今様の珍しき事をひろむるの段 九十五丁

八十 何事も入たゝぬさますべきの段 同

八十一 我身にうるとき事をこのめるの段付軍の勝負の事 九十六丁

八十二 屏風障子などの繪文字の段 九十七丁

八十三 うすものゝ表紙の段付頼阿弘融が詞の事 九十八丁

八十四 竹林院左大臣殿大政大臣にあがり給はぬ段 九十九丁

八十五 法顯三藏渡天の段 百丁

八十六 人の心すなはならねは偽なきにしもあらずの段 百一丁

八十七 惟繼中納言はうしの秀句の段 百二丁

八十八 下部に酒のまをまじさの段付具覺坊が事 百三丁

八十九 小野道風がかける和漢朗詠集の段 百四丁

九十 猫またの段 百五丁

九十一 大納言法印の召使ひし乙鶴丸の段 百六丁

九十二 赤舌日の段 百七丁

九十三 弓射るにもろ矢を持まじさの段 百八丁

九十四 牛をうる者ありの段付生死の相をはかるべきの事 同

九十五 勅書を持つては下馬せざるの段 同

九十六 箱のくりかたに緒をつくるの段 百十四丁

九十七 めなもふ 百十五丁

九十八 其物につきて其も段をそこなふの段 同

九十九 一言芳談の段 同

百 堀川相國廳屋の唐櫃を作りかへんどの給ふの段 百十七丁

百一 まがりの段 百十八丁

百二	任大臣の内辨宣命を忘れ給ふの段付中原康綱が才覺の事同	百二十九丁
百三	光忠入道追儼の上卿つとめ給ふの段 付衛士の又五郎公事なるの事	百十九丁
百四	なぞの段付薬師忠守が事	百二十丁
百六	北の屋かけの段	百二十二丁
百七	高野証空上人の段	百二十三丁
百八	女の物いひかけたる返事するの段付堀川内大臣殿山階左大臣殿の事 井女なくば衣紋もつくろふまじきの事	百二十四丁
百九	寸陰をしむ人なしの段并謝靈運法華比筆受の段 付惠遠白蓮社の事	百二十六丁
百十	高名の木のほりの段	百二十九丁
百十一	双六の上手に其手たてを問し段	百三十丁
百十二	圍碁双六好むは大罪あるの段	同
百十三	明日は遠國へれもむくべしの段	百三十一丁
百十四	四十よもあまりたる人の色めきたるはあしきの段 付聞にくく見ぐるしき事	百三十二丁
百十五	西王丸が牛の段付太秦殿の女房の名の事	百三十三丁
百十六	ほろくこれの	百三十四丁

百十七	寺院の號さらぬもの、名にも奇異を好むまじきの段	百三十六丁
百十八	友とするに善悪あるの段	同
百十九	鯉のあ物の段	百三十七丁
百二十	鯉の段	百三十八丁
百二十一	唐の物は薬の外はいらざるの段	百三十九丁
百二十二	やしなひかふもの、段并王子猷が鳥を愛せしやうの事	同
百二十三	人のつとむべき才能の段	百四十一丁
百二十四	無益の事をなして時をうつすの段	百四十二丁
百二十五	是法法師が段	百四十三丁
百二十六	佛事の導師を唐の狗と褒し段付劔よて我頭を切るたとへの事	同
百二十七	はくちの勝べき時をしるの段	百四十五丁
百二十八	あらためて益なき事は改むまじきの段	同
百二十九	雅房卿鷹の餌に犬の足を切るの段	同
百三十	顔回が志の段付幼子をれどす間敷事	百四十七丁
百三十一	物よあらそはずの段	百四十九丁
百三十二	財と力を以て禮とすまじきの段	百五十一丁
百三十三	鳥羽の作道の段 元良親王奏賀の事	同

百三十四	夜の御殿の東御枕の段付孔子の東首白川院北枕の事	百五十二丁
百三十五	法華堂の僧鏡にはぢし段	百五十三丁
百三十六	かじこばなる人もれのれを知らざるの段	同
百三十七	馬のきつりやうきつりのをかの段	百五十六丁
百三十八	塩の字の段	百五十七丁

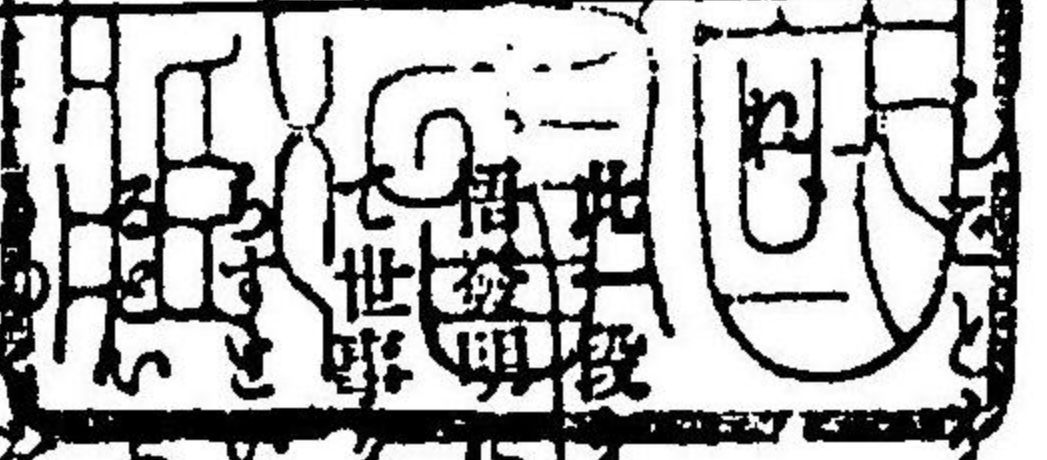
徒然草一教端の語を以て四號とすつれは草案草稿なきいふ草と同一く草子の義なるべし

日くらし弘人云此語諸抄下文につらねて終の体考ふるに上につらねて日にくらしのをいし借りたる体用言と見る方可なるべし

訂正 徒然草新釋 卷上

渡邊 弘人 釋

つれづれなるまゝに日くらし。硯にむかひて、心にうつりゆくよしな
我ナガラ
 といふはかたなくかきつくれば、あやしうころ物ぐるほしけ
狂



此一段と一部の序文と見るべし。○つれづれなるまゝに日くらし。此一句は兼好の大
 目録にして身心の大安樂をあらはしたるものと見たり。さてこの意は常に物静にし
 世事はなれなす事もなくまつこともなくあかしくらすをつれづれなるまゝに日く
 づも也。一旦の義にあらす程ふる意あり。○心にうつりゆく。心にうつりく
 ことにて物來りて心にうつるなりくるをもくといふは万葉六の長歌に春にな
 る春去行者」といへるが如し。心のうつりゆくといへるとはたがへり。○よしな
 しこと。無由事にて何の理由もなきこと、卑下せし詞なり。○ろこはかどなく。其處
 と目録す所なき意也。かはるととある事にてろことははかられぬ意なれ。一つの語と違
 りては只助字の如くになれり。古今六に跡はかもなくといへるに同じ。○物ぐるほし
 るほしはくるほしなり。は普通す是また卑下せし詞なり。

「一」いふや、この世に生れては、ねがはしかるべき事ころれほかめれ、

「其物其事をうれ
と断定する辞なり
はさにつけつゝ云々」
つゝは兩辭にて二人
或は二個の作業を一
辭に見す辭なればは
どにつけてしより顔
なるも時にあひてし
たり顔なるもの意な

此段人生品々につきてさまゝの願ひあれど其身の及ばざる事はさておき學文諸藝等
の有益にして願ひ易く得やすきを願ふにしくべからずとの意なり○いでや 發語の辭
ながら俗にいふいやもうの意なりやは強くいへるとさうへていへり

みかどの御位チチガフはいとまかじこし竹のうのふの末葉まで、人間のたね
ならぬぞやんとなき、一の人の御有様はイッモさらなり、たゞうごも舍人
なごたまはるきはハはと見ゆ、うの子むまをまてははふれにた
れど猶なまめかし、うれよりしもつかたは、ほごにつけつゝ時にあひ、
したり顔なるも、自らはいみじとおもふらめと（節）いと口をし、

○竹のうのふ 親王をいへり梁孝王の親王にて竹を好みて三百里にうゑて愛せしより
此名あり竹のうのふといふより末葉をついけたり○やんとなき 無止事の義にて
高く貴き人にいふはなほざりにしがたき意より出たり俗にかくべつなきいふが如し○
一の人 攝政關白をさす職原抄に執柄必蒙一座之宣旨故稱一人と云へり
○たゞ人 こゝにたゞ人と書けるは攝關に對しての詞なれば平人と心得べからずるは
隨身は五攝家七清華に限りて給はるものなれば也○舍人なごたまはるきは 近衛舍
人にて即隨身なりきは今俗に分限といふに同じかざりといふ意なり○おゝし よき
あしきにつけて一方ならぬこといふ詞なりあゝはすやれたることをいへり○はふれ
にたれど 落ふればはたれどなり○猶なまめかし 猶とは威勢あるたゞ人よりはなり
なまめかしは品やかなる様なり○ほごにつけつゝ時にあひ 其身の分限につけて一旦
の威勢あるをいふほごは分限といふに同じ○したり顔 知りたり顔にてほごりたる様

なり○いみじ 善惡とも甚しき所にいへる詞にてこゝには甚よろしき意なり

法師ばかり（人）うらやましからぬものはあらじ、人には木のはしの（用タマ）やう
にたれもはるゝよと、清少納言がかけるもけにさるをぞかし（アレン今ノ節）いきはひ
猛（カヤウノモリ）のゝしりたるにつけていみじとは見ゆ、増賀聖のいひけんや
うに、名聞ぐるしく佛の御教にたがふらむとぞおほゆる、ひたぶるの
世（カヤウノモリ）すて、人は中々あらまほしきかたもありなむ、

○人には木のはしのやうに 枕草紙一の巻におもはん子を法師になしたらんころはい
と心ぐるしけれさるはいとたのもしき業をたい木のはしなきのやうに思ひたらんころ
いとくをしけれとあり○清少納言 一條院の皇后につかへし女房にて枕草紙の作者
也○げにさることかかし 實に尤なりと兼好同意の詞なり兼好の底意は清少納言と同
じく法師はさ羨むべきものはあらぬに世人は羨しげなしといふを深く憤り思ふ故にし
かいふなり枕草紙にさるはいとたのもしき業を云々といへる語を味ふべし○増賀聖の
いひけんやうに 増賀は和州多武峰の僧也發心集第一卷増賀の傳に名聞ころくるしけ
れを食の身を樂しかりけるとうたうて打眠にけるとあり○ひたぶるの世捨人は ひと
すらに名利をはなれて身を安くする法師なり○なかゝあらまほしき方も 却てあり
たしと思ふのむきの人もあらむとなりかたは方にて向といはんが如し

人は、かたち有様のすぐれたらむころ、あらまほしかるべけれ、物うち
いひたる聞にくからず、愛敬ありて辭多からぬころ、あかずむかはま

さるとかかし「是は
ごと切れたる下にか
しといふ辭をうへた
るにてかしには意な
し
ありなむ」あらんを
ありなむといへるに
てなには意なしうは
奈行禮格は本言にも
とればなり

物うちいひたる「う
ちは文の勢ひをつよ
くせんためになくろ
へていへる發語にて

別に意あるにはあら

ほしけれ、めでたしと見る人の心心外ニおとりせらるゝ本性心外ニふゆむころ、口をしかるべけれ、

○人はかたち有様の 人は形容行跡のよき人ころ好ましけれとなり畢竟本心の事をいはん爲に先づ外面の事をいへり○愛敬ありて かはもげなるさまありてなり○あかずむかはまほしけれ いつまでもあくといふ事なく向ひむたしとなり○めでたしと見る人の 愛すべく見ゆる人の思ひの外に見下けたる心底の見えん事なり本性は只心底といはんが如し

しなかつたころ生れつきたらめ、心はなぞか賢より賢にうつつさは人人形品形容うつらざらむ、かたち心さまよき人も、さゆなくなりぬれば、品くたり、顔顔にくさけなる人にもたちまじりて、かけオクラメラずけおさるゝころ、はいな無さわぎなれ

○し奇形ちころ生れつきたらめ 人形容は生付きたれば是非なし心は學問して古への聖賢を友とし吾心ふうつし似せんと思はば何ううつらざらんやと論語學而篤賢賢易色の語を和らげてかけり○さえなくなりぬれば 才智なく成行くなり初め貴くして後賤しくなりぬればといはんが如し才をさぬといふは音を轉じて訓とするの例也○はいなき 無本意にて詮なき意なり

有たきとは、まことしき文の道、作文和歌管絃の道、また有職人ノ身ニに公事ニハ

けおさるゝ、けは詞の初にある助辭にてけうとしけとはしな色のけと同じく物の芽しをあらかじめはかりていふ氣の義なり

まあとしき「形状言しくししきの活の

續体言にて文の道を形容していへり有職「在滿云有職とかけり文字義もなく覺ゆもし有識をいふにや手なを拙からず云云」讚云此句の上にはすべて此世のねがはしき事をあげて下に聲あかしく遊藝のなぞいへる遊藝のはづみより下戸ならぬころをのこはよけれと酒の事を書き出したる此文章の變化にはさらしく油断すべきにあらず

うたて「轉の字をよめるは其事の轉り進みて尋常ならず又よからぬ事なぞにいへるなりうた」といふも同じ

のかた、人の鏡コトナラフならむこそいみじかるべけれ、手なを拙手跡からずはしりがき、聲をかしくて柏子カシノコとり、いたましようするものから、下戸カシノコならぬころをのこはよけれ、

○まことしき文の道 國家を治むる正しき文の道にて四書五經の道といふまことしきは正しき意なり○有職に 一切の物の故實を知るをいふ○公事のかた 禁中の行事をさす○聲をかしくて 其聲おもしろくてなり○いたましようする物から 物からは物ながら也酒宴などの席にては心地よげに酒をのむにてはなしさればいたみながらも飲ねばかなはぬ時に飲て一興を催すがよきと也このはの字を見れば女法師なぞに戒めたるまど知られたり○下戸 人の性質にて酒を飲得ぬものをいふ○をのこ 僧にむかへて在俗の人をいふ

「二」いしへの聖の御代の政をも忘れ、民の愁國のそこなはるゝをもしらす、よろづにきよらをつくしていみじと思ひ、所宮殿ナドせきさましたる人ころうたて思ふ所なくみぬれ、

此段は位高きやんごとなき人の前段にいはゆるまことしき文の道を傍にし奢侈にふけりて人民のなげきを思はざるは誠にかひなき事ごとふかく其心をいましめ併せて君臣ともに儉約を本とすべきことをいへり○いにしへの聖の御代 漢土にて堯舜の御代我朝にては仁徳天皇の御代なぞをいふべし○所せきさましたる 宮殿なぞ猶狹しとたてつゝくる有様なりせきはせはきの中層なり○うたて あまりにといへる意にて轉の字

の義なり○思ふ所なく 思案遠慮する所もなき人と見ゆるなり思ひつきまぐといふ説はわろし

衣冠より馬車にいたるまで、あるにしがひて用ひよ、美麗をもとむるてなかれとぞ、九條殿師補の遺誠にも侍る八十四代ノ帝、順徳院の禁中のてぐもか、せ給へる御ツミにも、ねはやけの奉り物は、おろろかななるをもてよしとすと見エころ侍れメサレ。

○衣冠より馬車にいたるまで 上衣冠より下馬車に至るまでといふ意にて其中間にすべて師補の調度をかねたり○九條殿 村上天皇の御代の人なり○順徳院の禁中のことども禁秘抄一巻作り給へり此下の句は禁秘抄天子へ御装束調進する例をか、せ給へる所に但天子着御の物は以疎爲美とあるを引てやはらげたる也

三萬藝能のいみじくとスグレタリも、色色このまさらんをのこは、いとさうぐいしく、玉のさかづきのうこななき女知キ心地ぞすべき

此段まづ人情に従ひて戀路をはめ後にはひたすらにたはるゝなかれといひて深くこれを戒む樂めども淫ぜずとの意なるへし ○さうぐいしく 鈴屋翁の説にさうぐいしとはあるべきものあるべき事師補のなくて足らぬがびしきをさへりとあり○玉のさかづきの玉のさかづきは萬いみじき男にたとへるこななきは事足らぬ躰にいへり○心地ぞすべき 他の心をはかりていふなり心地ぞすとといへるといいたくたがへり

露霜にしはたれて所さためすまをひありき、親のいさめ、世のうしろをつゝむに、心のいとまなく、あふささるるに思ひみたれ、さるはひとりねがちに、まごろむ夜なきころをかしけれ、

○露霜にしはたれて 西へ東へとうかれありく好色人のさまあり○親のいさめ 此いさめは後世にいふ諫とは異にして然るべからぬ事と禁むるをいへり○つゝむに 慎みは、いかるになり○あふささるるに 往來と書て往さま來さまの義也かなたこなた又かれこれの意に通ふべし○さるは 上をうけてさあるいといふ辞なれどこゝなるはされどさはいへなぞいふ意に聞ゆ其例源氏帯木の巻首に見えたり○ひとりねがちに云々 彼方此方にて枕をかはず義也をかすとば興あるさまをいへり

さりとしてひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれんころ、あらまほし在かるべきわさなれ、

○さりとして云々 前に好色人の有様をかしといへばとて我心を女に見とられて容易く思ひあなせらるゝ如き狂れたる業あるべからずと好色に溺るゝ人を誡めたるなりひたすらは一向にひとへになぞいふ意なり

〔四〕後の世の事心にわすれず、ほどけのみち二うとからぬ一ころ入にくし、

此段前三段に世俗のあらまほしきことをいへるをうけて佛道の事に及へるはまづ世人

さるは「源氏帯木の巻首に云々忍び給へるかたりのへことをさへかたりつたへけん人の物いひさがなへよさるはいといたく世をはかりまめだち給ける程に云々

不幸に「このには」に
ての意にてこれにか
ざりていふ處にある
辭也
有かなきかに「この
には」と通ふににて
の如にといふ意の
也

たげえぬべし「れば
ゆべしといへるに同
じうはぬもとは詞の
いきはひにてうはれ
るものにて即ち奈行
變格のぬなれば其本
言下二段活にかへり
てうれとさくべけれ
ば也

有りなむ「此なむは
未來を想像する意
也

の機嫌を見合せてさて後に己が好む所をいひ出せるつれづれ一部の本意なるべし○後
の世の事云々 來世のことを心に忘れず常に工夫して或は看經し或は行跡を修し佛道
を親しくつとむる人をゆかしく思ふとなり心にくしは奥ゆかしき意なり
〔五〕不幸に愁にしづめる人の、頭おろしなど（スル如ク）ふつゝかに思ひとりた
る（此世ナリ）にはあらで有かなきかに、門さしこめて待（世ニ）ともなくあかし（夜ナリ）くら
したる、さる方にあらまほし、

此段前段の佛の道にうとからぬをうけて不幸にて愁にしづめる道心はさめ易く信なら
ねば只心靜に此世を明しくらさんことあらまほしけれとの意なるべし○不幸に愁
にしづめる人の云々 吾身の不幸にて愁にしづめる人の一時の感情にせめられ已むを
えず剃髮染衣の身となりたる如くになり是は兼好人一人の愁にはあらで權臣逆威をよ
るひて天皇を蔑如する世に生れて已むをせず出家せし愁をいひかすめたる也と兼好傳
考證にいへり○ふつゝかに思ひとりたるにはあらで いやしく此世を感じたる發心に
はあらでなり是はもと高僧貴僧などにならんと心の心にはあらで一時の感情にせまりて
のことなるをいへりふつゝかは何の味もなくいやしき意なり○有かなきかに 是より
兼好本意の通世者の有様をいへり此門の内には人あるかなきかと思ふやうになり

顯基中納言のいひけん配所の月、罪なく見むと、さもおほらぬべし、

○顯基中納言 後一條院の近習の臣也後一條院崩し給へる一七日にあたる日年三十七
にて大原にて出家せりといへり○配所の月罪なくて 此詞は撰集抄に朝につかへしう
のかみより明暮あはれ罪なくして配所の月を見ばやと涙を流し給ふとあるをいへるな
り是は當時御堂關白道長公世を我儘にせられし憤激よりの詞なるべければ兼好も權臣
逆威を振ふ世にありてはさも覺ぬべしと同意せしなり其意不幸にて世を捨てたるは
罪によりて配所にあるが如し只何となく靜に門さしこめてあるは罪なくといへるに
ひとしければなり此句此段の要領とす

〔六〕我身のやむとなからむにも、まして數ならさらむにも、子といふもの
のなく、有りなむ、

此段は前段にいふ心靜に此世をくらさんものは妻子のはだしあるまじければの意にて
俗家にも愚なる子持たんよりは子といふものなきがましならんとの事をいへり○我
身のやんことおからんにも云々 是は俗家のうへをいへるにて身がらの高きにも賤し
きにもなりましては勝してにて尙更の意なり○子といふものなくて云々 此句此段の
要領にして兼好真に子孫の絶縁を好めるにはあらじ愚なる子もたんよりは只子といふ
ものなくてよからんとの意なるべしうは下に末のおくれ給へるはといへるにて明らか
なり

前中書王（兼好）、九條太政大臣（伊道）、花園左大臣（有仁）、みなぞう絶ゆるを願ひ給へり、
染殿大臣（其母）も、子孫おはせぬぞよく待る、末（族）のおくれ給へるは、わろきこ
となりとぞ世繼の翁の物語にはいへる、聖德太子の御墓をかねてつ
かせ給ひける時も、こゝ（道）をされかしこ（道）をたて、子孫（兼好）あらせじとおも
ふなりと侍りけるとかや（三ツナレ）

○前中書王 前中務卿兼明親王なり延喜帝の御子なり中書は中務の唐名なり親王なりし故に王といふ此王の嫡子を伊勢卿と申せしが兼明かくれ給ひてのち帝より此兼明の書たる文などありやと御尋ありければ伊勢卿うさぎのかはごろもの賦といふ物書置給へりと帝へさし給へばわらひぐさとなりぬ菟裘賦といふことえ知り給はざりし故なり○九條大政大臣 伊通公也御堂の關白より五代にて宗通公の御子なり此伊通公子孫なき人也○花園左大臣 有仁公なり後三條院の御孫輔仁親王の御子也 此有仁公も子孫なき人也○みながうたえんことを 予うは族の音便にて子孫のことなり○染殿大臣 太政大臣良房御諡は忠仁公染殿とは所の名なり正親町の北、京極の西一町にありこゝにおはしける故、染殿のおとといふなり此大臣實子なくして甥の昭宣公を養子とす此人賢徳ありて陽成天皇を僞てすべらしめ其比賢徳ありし光孝天皇を立つ天皇位に即給ふにより寛平延喜と明君の出させ給ふ是良房に御子なきによりてなり○末のおくれ給へるは 子孫の先祖よりおくれ給へる愚ならんよりはたゞ子なからんにはしかじとの意なるべし此句此段の要領にして其ひとへに子なきを願ふの意にわらざるをいひぬらはせるなり○聖徳太子の御墓を云々 御墓は河内國石川郡磯長山叡福寺にあり太子傳曆云太子三回御陵勅墓工日汝斷四路除意趣有二一者爲令無大行道之煩二者我子孫爲令無日本之相續云々

〔七〕あたしの露消る時なく、鳥部山の煙立さらそのみ住はつるならひならは、いかに物のあはれもなからむ、世はさためなきころいみじけれ

此段は老年に及びて仮りにも無常を思はず貪欲深き人は只早く死なんに如かずといき

をほりて戒めかけるなるべし○あたしり云々 化野は山城國嵯峨の與愛宕の麓化野といふ墓所ありこれなるべしさるを歌には昔よりあたなる意にのみよみて名所にあらすといへるはわろしうは下の鳥部山に對してたしかに名所をいへるものと思へばなり承曆の歌合に嵯峨野をすぎてあたし野まで行きけんもとあるにて其名所なるを證すべし○鳥部山云々 京都東山にある阿彌陀が峰なるべし其麓を鳥部野といへり人を葬る所也、さてあたし野の露とはさるるといはん枕詞鳥部山の煙とは立といはん枕詞なれば露煙の下にどの字を入ての如くときくべきなり○いかに物のあはれも さる世間の哀情もなく中々に貪欲心いやすすべしとなりいかにさはさすといはんが如し

命ある者を見るに、人ばかり久しきはなし、かげろふの夕をまち夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし、つくづくと一とせを暮すはとたに、こよなうのせけしや、あかすをことおもはゞ、千歳を過すとも、一夜の夢の心地ころせめ、住はてぬ世に、見にくき姿を待て何かはせむ、命長ければ耻多し、長くとも、四十にたらぬ程にてしなんこそ、めやすかるべけれ

○人ばかり云々 人はとなり人はと長壽はなしといふは生を貪らすまじきとの下心なり○かげろふ 足手はうくとんばうの小きやうにて朝に生ヒ夕に死すはかなき虫也○夏の蟬 蟬の一種、長さ六分ばかり淡黒くして羽は透明なり此虫春生して夏死し夏生じて秋死す故に一年四季のうちの一季を一期とする意にて春秋を知らずといふ○こよ

かし「かしはすべて切れたる語の下につきて其詞をあやなしうの意を強からしむる辭なり」
だにも「だにはこれだにうれだに物を限りていふ辭なりもは軽くうへていへりのせけしや」このやは切る、語の下につきて常によといひても同じ意なる歎息のや也

成行きなん」このな
んは上にもいへる如
く物の然なるべしと
先を付けていふなん
也一書に本文あり行
きなんを成行くなん
とあり然るときはな
んはそに通ふなんに
てあさましきに應ず
るものなり

知りながら」ながら
は物の本よりあるを
取直すともせぬ意に
て何れもともせぬ意に
物にうへて云々物
するをいふ辭なり

なう 此上なくにてたぐひなき意なり○一夜の夢の あかざる心地せんとあり○長く
とも 人間の齡猶もく末ながくともとなり○四十にたらぬ程にて 老の來らぬうちに
といふ意なり其は俗に四十を老の初といへばなり是必竟無用の人は四十に足らで死な
んころよけれとなり

るの程過ぬれば形をはづる心もなく、人に出来じらはむを思ひ、夕
の日に子孫を愛して、さかぬく末をみむまでの命をあらまし、ひたす

ら世をむさほる心のみ深く、物の哀もしらす成行きなん、あさまし
き

○夕の日に 老後によせていへり夕日の入らんとするはかなき時にのみみて、あり○あ
らまし 美濃家づとに云ふすべてあらましとは行先のおとせんとせんかくせんと思ひ設
くるをいへりと○物の哀もしらす云々 長命の人はかやうにあさましくなりゆくべけ
れば只短命ならんにはしかすといふ意にて若し久しく世にあらば貪欲少く慈悲深くし
て人にも交らすつれづれにてあるべしと言外に老人の心つかひををしへたるものなる
べし

「八世の人の心まどはすと、色欲にはし、かず、

此段は久米仙人の評論をまじへて世人は仮粧にさへ迷ひ易しにして真成の色にはなほ
深く戒めざるべからずとの意あるべし○世の人の心まどはすと云々 此句は此段の大綱
にて色欲は諸欲にまさりて最世人の心をまどはすの甚しきものなるをいへりしかすと

いへるに心をつくべし

人の心はおろかなるものかな、にはひなごは假の物なるに、しほらく
衣裳にたきものすと知りながら、おならぬまほひには、かならず心と

まめさするものなり、

○おならぬ句ひ おもいはれぬ句ひ也○心とまめさする 時めくはうらろに心の動く
をいふさてこゝに香のことをいふは輕さをあげて重さを戒めんが爲なり

久米の仙人の、物あらふ女のはぎの白さをみて、通を失ひけんは、まて
に手足はたへなごのまよらに、肥あぶらづきたらんは、外の色ならぬ
はさもあらんかし。

○久米の仙人云々 元享釋書十八ニ云久米仙者和州上郡八入ニ深山ニ學ニ仙法ニ
且騰空飛過ニ故里ニ會々婦人以足踏ニ洗衣ニ其脛甚白忽生ニ洗心ニ即時墜落云
々或人こゝに墜落といへるは實に空より落たるにはあらで女に心迷ひて修行怠るをお
つると云ふ是也と云へりともあるべし○女のはぎの はぎは足のこぶらの上、ひざが
しらより下をいふ俗にいふすねなり○外の色 假粧の類也生付の色を真粧と云ふに對
していへり○さもあらんかし 仙人の眞の色に迷ひしは世人のたきものなごの仮粧に
迷へるよりは尤なりとの意なり畢竟色には迷ひやすきといふ緒を立て此次の段にて深
くいましめたり

髪カミのめメでたからむム「枕草紙第八に「髪な
りかカくクうウるルはハしシうウさサが
どドいイへヘるル心ココロをヲうウけ
てテかカけるケルなるルべベし

いもイモねネずズ「万葉一に
「兼毛カミモ宿良ヤクヨ目メ八方ヤチカタ」と
ありて略解に「いはね
入る事也」といへり
おもオモひヒたタらラずズ「枕草
紙第四に「いさイサか
何ナニともトモおもオモひヒたタらラずズ
とありて思ひてあ

らすの意にいへり
六塵ロクジンの樂欲ラクヨク「樂欲は
好み思ふの意なれば
樂ラクの字ジけケらラをヲよヨむムべベきキ

「九」女は髪カミのめメでたからむムころ、人のめたつべかめれ、

此段にはすべて女の心づかひ深く人に思はるべき子細をいへり飯のものにさへ心を迷
はす習ひなればまじかやうの事には心をまよはさす自ら恐れよとの意なり○髪カミのめ
でたからむ 色黒く長さをいふ○めだつべかめれ 目をたてゝ見るべかりけれとなり
是より眞の色の迷ふべきさをいへり

人のほご心ココロはへなごは、物モノうちいひたるけはひにころ、ものをこしにも
しらるれ

○心ココロはへ 心延ココロノヒキの意にて心のひき延ヒキノビて出る趣をいふ意といふも同じ○ものこし 物
へだてたる所なり其人品のよきと心さまのおくのかしきは物いふけしきのもてしづめ
たるにて物へだてゝもおしはからるゝとなりうちは助語にて意なし下のうちあるのう
ちも同じ

ことコトにふれて「うちあるさまにも人の心をまごはし、

○うちあるさま 常にあるさま也女は何事につけても人を迷はすの深さをいへり

すべて女のうちとけたる「いもイモねネずズ、身ミをヲしシともおもひたらず、たふ

べくもあらぬわさにも、よくたへしのおは、たゞ色イロを思ふが故なり、誠
にマコトニ愛アイ着ツクの道ミチ、其根ネふかく源遠ゲンエンし、六塵ロクジンの樂欲ラクヨクおほしといへども、皆厭

離ワカしつべし、うの中ウチノナカに唯ただかのまごひの「一ヒト」やめがたきのみぞ、老オシたる
も若わかきも智ちあるも愚ぐなるもかはる所なしとぞ見ゆる

○すべて女のうちとけたる すべて女の心ありて打とけかゝりたるときはいよく男
の心をまよはすものにて男はよの目もねず命をすてゝもあきたらず思ひかたき事をも
よく堪忍するはひたすら色を好むが故なりとなり是を女の男を思ひいるゝことにいひ
又色を思ふは氣色様体などあしからぬ様にと思ひて夜は打とけて寝いらぬなをいふは
上下のかけ合はるし○誠マコトニに 上をうけて下を起す詞なり○其根ネふかく源遠ゲンエンし 人の心
に愛着の絶えかたきこと草木の根ざし深くして絶えかたきが如く川の水カハノミヅ源ネとほくして
汲干ヒキヒしかたきが如しとなり○六塵ロクジン 色聲香味觸法を六塵とす此六つを塵といふは眼耳
鼻舌身意の六根をけがしうこなふ物なれば也就中法塵とは色聲香味觸の五つは意の分
別によりて善惡の業となれば今うの意根にて此善惡の諸法を分別する能はざるを法塵
といふ也

されは女の髪カミすぢスヂをよれる綱ツナには、大象オウゾウもよくつながれ、女のはける
あしたにて作れる笛フエには、秋の鹿シカ必カナラよるとぞいひ傳ツタへ侍サマる

○女の髪すぢをー大象も云々 女の髪すぢにて大象をつなぐこと大威徳陀羅尼經第十
九云乃至以女人髪カミ爲ス作ス綱ツナ維ヰ香象カウゾウ能ス繫ツナ現ア丈夫ヤチウフ輩ハヒ云々○女のはけるあした云
々 是は美女或は名ある遊女などのあしたにて作れる鹿笛には秋の鹿よりくること必
定なりと古諺にいひ傳へたりとぞさて此意は獸さへよくつながれ必よるまして同類な
るものをやと女人の惡業の深きことをあらはして次節に戒めん爲なりよくの字必の字

に心をつくべし

みづからいましめて、さうするべく慎むべきは、この色紙ひなりの

○みづからいましめて 自らの字眼目なり女色のまをひは我と我心を制して戒め慎むべしとなり

二〇家居のつきとくしくあらまほしまことう此世はかりのやどりとは思へど興ある物なれ

此段家をつくる心ばへはたい何事もつくろはで自然なるころよけれどこ〇つきとくしくつきよくといふ意なり又つきくしくにて中門築地などのとりつき次々によき意こどもさへり

よき人ののどやかに住なしたる所は、さし入たる月の色も、一きは身二みづくと見ゆるぞかし

○のどやかに住なしたる 是即ちつきとくしくさなり〇一きはしみとく 所がらによりて深く愛せらるゝ意こ

いまめかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わさとならぬ庭の草も、心あるさまに、すのこすいがいのたよりをかしく、うちある調度も昔ればはてやすらかなるころ、心まにまじとみぬれ

○わざとならぬ わざととりつくろひてうゑなしたるにはあらぬ〇すのこ 貞丈雜記に云篋子は座敷の外に細き板を横にあらべて打たる縁也板と板との間すき間ありて竹篋をのみたる如くなり〇すいがい竹などよて透したる垣也すいがいはすがきの音便也〇うちある調度 常にある調度にて即ち手廻りの道具類之貞丈雜記に調度はでうとどにこりて云ふこといへりうちはつよめ詞にて意なし

多くの工の心を盡して、みがきたて、唐の大和のめづらしく、ゆならぬ調度をもならべれき、前裁の草木まで、心のまゝならず造りなせるは、みるめもくるしくいとわびし、さてもやはながらへ住べき、又時のまの煙ともなりなんとぞ、うち見るよりれもはるゝ

○多くの工の云々 以下は兼好時代の奢を極めし風俗のあしきを下心にこめていへり
○前裁字の如く家の庭前に草木を栽るをいふ〇さてもやは云々さてもいつ迄命ながらへ住べきやはさはあらじとなり〇又時の間の煙多くの工といふに對して出来る時は大儀にてはるふる時は暫時の間なりしはかなき事をいへり當時亂世なればるの世の衰賤にてしかいへりといふは非也

れはかたは家居にころ主とさまはれしは推からるれ

○おほかたは云々 大体は家居にて主の心ばへはれしはからるゝものなれば家居はつさくしくあらまほしき物となり是決前生後の詞て

唐の大和の「此のは」とつらぬるのにて下の調度へついでてめつらしくえならぬ唐の調度とも大和の調度とも云々ときく意也

やは一かとは同じく上の語を打返して意うらへかへる辞なれど此辭は空のあたり勢によりて表を押ふる意あり

何かは「かははやは」と同じく「打返し」の辭なれどおしなべたる理によりて靜に表を押しふる意あり
まことや「このやは」歎息のやにてかく躰の語の下にあるはかなどもいふべき意也
新古は「あはれなるわが身のはてや深みどりつひには野べの烟と思へばとあるやに同じ
人の語りしころさてはいみじくころ」是はころを二つたゞみて一つの辭にて結ぶべきをその辭を下のころにふくめて切る也

使はりを云々たりしころ「此ころの係りは末文のしかに應ずるものにてうの間にましかばの係りあれば即ち二重にとゝのふる辭なり
此木なからましかば「玉緒に云ましかば」は下をまた必ましかば結ぶ例なりとさればましかばと止れる下はるの意をふくめて云々とさく格なり

いひなくさまんころ云々「玉緒云ころ」を受けて結ぶには力有てものをと云意にちかし

〔二〕後徳大寺大臣實定の、寢殿に蔭るさせじとて繩をはられたりけるを、西行が見て、蔭のゐたらんは何かは苦しかるべき、此殿の御心さばかりにこそとて、其後は参らざりけると聞侍るに、綾小路宮性基のれはします、小阪殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かの四行が見限りシためし思ひ出られ侍しに、まそや鳥のむれるて池のかへるをとりければ、御覽じかなしませ給ひてなん種チヒカレナルと人の語りしころ、さてはいみじくころとおほゆしが、徳大寺にも、いかなるゆるか侍りけん、

此段前段に家居にて主の事様はおしはからるゝといへるを受けてうれにもまたよらぬ事あれば外より見たる人らの家居に少し見にくき所ありとて偏にうの主を見かざるべからすとの事をいへり是即ち上に大方は云々といへる意を明せるなり○兼殿 正殿也今の書院の如し○何かは苦しかるべき何の苦しかるべき事は苦しき事にはあらじと也

〔三〕神無月の頃、栗栖野といふ所を過て、ある山里に尋入事侍しに、遙なる昔のはそ道をふみ分入で、心ほうく住なしたる庵あり、木葉コノヒナレバにうづもるゝかけひのしづくならでは、露れとなふものなし、関伽棚に菊紅

葉をぞ折ちらしたるは、さすがにすむ人のあればなるべし、かくてもあられけるよと、哀に見るほほに、かなたの庭に、大なる柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まはりをさびしくかこひたりしころ、すこしことさめて、此木なからましかばユカセカラマシカとれほゆしか

此段も前段と同じく家居につきての事さまをおしはかりたるなり○神無月陰曆十月の異名也此時節を書出すは山中の物さびしく感情もふかきをいはんとて也○栗栖野山城國醍醐の邊にあり○遙なる昔の細 道を云々は庵に住む人がふみ分入て心ばうくするにて道もなき深山を始めて開きしと云 ○関伽棚佛具をすゝぎなとする棚也梵語にて氷をわかといへり○すこしとさめて、此すこしの言ひとへに見おとさぬ意なり

〔三〕おなじ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしき事も世のはかなき事も、うらなくいひなくさまんころ嬉しかるべきに、さる人有まじければ

此段心の同じき友のなきをいふにつけて友に上中下の三品あるを論じ當時世には心を同じうする友なければ畢竟は古人を友として徒然を慰むべしとの意を後段にとき明せり○おなじ心ならん人と 以下嬉しかるべきまでは此一段の序文ともいふべしただへありても氣にいらぬ所は言外の意味にあきらかなり○うらなく 裏なきにて隔心な

きなり○さる人あるまじかりければ さやうの人あるまじければうの外は云々と前を
決し後を生ずる詞なり是までは眞實の心の友即ち上等の友のさまをいへり

露たがはざらんとむかひ居たらむは、獨有心地やせん

○露たがはざらんと云々、此方の心に少もたがはぬやうにと思ふ友と○獨有心地や
せん 反は互にいひ争ふところ賊の友ならぬを我しだいなるは獨有ると同じと是
は下等の友のさまなり

なくさまめと」是は
上にころといひてろ
の定りの結び辭にて
切れたるをどへうけ
て下へつやけたるな
り後撰三」ともにこ
ろ花をも見めどまづ
人のこの物もあにを
しき春かなといへる
が如し

たがひにいひんはそのをば、けにと聞かひある物からいさかた
がふ所もあらん人ころ我はさやは思ふなぞあらうひにくみさるか
らさぞとも打かたらはぶ、つれぐなくさまめと思へど
○たがひにいひんはその云々 此一節は中等の友を論せり○あらうひ思ふ 是は只
物をつゝますいひあふ意にて眞實にぬみにくむにはわらず或云みかぬ理をにくむ
こと

わびしきや」このや
は歎息のやにてこと
よといふ意也

けにはすこしかこつかたも、我とひとしからさらむ人は、大方のよ
しなしでといはむほはそころあらめ、まめやかの心の友には、はるかに
へたゝる所の有ぬべきぞわびしきや
○げにはすこしかこつかたも 以下總論なり實に心の同じからざる中等の友には少し

かこつ方もあればいさゝか慰むたよ、うともなれを底意より打とけたるならねば只世
間大体の由来もなき事いはん間ころさうといひ慰む事あらぬ眞實の心の友には大にべ
だゝる所あるが危しくつらしとこかくいひて下等の友のかひなきを含めたりかこつは
前にいふ、あらうひにくむ意也

二四ひとり燈火のものとにふみをひろげて、みぬよの人を友とすること、
こよなうなくさむわさなれ、ふみは文選のあはれなる巻々、白氏文集、
老子のては、南華の篇、又この國の博士どものかけるものも、いにしへ
のは哀なるて多かり、

此段は前段に同じ心の友なきをいへるをうけてみぬ世の人を友とすること畢竟はなく
さむ業なれといへり○ひとり燈火のものとに云々、これ兼好がつれづれを樂しむ本意に
てひとりといひ燈火のものと、いひ文をひろげてといふ皆閑寂なる意あり○文選 周の
末より六朝までの詩文を集む三十卷あり梁武帝の子昭明太子の撰する所なり○白氏文
集 唐の白樂天が詩文の集なり五十卷あり○老子のこと葉 老子は楚國苦縣の人なり
其書上下二篇五千余言あり一字を一言とする故にこれをことばといふ道德の意をの
べたり○南華の篇 宋人莊周の著す所三十三篇あり皆老子道德の意に本づけり其書を
南華真經といふは莊周遂に曹州の南華山にかくれたる故なり○いにしへのは 古代を
慕ひて今人の學の疎なるをいひあらはせり

二五和歌ころ猶をかき物なれ、あやし賤山がつのしわさもいひ

こよなう」此詞前段
の友にあたりて書け
り心をつくべし

いづれは面白く、おろろしき猪のしゝも、ふすむの床といへばやさしくなりぬ

此段は前段の詩文にもまざりてをかききものは和歌といひてまづ和歌の徳をほりて其和歌も今のは古へに及ばずといひて今の世をいひなげ、りうの意味のふかきを知るべき。○和歌こゝ猶をかきき云々 猶の字は前段にわたりて書けり和歌の徳は猶ら類なるべし。○ふすむの床 臥猪の床也歌にかるもかきふすむの床なぞつゝけたり猪は枯れたる草をかきあつめてふすものなれば也

「や」此列は問ひか
くる列にて玉緒に是
は必上に何等の疑の
てにをはをおきて不
と切るゝなりといへ
りやは歎息のや也
「とかや」接續のどに
疑のかの合しまた歎
息のやのうはれるな
れば此かはやらんの

意にて下へいひつゝ
くるを例とす又詞の
結びとなりて切れた
るもありうはかに切
るゝと續くとの別あ
ればなり

いさや「いさのさも
と清みてよむべし濁
るは誤なり

此頃の歌は一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、詞の外に、哀にけしきおほゆるはなし、貫之が、糸による物ならなくにといへるは、古今集の中の、歌くづとかやいひ傳へたれど、今の世の人の、よみぬべきことがらとはみはず、うの世の歌には、姿言葉、このたぐひのみおほし、此哥にかぎりて、かくいひたてられたるもしりがたし、源氏物語には、ものとはなしにとぞかける、新古今には、のこる松さへ峯にさびしきといへる哥をぞいふなるは、まことにすこしくたけたるすがたにもや見ゆらむ、されど此哥も衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰下されけるよし、家長が日記にはかけり

○一ふし 一節二の取所ある新しき作意といふいかにや、いかなることかと下の覺ゆるはなしよりかへりてさく意之○詞の外に哀に云々 詞の外に哀なる氣色は歌の餘勢といふものなり○貫之が糸による云々 貫之は孝元天皇廿八世の孫紀望行が一男也古今集第九輯旅部に東へまかりける時道にてよめる貫之「糸による物ならなくに別路の心ほろくもおもはゆるかな○物とはなしに 紫式部がかきかへたるは若此詞なせわしきにや知りがたしと之○のこる松さへ 新古今冬の部に春日社歌合に落葉といふを詠奉る祝部成行「冬のきて山もあらはに木のはふりのこる松さへ楡にさびしき○衆議判 和歌所にて判者を定めず歌人より合て評議批判するをいふ○沙汰 此字はすなをもちろへたるより出て理非を分つ事にいへり一説にさはは定めてふ詞なり沙汰とかくは當子也とぞ○感じ仰下され云々 後鳥羽院の感じ思召れたるよし仰下されしなるべし○家長が日記 土御門天皇の御宇に源家長和歌所の開闢とありて記ま

歌の道のみ、いにしへにかはらぬなといふ事もあれといさや、今もよみあへるおなじ詞、歌枕も、むかしの人のよめるは、さらにおなじものにあらず、やすくすなほにして、姿もさよけに、あはれもふかく見ゆ

つかうまつる「つかうはつかへのへを音便のうによびたるを

をとり「雅言集覽に云古言梯におどりとかきて大はこりの略なりといへるはしひことなりこれはをこといふ詞のうつりたるなりと言長がいへるによるべし

「二八山寺にかき籠りて、佛につかうまつるころ、つれづれもなく、心の濁もきよまる心地すれ」

此段は前段にもいへる如く寺社などいへる餘意にして世をのがれ山寺などにこもりて常に佛を禮拜し念佛誦經にわかしくらす人は行ひひまなくしてさびしき事もなく心も清くすみわたるべしと云

「二九人はおのれをつまやかにし、をとりをしりぞけて財をもたず、世をむさぼらざらむぞいみじかるべき、昔よりかしこき人の富るはまれなり」

此段は前段に心の濁りも消えるといへるを受けてなべて人は己が身に美麗を好まず儉約を専とすべきをいひ許由孫晨などの何證をわけて唐土上代の風俗をほめ我國當時の風俗の衰退せるを歎せり

もろこしに許由といひつる人は、更に身にしたるがへるたくはへもなくて、水をも手してさへけて飲けるをみて、なりひさこといふ物を、人のゆさせたりければ、ある時木のゆたにかけたりけるが、風にふかれてなりけるを、かしかましとて捨つ、又手にむすひてぞ水のみける、

いかばかり心のうちすむじかりけん、孫晨は冬月に衾なくて藁一つかね有けるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり、もろこしの人ば、是をいみじとおもへはこそ書二むしるしとめて世にも傳へけめ、これらの人は、語りも傳ふべからず

○許由 堯天下をもづらんと給ひたれをうけずしてさる事莊子に見たり○水をも手して 水をも手を以てさしわけのみけると也手してのしてはを以てといふ意のして也○手にむすひて 手をくばめて水をたむるをむすふといふ即柳の字也○孫晨 家貧にして蓆を織りて業となし詩書に明らかなり京兆の功曹となる云々と蒙求に見たり○これらの人 今の世の我朝の人をいふにや我朝たといひ許由孫晨の如き人ありとも狂妄の者と見なし語りつたふる事あるまじと也これもろこしの上代のすぐれたるをほめ本朝當世の風俗のおとろへたるを歎息したる也

「三〇をとりふしのうつりかはるころ、物をとにあはれなれ」

此段は四季變遷の次第をかきて人生の常なき事を觀し折にふれては皆佛道修行のたよりとなる事をいへり○ものごとにあはれなれ 何一つすつべきものなく皆面白き意なり
物の哀は秋ころまされと、人をとにいふめれど、うれもさるものにて
今一きは心もうきたつものは、春のけしきにころあめれ、鳥の聲など

をとりふしの云々「新註に云此段に三つの奇妙あり一には四季の次第をいひは、春より書初めて冬にて終るべきに却て秋よりはじめて又春にて書をはれる是人の及ばざる所二には秋と冬の間に言ばをに入れて冬の景物すくなけれど多きやうに

萬のことは月見るに
ころ一瞬に云四季の
萬の變相を思へば月
のみ不變にして心は
なぐさめといひて先
は花に對したる月を
いふならし
水のけしきころ云々
一人は水を樂み
人は水を愁ふ人は
水にして見る人の心
に喜愁の二つありよ
く心をつくべし

「三」なにがしとかやいひし世すて人の此世のほたしもたらぬ身にた
く空の名残のみぞをしまといひしころ、誠にもおほらぬべけれ、
此段は世捨人さへ四季の變遷に心とめし事をかきて前段四季の景氣の誰も弄ばでか
なはぬ事をいへり○此世のはだし世をのがるにさわりとなるべき浮世の事をいふ
いふ○うらの名残のみぞをしま年月のうつりゆく空を名残をしく思ふなり西行の如き
名利をはなれ浮世に毛頭執心なき人も秋の夕の景には心を動して「心なき身にもわは
れは知られけり鳴立澤の秋の夕ぐれ」とよみ出しも此意なり

「三」萬のことは月見るにころ、なぐさむものなれ、或人の月ばかりおも
しろき物はあらじといひしに、又ひとり露ころ哀なれとあらうひし
ころをかしけれ、折にふれば何かはあはれならさらむ、月花はさら
なり、風のみころ、人に心はつくめれ、岩にくたけて、清く流るゝ水の
けしきころ、時をもわかすめたけれ、沅湘日夜東に流去、愁人の爲
にとまるるしはらくもせずといへる詩を、見侍しころあはれなり
しか、
此段は四時の景氣の外に時をもわかす詠ふべきものあるをいへり哀の字に心をつくべ

し○萬のことは月見るにころ 萬事のうさもつらさも月見るになぐさみて感起すも
のことろ○をかしけれ 此をかしはるしりわらふ義也○風のみころ 春夏秋冬の日夜
朝暮につけてるの時節を感せしむるの意也○時をもわかす 孔夫子の川の上にて見
給ふ意にて不舎晝夜「光采いかでかめでたからさらん」○沅湘日夜東に流去 唐の戴
叔倫が詩也是は叔倫が水を見て己がうらみをかこちたるにて同じ水也といへども哀樂
立所にたがふ畢竟折にふれば何かはの意なるべし

嵇康も山澤にありびて、魚鳥をみれば、心たのしむといへり人遠く水
草清き所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむとはあらじ

○嵇康も山澤にありびて 以下は兼好の存念をいひあらはしものにて前に種々の樂
みをいひしも畢竟は世の交りをやめて閑に山水をもてある嵇康の樂みに如かずとの
意なるべし嵇康は竹林七賢の一人なり

「三」何事もふるま世のみぞしたはしき、今やうはむけにいやくころ
かりめくめれ

此段は前段に風景の變らぬものをいふを受けて人事の變じ易く古今のかはりあること
をいひて當時を感したる也

かの木の道のたくみのつくれる、うつくしきうつせものも、古代の姿
ころををしと見ぬれ

かの木の道の云々
かのは指示代名詞
なれば源氏筆木に彼
木の道の工の萬の物

を心にまかせてつくり出すもといへる詞にてかけるなるべし

こういひしを「是は」
この係りを結ぶ格にてうの結び
辭ををにふくめて受けながら下を起せり
玉緒にこのをばもの
をといふ意也といへり
下のをとも同じ
をば「是は」をばと打まじへたる辭にて
をとのみいひて聞ゆる
處又はどのみいひて
聞ゆる處をもをばといへりこゝはをにちかし

○かの木の道のたくみの云々 古代の器の細工は別に色々のたくみもなくしてしかも約かこど木の道のたくみとは大工番匠の類

文の詞かぞぞ昔のほうでぞもといふじま、たゞいふをを、口をし

うこそかりもてゆくかれ、いにしへは車もたけよ、火か、けよとこ

いひしを、今やうの人をもてあけよ、あきあけよといふ、主殿寮の人

數たてといふべきを、たちあかししろくせよといひ、最勝講の御聽

聞所あるをを御かうのる、さういふべきを、かうろといふ口をしと

ぞふるき人はおほせられし

○主殿寮の云々 主上別殿に行幸せさせ給ふ時主殿寮二人立明をとりて供奉せり之を人数だてといふ○最初講 清涼殿にて最初王經を講せらる東大寺興福寺延暦寺圓城寺四ヶの大衆まわりて行ふ也○ふるき人は云々 此に古き人はおほせられしといひて後段に徳大寺のおとといと名乗たるは當時をはむるは誰とてはむべく當時をうしるは名をさしていひがたければなるべしこれ文章の虚實にて讀者の殊に見どがむべき所也
〔二四〕おとろへたる末の世とといへど、猶九重の神さびたる有さまこり、世づかぎめでたきものかれ
此段は前段を受けて末世といへど禁中の有様はさすがに古への風俗今に残りて愛で

たしとろ○九重 禁中をいへり皇居には九門あり又一條より九條までひらけり○神さびたる 神祇より發りたる詞にてすべてふるめかしく殊勝なる體をいふ○世づかぎ世をはなれて尊き意也

露臺朝餉何殿何門かぞは、いみじとも聞ゆべし、あやしの所にもありぬべき小菰小菰敷高遣戸かぞめめでたくこころさこめれ

○露臺 内裏御殿の間の名なり歌には露のうでなどよめり○朝餉 主上に朝の御膳を奉る所なり○何殿何門 内裏の殿門數多ある故に一々に其名をいはぬ○小菰 主上殿上を御覽せらるゝ所なり○小菰敷 殿上の南面の前の階上に板間あり之をいふ○高遣戸 今は清涼殿の坤の廊下の間にあり

陳に夜のまうけせよといふこころいみじけれ、夜御殿のをば、かいともしとろよかといふ、又めでたし、上卿の陳にて事おこかへるささ

かり寒き夜もすがら、こゝかしこに睡るたるこころをしけれ、

○陳に 陳の座に也節會を行ふとき諸卿の座する所也紫宸殿の西にあり○夜御殿のをば 夜御殿とは天子の御寢所之御璽をねかるゝ故にいつも灯をけさす是をかいともしとろ

したりがは「知りた」
りがはの略言「すがら」
夜もすがら「すがら」
は盡るより轉じて其
事物の終るまでをい
へるなれば即ち終夜
なり

内侍所の御鈴の音を、めめたく優かる物ありとぞ、徳大寺の太政大臣、
とおほせられける、

○内侍所 神鏡を安置せさせ給ふ所也賢所ともいへり又温明殿とも申とかや終に此事
とするせるは天下安泰の瑞相なる事をいへるなり

三三 齋宮の野宮におとしまを有さまころ、やさしくおもしうまことのか
ざりとおほほしく、經佛をいみて、かかに染紙をいふかるもを
かし

此段は前段の末に神道の事をいへるを受けて上代の余風をしたひ神道のめでたき事を
いへり○齋宮 内親王を天照大神の御杖代に定め奉らせ給ふ事也(御杖代とは天子の
親しく祭らせらるゝに代りて神を扶け奉る義なるべし)加茂にも齋院とて此例あり一
本に齋玉とある時は伊勢加茂兩所にかゝる也爰は齋宮といへるがよろしとぞ○野宮に
おはします 此宮を下定とてうらなひ定められて二年目の八月より明る年の八月まで
野宮におはしますとかや伊勢の齋宮の野宮はありす川の邊にありとぞ、○なかご 佛
を中子といふは心をもて宗意とするの意なるべし古へ心をなかとよめり○染紙 經
を染紙といふは黄卷朱軸にいたす故なり

すべて神の社ころ、をてがたくかまめかじきものかれや、物ふりたる
杜のけしきもたゞあらぬに、玉がきしわたして、さかきにゆふかけた
白木綿

すべて神の社ころ
以下なれやまで此段
の要領とす
さかきにゆふかけた

る「神に神を奉るこ
とは日本紀に句句廻
馳と有り神の事之此
木は風吹けども葉を
ひるがへさす正直な
るによつて木の最上
とするこ

るかといみじからぬことをかしきも、伊勢賀茂春日平野
住吉 三輪 貴布禰 吉田 大原野 松尾 梅宮

○玉がき 玉ははめていふ詞瑞垣と意同し神祇本源に大社瑞垣一重珠垣二重と見ぬて
もと瑞垣と玉垣とは別なるを近世は一重なるをも通じて玉垣といふ事となれり○さか
きにゆふかけたる さかきは神とも賢木ともかけりゆふは寶基本紀に謂て以穀木
作、白和幣名三號木綿と見ゆ是之○伊勢 内宮は天照皇太神宮度會郡宇治にあり外宮
は豐受太神宮同郡山田にあり○賀茂 下鴨は御祖神糺宮と申す上鴨は別雷神○春日
四所之第一は武雷命第二は齋主命第三は天津兒屋根命第四は姫大神之大和添上郡にあ
り○平野 五座之第一は今木神第二は八度神第三は古關神第四は比賣神第五は縣神山
城葛野郡北野の西にあり○住吉 四所之第一は底筒男神第二は中筒男神第三は表筒男
神第四は神功皇后攝津住吉郡にあり○三輪 大己貴神一名大物主神大和國城上郡にあ
り○貴布禰 水神之山城國愛宕郡にあり○吉田 四座之祭神春日に同じ京都神樂岡に
あり○大原野 祭神春日に同じ山城國葛野郡にあり此山を小鹽山といふ○松尾 二座
之第一は大山咋神第二は市杵島姫神葛野郡にあり○梅宮 四座之第一は酒解神第二は
大若子神第三は小若子神第四は酒解子神之葛野郡にあり

飛鳥川の「のは物に
さしつけてるの如く
云々とさくのをさ
ばふちせは常ならぬ
形容詞と見るべし

三三 飛鳥川のふちせ常からぬ世にしあれを、時うつりそさり、たのしひ
かあしび行かひて、はかやかかりしあたりも、人をまぬのらとあり、
はらぬ住家は、人あらたまりぬ、桃李物いはねを、誰とともにか昔をか

なかりけん」このけ
んは體言へつづく格
なればたであらうと
いふ意に見て其とい
ひて下へつづく意

京極殿「拾芥抄云士
御門南、京極西、南
北二町其南一町被
入道長家」
法成寺「五條河原に
あり或は今の十三
間堂の南にもてに
りしと聞傳ふる由に
もいへり
ねぼしてんや」すべ
てんやといひかゝる
ときは皆反語とされ
ばおぼしてんやはど
いひておぼしはせじ
といふ意を含めたり

たらん」見及ヒタルモノサハ此ノ如シ
まましてみぬいにしへの、やむとなかりけん跡のみぞいとほか
なき」

此段は前段に神社の事をいへるをうけて佛閣の事に及びるの流敗をいひて以て世の常
なきことを知らしめたり○飛鳥川のふちせ あすか川は大和高市郡にある名所にて古
今の歌に「世の中は何か常なるあすか川のふのふちぎけふはせとなる」なきふちせさ
だちらぬ事に多くよめり

京極殿法成寺など見るころ寺ノ人ノ志とゞまりツツ變じにけるさまは哀な
れ、御堂殿の作りみが、せ給ひて、莊園おほくよせられ、我御ぞうの
み、御門の御うしろみ、世のかためにて、行をるまでモアレカシとおぼしれまじ
時、いかならん世にも、かをかりあせはてんとは御堂殿ねぼしてんや、大門ヤ
金堂など、ちかくまで有しかと、正和花園の比南門はやけぬ金堂はうの、
ちたふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし、無量壽院はか
りぞ、うのかたとてのこりたる、丈六尺の佛九体、いとたふとくてなら
ひははします、行成大納言の額、兼行がかける扉、あさやかにみゆ
るぞあはれなる、法花堂などもいまた侍るめり是も又いつまでか

あらん、かはかりの名残たになき所々は、れのづから石ずるばかりの
ころもあれど、さたかにしれる人もなし

○京極殿法成寺 ともに御堂關白遵長公住給ひし古跡なり○志とゞまり 後の世まで
と思ひおく志○庄園おほくよせられ 寺領を法成寺へ多く寄附せられたる○御門
の御うしろ見世のかため 攝政關白大臣などといふ○あせはてん 八雲抄にあせるは
かはり損ずる義也とあり○大門金堂 大門は惣門也金堂は本堂をいふ○無量壽院 阿
彌陀を安置せらるゝ故に無量壽院と名づく無量壽は阿彌陀の譯語なれば○佛九体
九品の淨土にかたどれり○行成大納言 藤原行成卿之能書にて道風佐理と共に三跡と
稱せらる○兼行 藤原兼行之能書能書相兼し人○かばかり 法成寺の事をさす

されは萬に見ざらん世まで後ノを、れもひれきてむこそ、はかなかるべけ
れ、

吹あへず」此すは未
然言より受けて、ズ
ズズと活く第
二階の積用言なれば
其下にテもじをうへ
てズテとさくべきこ

○されば萬に見ざらん世までを云々 此句一段の要領にてかゝる無常の世の中に知ら
ぬ行末の事を念頭に思ひ念頭にせんとはかひなかるべしとはかなきはかひなき意
三七風も吹あへず」うつらふ人の心の花に、なれにし音年月をれもへ
は、あはれと聞し言のはとに忘れぬものから、我世のほかに成行な
らひこそ、なき人のわかれよりも、まさりてかなしき物なれ、

此段は前段に家居などの常なきをいふをうけて人の心のはかなく遷り易き事をいへり
○風も吹わへず 古今貫之「櫻花とくちりぬともおもほはぬす人の心を風もふさわへぬ」
又小町「色見ぬでうつろふものは世の中の人の心の花にふありける」此二首の詞にて
かゝれたりと見ぬたり吹わへずは吹はてすての意に○我世のはかに云々 別世界にゆ
き別れたるやうに相見る事のかなはざる世のならひなるをいへり

されば白き糸のそまんをかなしび、路のちまたのわかれん事をな
けく人もありけんかし、堀川院の百首の歌の中に、

昔みし妹が垣ねは荒にけり一つは交りの藁のみして
さびしきけしきさる事侍りけん、

○白き糸の云々 淮南子「云揚子見遠路而哭之爲其可以南可以北墨子見練
絲而泣之爲其可_レ以黄可_レ以黑高誘注曰憫其本同而未異今此故事をひきて人
の心の始めありて終りなく色々にうつりやすき事をいふなり○昔みし妹が云々 此歌
は藤原公實卿の歌にて望の題なり是も生別をかなしめる歌なれば引あはせてかけり又
さびしき事には皆すみれをとり合する習ひに

〔二八〕御國讓の節會行はれて、劍璽内侍所（新帝へ）わたし奉らるゝ程こそ（今日）かざ
りなう心ほそけれ、
テノ御位ト思ヘバ

此段前段に人心の變遷常なきをいへるをうけて天子の御上にも猶其事あるよしをいへ

り○御國讓の節會 御讓位の儀式也○劍璽内侍所 三種の神器是也劍は天彗雲劍又草
薙劍といふ璽は八尺瓊曲玉内侍所は八咫鏡也さて新帝へ授け奉らるゝものは劍璽は常
に夜御殿に内侍所は實所に安置せらるゝと雖天祖手授のものに劍は尾張に璽は宮中に
鏡は伊勢にありて今に嚴然として動き給ふ事なしと云

新院の（御位ナ）ありむさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや（院ノ御所ナ）「（イフ御歌ニ）

とのもりのとものみやつこよそにして掃はぬ庭に花ぞ散しく、

今の世のそしけきにまぎれて、院には参る人もなきぞさびしけなる、
かゝるをりにぞ人のこゝろもあらはれぬべき、

○このもりの云々 主殿寮の下司なる伴氏の御奴也禁庭の掃除などする役人也よりて
どのもりのとらへていへり園造とならべとなふる伴造とは別也○かゝるをりに云
云 人の心はうすきものにてかやらのうつりかはる所にてこそ忠不忠もあらはるべし
れと兼好全く我身の忠心をつゝみて今の人の勢ひにつけるをうしれると或説に院の御
心もかゝるをりに知れたることいへるはわろし

〔三五〕諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ、倚慮の御所のさまなど、板敷を
さけ、あしの御簾をかけて、布のもかうあらしく、御調度をもお
ろそかに、みな人のさうぞく、太刀平緒まで（落ニカハナテ）ことやうなるぞゆゝしき、
東

此段前段の次手に諒闇のそりの哀なることいもどわけて世の大變なることをいひ知らせり○諒闇 天子の喪にこもらせ給ふそり也○倚廬 諒闇の時の皇居也○わしの御簾伊豫簾なり○布のもかう 言海に云もかうは御簾の上邊にうへて帛を横に長く引き延ぶるものにて後世にいふ水引の幕の如きもの也○禁中諒闇の時には鈍色の細布を用ひらるこれを布のもかうといふと○さうさうく 鈍色を用ふ○太刀 黒作り銀かな物なり○平緒 装束の前につくる緒なり諒闇のときは無文鈍色或は香色こといへり

〔三〕靜に思へば、萬に過にし方の戀しさのみぞせんかたなき

此段諒闇のことをいふに次ぎて過にし方の戀しさをいひつづけたり

人じづまりてのち、長き夜「チラレナイ」の「手」さびに、何となき具足「ヨロソ」とりしたゝめ、のこしおかじと思ふ反古なぞやりすつる中になき人の手習ひ、繪かきすさびたる、見出たるころ口う「ハ」のをりの心地すれ、此頃「世」ある人の文たに、久しく成ていかなるをり、いつのとしなりけん、とれもふは哀なるぞかし、手なれし具足「何」さども、心もなくて、かはらずひさしき「音」とかなし、

○とりしたゝめ とりとゝのへ也○只うのをりの云々 彼らの人の生きてありしをりの也只とは一向に其やうなきの意也○手なれし具足なども なき人の手なれし道具なき

具足「貞丈雜記に云具足とは萬の物の惣名云々具足とはうなはりたれり」といふにても彼は取揃てかげのなきを具足といふこ
此頃ある人の「上のなき人に對しての文

をの残りて目にふるればかの古人の「かたみころ今はあだなれこれなくは忘るゝ時もあらましものぞ」とよみし歌の意にていとかなしきこ

〔三〕人のなきあとばかりかなしきはなし、

此段は前段の末になき人の事をいへるをうけて人の死したる後のつひには跡はかもなくなりゆく様をのべて夢幻の世をいひさとせり

中陰のほど、山里「ノキ」をさうつろひて、便あしく、せばき所にあまた「目」あひるて、後のわざ「死」ともいとなみあへる心あはたゞし、日數「中陰」のはやく過るほど物にも似ぬ、はての日は、いとなきけなう、たがひにいふ事もなく、我かしこけに物ひ「別」きたゝめ、ちりぐゝに行あかれぬ、もど、すみかにかへりてぞ、更にかなしきまはははかるべき

○中陰 人死して未來生の中間に先五陰（色受想行識）のかたちを得る故に中陰と名付く其間七々四十九日、法事をつとむる事は佛家なべて衆生をして惡所へおとすまじきとの用意なりといへり○山里なぞにうつろひて云々 昔は人死て中陰の中は我家を出て一門中一所に集り跡とふ業をいとなみしとこ○行あかれぬ 別々になりて退散するこわとあど普通す

しかぐの事は、あなかしこ跡「目」のためいむなる事ぞなきいへるこ

しかぐ「云々とかく詞多し略していふ辭」

何かはと」とはもと
續用言なれば語末に
あるときは其下に見
る聞く思ふなごの意
味を含蓄せり

「（其ミ）何かに、何かは」と人の心は猶うたてればゆれ、年月
へても露わする、にはあらねど、さるものは日々に疎しといへるも
なれば、さはいへど、その（死シタ）きははかりはればぬれや、（アラシ）よこなごこと
いひてうちもわらひぬ

○しかたの事は かやうくの事は○あなかして あゝおろしといふ詞にて物
をおろれつゝしみてかまへてゝなご云意也○さはいへど 年月へても忘れぬなごい
へ也

「（ナキ）からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日はかりまうぞつゝみ
れば、ほごなく卒都婆も苦むし、木葉降うづみて、夕の嵐夜の月のみ
ぞことゝふよすがなりける」（生）

○けふとき 人氣疎き物さびしき意也○卒都婆 寶塔、墳、高顯なご、譯せり○ことゝ
ふよすが 事を問ひよるたより之慈鏡の歌に「ありし世の宿のけしさをとふものは秋
の夜の月庭の松風」とよめるに同じく嵐や月ならではとふ人もなきさまこ

「（チキ人）思ひ出て忍ぶ人あらむほごこと（シタ）あらめ、（レ）も又ほごなくうせて聞
つたふるはかりのすゑ（ハ）はあはれとやはれもふ（ア）さるは跡とふわ

さもたぬぬれば、いつれの人と名をたにしらす年々の春の草のみぞ、
心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千歳を
またで薪にくたかれ、古き墳はすかれて田となりぬ、うのかたたにな
くなりぬるぞかかしき、

○年々の春の草のみぞ かの人の墓にもぬ出る草が陽氣發生してなき人の魂も草と化
して生せるなれば心ある人はあはれと見るべしと之○嵐にむせびし松も 松の嵐にし
ぶきて人のむせぶやうに聞ゆるこ

「（三）雪のれもしろう降たりし朝、人のがりいふべき事有て文をやるど
て雪のそなにとはいはざりし返事（先キ）に、この雪いかゞみると、一筆のた

まはせぬほごの（ハ）ひがくしからん人の、仰らるゝと聞いるべきか
は返々（キ、スレハセ）くちをしき御心なりといひたりしこそ、をかしかりしか、今は
（其人モ）なき人なれば、かばかりのこともわすれがたし、

此段前段になき跡のことをいふに付て人の詞のやさしきは死後までも思ひ出さるゝこ
となるをいへり○雪のおもしろう この詞にて心つくべき朝也といふ事をしらせたり
○人のがり がりはがりの約○ひがくし 僻々しにて心のひがみたる義なればひ
がくしからん人は俗にひふへんなたちである人なり

うのかたに「此段
始めに人のなき跡は
かり悲しきはなしと
言出して終りにうの
かたになくなりぬ
るやかなしきととい
めたるは發端を二た
ひ照したるものなれ
ば之を文章の還照法
といふ

今はなき人なれば
讚に云前には今はな
き人といひて後には
るの人失せにけり
いへる共に前段のあ
かぬ事のついでにた
も多きはるの世の傳
ある事と見るべし

九月「奥義抄に云夜長月といふ略之

ましかば「玉緒に云是は下をまた必ましと結ぶ例也とさればましかばと留れるは其結び詞を下に含めたるもの也第十二段を見るべし

〔三〕九月廿日のころ、或人にさそはれ奉りて、明るまで月見ありくて侍りしに、或人がフトねほし出る所ありて、あないせさせて入給ひぬ、秋、未トテあれたる庭の露しけきに、わさとならぬ、空橋ノ案内にはひしめやかたうちかをりて、世ナ忍びたる氣はひいと物あはれなり、アマリ待遊ニモアラテよきはとて、外ハ出給ひぬれど、猶とさまの優にれほつて、ものゝかくれよりしほし見るたるに、事妻戸を今すこしれしあけて、月みるけしきなり、客ノ歸ルヲ見テ内ニや、見居タか、ルカロナクテちをよからまし、カヤウニ跡までみる人ありとはいかぞかしらん、かやうの事はたゞ朝夕の心づかひによるべし、うの人程なくうせにけりと、ぞ聞侍りし、

此段もまた前段と同じく所爲の優なるは死後までも忘れられぬことなるをいへり只人は言行ともによくあらまほしきとの心なるべし○わざとならぬ 客を見てわざと焼たきたるを今少しおしあけてさすがに見送るやうにもあらで月見るけしきとなり 妻戸は燈の戸をいふ開き戸あり開き戸は其妻あるが故にいへり妻とは其様也

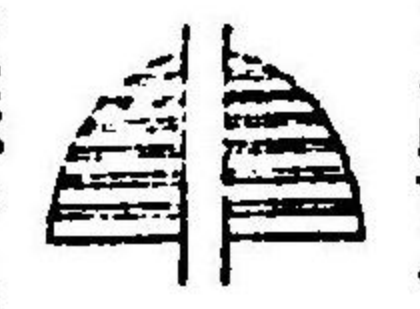
〔四〕今の内裡造り出されて、有職の人々に見せられけるに、いつくも

難なしとて、既に新殿ハ遷幸の日近く成りけるに、玄輝門院御覽して、閑院殿のくしがたの穴は、まろくふちもなくぞ有しと仰られける「いみじかりけり、これはえふの入て、木にて、ふちをしたりければ、あやまりにてなほされにけり、業

此段前兩段に人の言行の美しきをいへるを受けて人の材智の勝れたることをいへりとかく人は心を物につくべしとの義なるべし○玄輝門院 九十一代伏見院の母后なり○閑院殿 拾芥抄云二條南、西洞院西一町冬嗣大臣、家云々公季公傳、領之○くしがたの穴 櫛の形に似たる穴之禁腋秘抄に云清涼殿の南の壁の西の端鬼間のあはひの柱をはさみて櫛形の穴あり女房な殿上のことを此所にて見る○えふの入て ねふは葉の字の義にて木瓜の如く縁の内へ入りたるなり

〔五〕甲香はほら貝のやうなるがちひさくて、口のほごのほそ長にしていせたる貝のふたなり、武藏國金澤といふ浦に有しを、所のものは、へなたりと申侍るとぞいひし、

此段も前段と同じく心を物に付くる益ある心はへをいへり○へなたり 舊抄に云一本にはへと有ばいといふにや覺束なし今金澤にてばいといひ又つふともいふなり兼好が時はへなたりといひけるにやばいに似て少し大きにして口の細長き貝ありうれをいふにや



門院「職原抄云天子母始居中宮者曰女院有門號未得中宮位一人無職家にきくは古來諸抄に記せるものは其形同じからず今これを圖記するに上は丸く長くして瓜の如く中央に立丸柱にして横に引けるは横木尤圓りはぬりこめ甲香「かいかうといふは讀みくせにて貝の字のよみを甲の字へうつしひをいと誤りたるなるべし

〔三〕手のわるき人の、はゞからず文かきちらすはよし、みぐるごとて人にかゝするはうるさし。

此段筆は心跡とて我心を人に知らずものなれば他筆を以てするとき其人の心うつりて我心達せず故に悪筆にても自らかくべしと〇人にかゝするは云々 人にかゝしむるは不便なればめんどうなりと云

〔三〕久しく音づれぬ比女ノ許ヘいかばかり向フニハうちむらんと、我をこたり思ひしられて、言葉なき心ちするに、女の方より仕下アラバやあるカッ玉ハひどりなごいひれこせたるころ世ニ有がたくうれしけれメテテさる心さましたる人ぞよきと、人の申侍しゴさもあるべき事なり。

此段は前段に文は自筆にてかくべしといふを受けて男女の間の消息のまじはりを入りすべて人は此心ばへにて假初の事にも人を恨むまじきとの意なるべし〇さる心さましたる人ぞよき ころに女がよきと云くで人ぞよきと云けるは男女の中にかぎりある心ばへなればこ

〔三〕朝夕へたてなくなれ突たる人の、ともある時我に心チれきひまつくろへるさまに見ゆるこそ今更かくやアルキはなごいふ人も有ぬべけれサレなほけにくしくよき人のなどを覺ゆる。

此段前段に男女の交りを入るに次ぎてすべて男女朋友ともに相交るには親しき上にも禮を忘れず疎き中にも和を貴ぶべしとの意〇ともあるとき やゝともする時に公義禮式などのをりをいふなるべし〇なほけにくしくこれ親きにも禮を忘れざるなればけにく尤と思ふ也

うとき人の、うちとけたるをなごいひたる心ナスク又よしとれぬひつきぬべし。

〇うとき人の云々 和を貴ぶなればまたよしと思ふ也

〔三〕名利名聞利欲につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるコり名聞利欲れろかなれ

此段は皆人世の榮利を貪らず又名譽を求めず身心つれどにて一生をくるしむる事なかれとの意なるべし

財多ければ、身を守るにまごし、害をかひ、煩をまねくなかたなり、身死シタルの死シタル後には、金ノカサをして北斗ノ星をさホドアリふホドアリとも、人のためにぞわづらはるべき、れろかなる人の、目をよろこばしむるたのしび、又あぢきなし、大なる車、こえたる馬、金玉のかざりも、心財チモトメオクク樂ナレバあらん人は、うたてお

仕下「古くはつかひよほろどいへど今はじちやうといふ

べけれと「べけれはころに應じてるの結びとなりて切るゝなればははされと打返しきくべきと

ちぐべし」べしははかり定めていふ辭なれば俗にこそがでけるなきいふ意

いみじかりし」上の家に生れの句に應ずる時にあはずして」上の時にあへばの詞に應ず

ろかなりとぞみるべき、金は山にすて、玉は淵になぐべし、利にまどふは、すぐれて、おろかなる人なり、

○身を守るにまどし 文段抄云利を求めて實には富むといへども我身を守るには貧しと也財の故に身を害する事多ければ也抄云まどしはまどはしの中略也たから故に身を守るに迷惑する也此説いかいあらん見ん人よくく考ふべし○あぢきなし 無三味氣の義にて俗に云證なき意なり○金は山にすて玉は云々 金玉をかるしめて用ひぬ意といへり一向に山河にすてよといふにはあらず

埋もれぬ名」をながき世に残さむころ、あらまほしかるべけれ、位たかくやんでとなき」をしもすぐれたる人とやはいふべき」おろかに拙き人も、家に生れ時」にあへば、高き位にのほりををりをまきはむるもあり、いみじかりし賢人聖人みづからいやしき位をり、時にあはずしてやみぬる又れほし、ひとへに高きつかさ位をのぞむも次にれろかなり

○埋もれぬ名 死て骨はうつめども名は跡に残ればうつもれぬ名なり○位たかくやんことなきをしも たどひ高位にして各別なる人といへども愚痴無道なれば勝れたる人とはいふべからずと○おろかに拙き人も 是よりすぐれたる人といはれまじき子細

をいふ○のみづからいやしき位をり 自らといふ詞字眼といふは官位高きとて必よきにあらねば聖人賢人もさして官位を求めざりしと

智恵と心ところ、世にすぐれたる譽ものこさまほしきを、つらくおもへば、譽を愛するは、人の聞をよろこぶなり、ほむる人うしる人とも世にとゞまらず、つたへきかん人」またくすみやかに去るべし、誰をかはず誰にかしられんとをねがはん、譽はまた毀の本なり、身の後の名残りて更に益なし、これをねがふも次におろかなり

○智恵と心ところ 智とは清淨本然の智之心とは自然の心○つらく思へば しづかによく思ひめぐらせば○人のさくをよろこぶ わが天然の才智と賢意とを世人のさく傳ふることをよろこぶ○譽はまた毀の云々 一方に譽る者多ければそれを偏執する者又ろしりを起すことあり

たゞしおひて智を求め賢をねがふ人のためはいはゞ、智恵ひいで、は偽あり、才能は煩惱の増長せるなり

○智恵ひいで、は偽あり 此智は上にいへる清淨本然の智にて所謂生れ付きのまゝなる正直無曲の智といへども漸く年月をふるに從ひ物になれ事にあたりて次第に邪智

のこさまほしきを」下をうけたる文章をハ物をといふ意誰をかはず」此をハににかよふを古今集の詞書などに一人にわかるといふ意なる處を「人をわかる」といへるが如し物語などに此例ごとに多し人の聞を」人のさくをど仮体言になしてよむべし

たいし」上文にうへて別に其意をどく語之俗に云しかしながらの意

智をもとめ」もどむるといへる詞にて自然の良智にあらざる

を知るべし
老子經俗薄章云々
惠出有云大偽王介
甫註云智者知也
惠者察也以三其有
知有察此大偽所
以生也とあるの意

誰かしり誰の字眼
目なり心を付くべし

を生じ我非をかくし人の是をおほひ我身の益を好み方のねがひみてん事を望む故に偽
をいふなり是即ち邪智より出る偽之○才能は煩惱の増長せるなり 才智藝能を學ぶに
付て人にこえずぐれんと思ひて學び又學び得て我こうと思ふは煩惱の増長せる之煩惱
とは心を煩し身を惱す事にて道にさへる事なれば是もうるさきよしなり
つたへて聞學びてしるは、まことの智にあらす、いかなるをか智と
いふべき、不可は一條なり、いかなるをか善といふ、眞の人は智も
なく、徳もなく、功もなく、名もなし、誰か其智徳ナしりたれか其功名ナ傳へん、これアザト徳
をかくし愚をまもるにはあらず、本より賢愚得失のさかひれをらざ
ればなり

○まことの智 是は老莊の説の無智の所にいたるをいへるものにて愚なるが如く嬰兒
の如く中央之帝爲、渾沌といふ是なり○いかなるをか智といふべき 何の智といふ
ことかわらん本來は無智といふ義之○不可は一條なり 是眞の智を問ひたるに答へ
たるものにて眞智は見るま、聞くま、に得たるものなれば清淨正直にして可之學智は
をしへにあづかるものなればまがりて不可之學智の不可は眞智のまがれるもの之眞智
の可は學智の清く直なるもの之故に不可とあるも只眞智の一なれば何をか可とし何
をか不可とせん只是眞智の一條こと之意之○いかなるをか善といふ 何の善といふて
どかわらん本來は善惡なしとの意之○眞の人は云々名もなし 眞の人とは道をさとれ
る人、是はいかなるをか善といふにこたへたり

まよひの心をもちて名利の要を求るにかくのことし、萬事は皆非也
いふにたらずねがふにたらず、

○名利の要 要とは肝要之人まよへるが故に名聞利益を肝要と思ひて大事ともとむる
之道春云の要の二字衍文之莊子盜跖篇に非以要名譽也とある要の字に仮字付たる
を合せて誤り來れるなり○万事は皆非也云々 是此段の要之其意夢幻のうき世の事を
すべて願ひもとむるは皆非ことなり是皆名利の事なればなり故にいふにたらずねが
ふに足らずといひて畢竟は寂滅爲樂の意をわかせり

四〇或人法然上人に、念佛の時睡におかされて行をれこたり侍る事、
いかゞして此さはりをやめ侍らんと申ければ、目のさめたらんほど
念佛し給へとこたへられたりける、いとたふとかりけり、又往生は
一定と思へを一定不定と註おもへは不定なりといはれけり、これも
たふとし、又疑ひながらも念佛すれば、往生すと終ニ其念ヲトケテいはれけり、これ
も又たふとし、

此段前段に次ぎて佛道をねがふに上人のいはれし如くならばつれづれの意にかなふべ
しと之〇法然上人 其名を源空といへども坊號を法然坊とよびし故かくいふ也姓は漆
間氏美作國稻岡の人也上人は沙門秀業の稱なり○目のさめたらんは 目のさめてあ

念佛の時念佛に四
種あり稱名念佛觀
像念佛觀想念佛實
相念佛といふ此念
佛は觀念の念悟念の
心にあらす稱の字の
義にて六字の名号を
稱ふるをいふ

らん問念佛せよと也睡の來るをしひてさまさんとせんは却て心うごく也是れは上品の人に示されしなり○又往生は一定と思へば云々 往生とは現世を辭して淨土へ往き生るゝ事にて即ち死すること一定と思へば一定とは一心に念佛すれば往生する事と決定して何のうたがひもなくとやかくの二心なく一定往生と思ひとりて佛を頼み奉る人は往生せざるはなきなり故に一定と思へば一定といふ又衆生の心にかゝる一定の本願をたのみながらもしたすかるまじきかと疑ひて本願のうらと思ふ人は是即ち二心にて斯二心ある人は往生せざる是を不定と思へば不定といふ一定だに思へばたがふ事なく一定往生をとぐることは誠に有がたき事なれば是もたふとしといへるなり是は中品の人に示されしなり○又疑ひながらも云々 又往生をねがひ念佛を申ながら我身の罪深ければ往生もかなふまじと疑ひながらも念佛する人は自然と彌陀の願力にひかれて惡業を滅し往生する事といはれけりとは世の常の人の示に及ぶべき事にあらざれば是亦たふとしと兼好嘆稱せる是は下品の人に示されし

〔四〕因幡國の何の入道とかやいふ、ものゝ娘、かたちよしと聞て、人あまた（妻二迎ハント）いひわたりけれども、このむすめ、たゞ粟をのみくひて更によ（イヒホオホヒ）ねのたぐひをくはざりければ、かゝるをやうの者、人にみゆべきにあらずとて、（云フ）れやゆるさざりけり、

此段はかたちよき娘を異様の事ありとて縁につけざる親の心をほめてかけるものなれば即ち前々段に名利を求めず身心つれづれにてあるべしとの意なるべし○何の入道

姓名をいはずるは惡をかくし善を揚るといふ聖人の心にや入道は剃髮者の自稱にて道心に入るの義也

賀茂のくらべ馬一丈
武天皇慶雲三年五月
五日に始る其法廿四
疋の馬をうれしに
一疋づゝかけさせ
の遅速を見はかり
中（木ニ棟）の二正（木ニ棟）かけさせ馬場
負（木ニ棟）の事（木ニ棟）つなり五月一
日の二色の装束を分
落馬せるもの三山
龍りす
落ぬべきいふべきの
ぬは詞のいさほひに
て奈行變格のぬの
はれるものなれば元
の活詞にかへりて落
つべきといふに同じ

〔四〕五月五日賀茂のくらべ馬を見侍しに、（物見）車の前に雜人立へたて、みえざりしかば、おのゝたりて、（ソノキハニハ）ちのきはによりたれど、人れほくたちこみて、分入ぬべきやうもなし、かゝるをりにむかひなるあふちの木に、法師ののほりて、木のまたに、つゐるて物見るあり、（木ニ棟）どりのつきながらいたうねぶりて、落ぬべき時に目をさます事度々なり、これを見る人、あざけりあさみて世のしれものかな、かくあやうき枝のうへにて、安き心有てねふるらん（白痴）といふに、我心にふと思ひしまゝに、我らが生死の到來只今にもやあらん、（彼ノシレモノニ）それを忘れて、物見て、目をくらす、おろかなる事は猶（後ノシレモノニ）まさりたる物を、といひたれば前なる人ども、まことにさう候けれ、もともれろかに候といひて、皆うしろを見かへりて、こゝへいらせ給へとて、（カガ見ル）所をさりて、（兼好チ）よび入侍りにき、かほどのそわり、誰かは思ひよらざらん（カ、ルイソガハシキ）なれども、折からの思ひがけぬ

こゝちして、胸（胸人）にあたりけるにや、人木石（トツラン）にあらねば、時にとりて、物に感ずるとなきにあらず、

此段は命のはかなき事をいひて無常をすゝめたり是またかの名利の段に因みてかけるなるべし其は無常を忘るゝは名利に使はれて閑なる暇なきが故なれば也○くらへ馬今は音を以てよべりもとは大内にて行はれしを中頭より此事絶て今はたゞ賀茂にて行はるゝのみ也と云○雜人 下々のもの○らち 馬場のやらひ垣也○あふち いまいふ榊檀の木也○つゐて 雅言集覽に「つゐは其まゝ一寸也とあれば假りに其處につくばひたる意なるべし○あさみ 他の淺慮なるをうしる詞也誹謗の字をよめり○折から折につけて也

鬼のかほになりて「此にはどに通ふに」の如くはの意にての鼻になりなぞしてのにも亦同じ

〔四〕唐橋（雅海）中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり、氣の上る病ありて、年のやうくたくるほとに、鼻の中ふたがりて、息も出がたかりければ、さま／＼つくろひければ、わづらはしくなりて、目眉額なとも脹（何レ見）まどひて、うちおほひければ、物もみならず、（安摩）二の舞の面のやうに見ゆるが、たゞれろしく鬼のかほになりて、目はいたゞまのかたにつき、額の程鼻になりなごして、のちは坊のうちの人にもみならずこもりて、年久しくありて猶わづらはしくなりて死にけり、かゝる病もある事に、こう有けれ、

此段は前段に法師の木のうにて物見る諸人に變りたる舉動をいへるに因みて行雅が奇病の人並にあらざる事をいへりかれはそれによりて無常をすゝめ是は知者といへども病は天命にして免れがたき事を知らしめたるなり○教相 眞言宗に經論聖教を學ぶを教相とす相はうのすがた也 ○二の舞の面 安摩とてをかしき舞あり其次にまふ伶人の面色赤くしておろろしきものなり○かゝる病も 此一句一段の眼目也行雅の奇病も天命なればせん方なし佛家よりいはゞ過去の業病なりと知るべし論語に孔子の伯牛が瘡病をいたみ給ひしをも思ひ合すべし

〔四〕春のくれつかた、のどや、かほにゆるなる宿に、いやしからぬ家の奥ふかく木立物ふりて、庭にちりしをれたる花（何トナカ）みすぐしがたきをさし入て見れば、南面のかうしみなれろしてさびしけなるに、東にむきて妻戸（格）のよきはどにあきたる御簾（格）のやふれよりみれば、かたちきよけなる男の、とし甘ばかりにて、打（見人モナレ居）とけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机のうへに文をくりひろげて見るたり、いかなる人なりけん、たづねまかまほし、

此段は暮春のゆるなる空に若き男の心づかひのどやかなる人知れぬ所に感起したる

かうし「格子の香便」妻戸「第三十段に見たり」

事をいへりつれ、人の身持は節にあたりてなつかしどの意なるべし。庭にちりしをれたる花、中春の花ざかりをいはず暮春の花のちりすぎたるをほむ。事後に花はさかりに月はくまなきを見る物かはといふに同じ。○格子、細く方なる木を縦横に組立てるものにて、廣縁の端にあるものなり。○心にく、心置せらるゝをいへり。おくゆかしきさま也。○尋ねさかまはし、深く其体を甘心したるよし。

あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影に色あひの云々。所にたがひてやさしき人の住むよしをいはん爲に云しぬき。西官記云指貫王者以下衆人共所用也古時五位以上昇殿六位用之

〔四五〕あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影に色あひさたかならねど、つやゝかなる狩衣に、こきさしぬきいとゆるづきたるさまにて、さゝやかなる童ひとりをもて、はるかなる田のなかのほろみちを、稲葉の露にうほちつゝ、わけゆくほど、笛をひならず吹すさびたる。あはれと聞しるべき人もあらじとたもふに、ゆかん方しらまほしくて、見おくりつゝ、ゆけは、笛を吹やみて、山のきはに惣門のある内、いりぬ、榻にたてたる車のみゆるも、都よりはめとまる心ちして、下人にとへは、しかくの宮のおはします頃にて、御佛事などさふらふにや、といふ、御堂の方に法師ども参りたり、夜寒の風にさうはれくるうらたき物のにはひも身にしむ心ちす、寝殿より御堂の

廊下にかよふ女房のたひ風よういなぞ、人目なき山里ともいはす心づかひしたり、
用書

此段は前段に對して秋の風情と女の心づかひを述べたり。これ又人目なき所にて慎みたるを感じたるなれば、つれづれの趣は前段と異なる事なし。○あやしの云々、さうなる体之所にたがひてやさしき人の住よしをいはん爲也。○狩衣、狩衣色は不定之袖くゝりあり、これはもと鷹飼鷹をつかふ時袖をくゝりて小手さしたるが如くになしたる故袖口にくゝり緒あるころれより後には高貴の人の鷹を合せ給ふ時又鷹狩ならでも便利の服なればとて常の時にも着する事になりし。○さしぬき、狩衣の下に着する袴なる故又狩袴といふ。其さうに括り緒をさし貫きてある故さしぬきの袴といふ。○いとゆるづきたるさま、尤よしありげなる様之濃紫はたゞ人は着ぬ故宮にておはします由をいはん爲之。○榻、車のながねをもたせておく。縁づくゑのやうなるもの。○寢殿、正殿。今之書院の如し。○女房のおひ風、おひ風はもと後の方より吹くる風をいへるなれを轉りては其方の方よりふくをもやがておひ風といへり。梅のおひ風なぞの如し。さればこゝは廊下を通へる女房の方より吹くる風に衣の薰物のかをれるにてうの用意の行届たるをいへるなるべし。抄云おひ風用意とは山風荒く吹きて衣のすうなを吹ちらすものなるにうれをも吹ちらさぬやう見くるしからぬやうにする。云々此説もよく聞ゆおのゝ其好む所に従ふべし。

心草木ノのまゝにしけれる秋ののらは、おさまあまる露にうづもれて、虫のねかごとがましく、遣水の音のぞやかなり、都山ノキハナレバのうらよりは、雲の往來

もはやき心地して、月のはれくもる事さためがたし、

○かごとがましく 虫の音の秋の夜寒を恨みがましくなく様之○雲の往来も云々 山間なれば廣き都の空とは違ひてかく見ゆるなるべし○月のはれくもる事云々 自づから風烈しければこ

〔四〕公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞ゆしは、きはめて腹あしき人なりけり、坊の傍に、^{兄人}大きな榎の木の有ければ、人榎木の僧正とぞいひける、此名しかるべからずとて、かの木をさられにけり、その根の有ければ、きりくひの僧正といひけり、いよくはら立て切株をほりすてたりければ、その跡大きな堀にて有ければ、ほりけの僧正とぞいひける、

此段良覺僧正の柔和忍辱の僧道にうむきたる事をいひて後の戒めとす畢竟名が悪しきと思はれ却て徳を備めて善に遷るべしとの意なるべし○公世の二位 二位の侍従公世卿之然るにこゝに二位の公世とかゝずして公世の二位とかけるは物語書に實方の中将などあると同じくなだらかに聞ゆるやうにかけらるるべし○良覺僧正 山門の大僧正之僧正は僧の極官之今こゝに良覺と名をわけ僧正と官名をしるし兄人公世の名までかけるは通常人の悪をいふときは名をあらはさぬ法なれども極悪の者をば後のいましめに名をいふの例にてつよくうしれるなるべし○坊 僧の居所の稱之

〔五〕柳原の邊に強盜法印と號する僧有けり、たびくがうたうにあひたるゆゑにこの名をつげにけるとぞ、

此段前段を受けて此法師かゝる異名をわたるも平生の行事がよからぬ故なるべし人はとかく常をたしなむべく又きく人は只名ばかりきゝて漫に悪事をいひかけまじきとの意なるべし

〔四〕或人清水へまゐりけるに、老たる尼の行つれたりけるが道すがらくさめくといひもてゆきければ、^{尼御前}何事をかくはの給ふぞととひけれども、いらへもせずなほいひやまざりけるを、たびくとはれて、うち腹立て、やゝ^{アリテ}はなひたる時^{此方ニテ}かくまじなはねば^{其兒}死ぬるなりと申せば、やしなひぎみの、比叡山に兒にてればしませんが、只今もやばなひ給はんと思へば、かく申ぞかしといひけり、有がたき心ざしなりけむかし、

此段此尼が所業は至て愚痴なりと雖平生其保育の愛を忘れず其志を致すは誠に殊勝の事とぞ○清水 洛東音羽山清水寺なり○道すがら 道を終るまでこみちくといふが如し○やゝ やうくにして其故をこたへたる一説にやゝは人をよびかくる詞にて俗にこれなうなといへるに同じといふは當らずは枕草紙第三に「やゝまざひるが

なりけり「源氏玉小櫛桐壺にすべて文になりけりといへるは上の事のよしを解釋したる如き語のどちめにおく辞こといへ

柳原一京都室町上る御靈前筋下る左右の所なりと直解にいへ

尼御前「御前は婦人の尊稱

けるを「このをはにかよふを物語文などに其例多し

きたなき物や云々といへるや、に同じくや、といひきりて「アリテ」の詞をうふるものなれば、○はなひたる時、噓の字をはなひるとより、鼻放るの義くさめする事なり。噓音丁計反。○有がたき心ざし、尼の人のいふまゝに信をおこし、主君に忠をつくすをほめたり。○の所業は愚なるに似たれど、實は有がたき心ざしなるべしと云。

誰れにとれとてか
このかは續体言より
受けて疑ひながら切
るゝかなれば、上の上
に、上の詞を入れて云
々といふべきなり

寂勝講「なる事は二
十三段に見えたり

〔四〕光親卿、院の最勝講奉行して候らひけるを、御前へめされて、供御を出されてくはせられけり、さてくひちらしたる衝重を、みすの中へさし入て、^(イソギテ)罷出にけり、女房あなきたな誰にとれとて、^(カクヌル)かなど申あはれければ、^(院)有職のふるまひ、やむてなき事なりと、かへすゝ感せさせ給ひけるとぞ。

此段前段其志を致すの切なるをうけて奉行なせせんものは、其日の公用を大事と思ひて私の容儀をつくらふべからずとの意。○光親卿 後鳥羽院の寵臣堀河中納言光親卿なり。○寂勝講 侍徒寂勝王經を禁中にて講するなり。○供御 主上の御膳部なり。○衝重 又筑重ともかけりわりそのやうなる折敷。○女房 尙侍以下禁中の女中に稱せり。○はもと御所に奉公する女の品位よきはつばねを給りて居住するより起りてすべし。仕する女をいふこととされる。○あなきたな あなは意の切なる時にいふ辭、きたなはきたなしのしをいひとめたる。○有職のふるまひ ふるまひは時宜作法なり。○かへすゝくれゝもといふに同じ。

古き墳多くは「寒山
詩」云待老來「始其
學」道古墳多「是少
年」人此句によりて
第一節をかけるなる
べし

あやまり「雅望云あ
やまちはすでに知り
たる事を得せざりし
をいひ、あやまりは
るれど心づかすてあ
らぬ事をしたる也」
「あらんや」此やはや
はの意にて意うらへ
返る。

つかのま「八雲御抄
に束の間はたどへば
草かりて束ぬるほど
といへり

〔五〕老來て、始て「道」を行せむとまつとなかれ、古き墳おほくは是少年の人なり、

此段無常の節季は出入る息をもまたでせまりくるものなれば、万事をさしおきまづ生死の大事たる後世を心に忘るべからずとの意。○古き墳おほくは かやうに少年の人早く失せて多く墳となれるを見れば、無常を待つに油断すべからずとの意なり。

はからざるに病をうけて、忽に此世をさらんとする時にころ、はじめ
て過ぬるかたのあやまれる事はしらるなれ、あやまりといふは他の
ことにあらず、速にすべきを^(後世ヲ思フ)をゆるくし、ゆるくすべきを^(世ヲ慕フ)事^(世ヲ慕フ)をいりぎ
て、過にこそこのくやしきあり、うれ時悔ともかひあらんや^(アハハシム)。
○はからざるに病をうけて 少年の墳なる子細をいふ。○ころの時悔とも ろの時とは
上の此世を去らんとする時にて即ち臨終の時なり。

人は只無常此身にせまりぬることを心にひこしかけて、つかのまおわ
するまじき也さらばなぞかこれ世のにぞりもうすく、佛道をつとむ
る心もまめやかからざらん、

○無常の身にせまりぬることを云々 老たるは生者必滅なればのがれず若きは老少不定

火急「火の燒來る程急なりといふ義」
心戒といひける聖「發心集に云心戒坊にて居所も定めず風雲にわどを任せたる聖なり俗姓は花園殿の末とかや云々

ゐて「率ゐての略言なり」

なればといまらずいづ方につけてもありはうべき世とて見えねど常に心に思ひくらす人を心にひしどかけてといふなりひしは緊の字の義にて緩みなき意の〇つかのま東の間の意にて暫時といふに同じ

昔世二ありけるひじりは人來りて、自他の要事をいふ時答ていそく、今火急の事ありて、既に朝夕にせまれりとして、耳をふたぎて、念佛して、つひに往生をとけけり、禪林の十因シルシに侍り、心戒といひける聖は、あまりに此世のかりそめあるを思ひて、靜についるけるをたになく、常はうすくまりてのみぞ有ける、
四居

○昔ありける聖は、以下二人の僧のよく無常を感せしことを引て證據にしたり○自他の要事、自らのうへにても他人の事にも必ず告べき肝要の事也○禪林の十因、禪林は京都東山永觀堂の寺號彼永觀律師往生十因といふ一卷を作れり○靜についるける云、靜に其座にかしてまりたる事さへなき也

〔五〕應長の比、伊勢國より、女の鬼になりたるをゐてのほりたりといふと有て、其比廿日はかり、日毎に京白川の人鬼見幸にて出まどふ、昨日は西園寺公衛に参たりし、今日は院伏見へまるるべし、只今ハそこくよ米上ぞいひあへり、まさしく見たりといふ人もなく、空ぞと、いふ人もなし、

あらざんめり「本語
わらざるめりのるを
略さるれにんの音便
を加へたるなりめり
は今ある事のうへを
心にあやふみ思ふよ
しにいへる辭也

大井川「又大堰川と
もかけり京都の西へ
嵐山の麓を流る川
之故に又西川ともい
へり俗に桂川といふ
是なり

し、上下たゞ鬼のそのみいひやまず、そのころ東山一ノ屋住ありより安居院の邊へ罷侍し、四條よりかみさまの人、皆北をさしてはしる、一條室町に鬼ありとのゝしりあへり、今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、さらにとほりうべうもあらず、たちこみたり、はやくあとかき事にはあらざめり、とて、人をやりて、見するに大かたあへるものかき暮るまでかく立さわぎて、はてハ鬪諍おこりて、淺ましき事ども有けり、その頃おしあべて、二三日人のわづらふこと侍しをぞ、かの鬼の空ぞとは、このあるしをしめすありけり、といふ人も侍し、

此段愚者は心より我と迷ふものなればかやうの虚言に心をうつし迷ふべからずとの戒め之〇京白川、下加茂の京を白川といふ〇西園寺、當時西園寺公衛公威勢ありし故にどに書出したるなるべし〇そこく、其所所になり〇安居院、寺の内通大宮通南北の間をいふ〇院の御棧敷、昔は一條大路に賀茂の祭の物見の爲の御棧敷有しと也〇はやく、もとよりなきいへる意也

〔五〕龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車をつくらせられけり、多くのあしを給て、數日にいと

万にろの道を知れる者云々此句此段の要領にて万事皆其道を知れる人を用ふべき事をいひて是即ち一事をいひて万事を知らする文法なり

「からより」このよりは万葉十三に「人づまの馬よりゆくにおのづまのからよりゆけば」といふよりと同じくにての意也

み出して取かけたりけるに、大かためぐらさりければ、とかくかほしけれども、終にまはら取せ、いたづらにたてりけり、さて宇治の里人をめして、こしらへさせられければ、やすらかに立ゆひてまゐらせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水をくみいる、ことめたかりけり、萬にろの道をしれる者は、やんごといかさかのかり、

此段は不知案内なるものは勞して効なし万事皆其道を知れる人を用ふべきとの意なり
○龜山殿 八十九代の帝龜山院嵯峨龜山の麓に山莊をたて、御隱居なり今の天龍寺は昔の帝居なりしとかや○水をまかせられん 水を引用ふる意之引の字をよめり○多くのあし ふしは錢をいふ錢神論無足而走といふによるにや○とかく 左右の字をよめりかれこれと○宇治の里人 宇治は水車の名所にて里人はよく其業に馴れたり○やんごとなきもの 貴き人といふが如し至てはむる詞にいへり

〔五〕仁和寺にある法師、年よるまで石清水ををがまざりければ、心うくおぼれて、或時思ひ立て、たゞひとりかちよりまうでけり、極樂寺高良社かさををがみて、かばかりと心わてかへりにけり、さてかたへの人に逢て、年頃思ひつることはたし侍りぬ、聞しにもすぎて、たふとくこ

是も仁和寺の法師一是も前段と同じく仁和寺の法師の事也此一句にいひきりて語をかき初めたる文法なり潮の除波といふなり轉じて過ぎ去りし物の氣の残るをいふさればていふは前の名どりといふ

ろおはしけれ、ろもまゐりたるごとくに、山へのほりしは、何事か有けんゆかしかりしかぞ、神へまゐるころ本意はいかれ、とおもひて山まで見すとぞいひけるすこそるの事にも、先達はあらまほしきことなり、

此段前段の意をうけて此法師の不知案内にて我意に任し失をいへりすべて何事もよく先達に任すべしとの意なり○仁和寺 京都の西にあり今いふ御室なり○石清水 男山八幡宮之山城國久世郡にあり此山清淨の水ある故に石清水といふ○高良 高良に上下の二社あり上の高良は武内なり下の高良は玉垂といへり○かたへの人 傍輩之○ゆかし ゆかしは物のれくのしたはしきをいふ○先達 案内者の意

〔五〕是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名前どりとて、各あろぶこと有けるに、酔て興に入あまり、傍かる足鼻をとりて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をれしひらめて、かほをさし入て舞出たるに、満座興に入ことかぎりなし、若はしかかぞ、のちカナヘチぬかんとするに大かたぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせんとまごひけり、とかくすれば、首のまはりかけて血たり、たゞいれはれみちて、息もつまりければ、打カナヘチわらむとすれど、たやすくわれず、ひ頭ぎさてたへがたか

されうすども」ころ
をどもと受くり格は
どもにころの結び辞
を含めたるなればと
を以てされどもと聞へ
る

りければ、かぢりですすべきやうかくて、三足なる(カナヘ)つものうへにかたび
らを打かけて、手を引杖をつかせて、京なるくすしのかりゐて行ける稚子
に、道すがら人のあやしみ見るとかぎりなき醫師醫師の許にさし入て、
かひのたりけむありさまさころうことやうなりけめ、物をいふもくゞ
より聲にひゞきて聞ゆず、かゝるそはふみにもみはず傳傳たるをしへ
もなしといへば、又仁和寺へかへりて、したしきもの、老たる母を枕
上によりゐて、なきかなしめども、聞らんとも覺ゆず、かゝるほごに或
者のいふやう、たとひ耳鼻ころされうすども、命ばかりはかどかいいき
ざらん、たゞ力をたて、引たまへとて、藁のしべをまはりまはりにさし入て、
かねをへたて、頸もちぎるをかり引たるに、耳鼻かけうけながら、ぬ
けにけり、辛からき命まうけて、久しくやみるたりけり、味

此段は座興の過ぎたる出来事なりと雖是また先達の戒を守らず酒宴遊興をなしたる失
にてすべて非常のされを好む者は必非常のわざわひあるものなればよく戒むべし
との意なり○童の法師にならんとする名どり 僧家に兒のはじめて得度するとき日比
入魂せし友達を振舞ふ事あり之を前の名殘といふ○興に入わまり わまりとは其事の

ひろくあふれて外の事に及ぶ意○足鼎 和名集に云説文に云三足兩耳和五味一寶器之
とありて古へは食を煮る器なりしを今は香爐等に其形を存せり○かなで、奏の字を
よめり歌舞する事○かたびら 帷子は麻にまれ生絹にまれすべてひとへなる衣をい
へりかたは片にてうらなき義ひらはうすくひらめくをいふこと安齋隨筆に見ゆたり○
くすし 醫師をくすしといふは藥師の義○くゝいもり聲 こもりたる聲又一説にく
いもりにて何とさるあり然る時は本言續用言の格にて下の用言聞ゆすへいひつゝきて
「こもりて聞ゆす」といふ意になれり是また通す○力をたて、このたては專一にす
る意也源氏わけまき四十二丁に「あらぬ心ひとつをたて」とあるたては同じ俗に見
識をたて、なごいふ意にも通へり○藁のしべ 藁の穂の心也わらすべといふは同じ

〔五〕御室にいみじき兒の有けるを、いかでさうひ出して、あうむむと
たくむ法師どもありて、能あるあうむ法師どもなど、かたらひて、風流
の破子やうの物、ねんごろにいとなみいで、箱風情の物にしたゝめ
入て、ならびの岡の便よき所支度にうづみれきて、紅葉其上ちらしかけなど、思
ひよらぬさまにして、御所へ参りて兒をうへのかし出にけり、嬉し法師下モと
思ひて爰かして遊びめぐりて、有つる苔破子ノ埋ミのむしろノ上になみゐて、いた

あはれ紅葉を云々
あはれは俗にあはれ
てなどいふ意にて眼
前の事にふれて外の
段情を引出したる意
あり
人もがなもがなは
云々あらまほしきよ
し願ふ辞也

うこそこうじにたれ、あはれ紅葉をたかむ人もがな、(加特)しるしあらん僧
達(何)祈試(何)られよなぞいひしろひてうづみつる木の下にむきて、數珠れ
しすり、印(衆)ことごとくしくむすびいでなぞして、いらなくふるまひて、
木の葉をかきのけたれど、つやく(ウツミ)物もみゆず、所(コレ)のたがひたるに
やとて、ほらぬ所もなく、山をあらせれどもなかりけり、
の見たきて、御所へまゐりたるまに、ぬすめるかりけり、法師ども
の葉なくて、聞(トモ)にく、いさかひ腹立て、かへりにけり、あまりに、興あら
んとする事は、必あいかきものなり、

此段も前段と同意にて物毎にあまりに興あらんとすれば心愛なく無興に終るべしとの
心ばへなり○能あるあうび法師、目くら法師ども也○風流の破子やうの物、風流は花
車なる義也破子は飲食をいふ具也○ならびの岡、仁和寺にあり名所也○苦のむしろ
青き苦一面におひ繁りてむしろの如し○紅葉をたかん、紅葉をたきて酒をあたくめ
よといふ意也かくいふは酒飲なければ祈られよといはん爲也○印ことごとくしく、印は
指にて種々の形をなし呪文をとなへて觀經講經の真言宗の秘法のことごとくしくはたい
うらしく○いらなく、大和物語の抄にことごとくしきさま也とあり○つやく、一切
なぞ云ふ意也○いさかひ、いひさかひの約にて口論する也○あまりに興あらんとする

事は云々、此句此段の要領にて前段にもかゝれりゆいなきは無、愛にておもしろみの
なき意也無間の音便と混することなかれ

〔美〕家の作りやうは、夏をむねとすべし、冬はいかかる所にもすまる、
暑き比わろき住居はたへがたきと也、ふかき水は(カ)涼しげなし、淺くて
ながれたる(ハ)とるかにすゞし、こまかなる物を見るに、遣戸は葺の間よ
りもあかし、天井の-highきは、冬さむく燈くらし、造作は用なき所をつく
りたる、見るも面白く、萬の用にも立てよしとぞ、1人の定あひ侍し、

此段家作の心ばへを教へたり同じ金銀を費し同じ手間を入れてあしく住ふは興なき事
なりとす前に家居のつきとしくあらまほしくと興ある物なれといへる意なるべし
○遣戸、詞林云上と下とのみずにはめておしやりてあけたてする戸也○葺、板戸の如
くにして板をはりて横にしげくさんを打たる物なり一間に二枚つゝ横に入れてかけが
ねにてとめ置く格子の外にあつるなり○天井の-highきは云々、天井高しとてさのみ納
涼の便にもならねば冬もまた悪しからぬやうに作るべしと也天井は火災を防ぐが爲に
井筒の形を摸して屋裏に張るもの也故に天井と名づく○造作、造作は家を建てたる後
床の間戸棚地氈などすべて室内に造り付るをいふ舊説母屋書院など外の用なき所とい
ひ又構への屋敷に空地を残すといふ共に造作の字にあたらす

〔垂〕久しく隔たりて、あひたる人の、我かたに有つる事、かずく數々に殘

はづかしからぬかは
「是はまづはづかし
からぬかは」との
うらをいひて表の
づかしからぬよしを
知らずる也

けふ有つる「是を興
わりつるといへる説
あれを興はきよりの
假字にて假字ちがへ
るのみならず下の語
り興するといへるに
重りてよろしからず

なく、語りつゞくるころあいなけれ、隔なくなれぬる人も、ほそへて見
るとはづかしからぬかは」ハツカシカラヌマアラフ

此段と此下の段は人に逢うて物語すべき時のたしなみをかけり

次さまの人は、あからさまに立出ても、けふ有つるごととて、息もつぎあ
へず、^{早ク人ニ}かたり興するぞかし。よき人の物がたりするは、^{今日}人あまたあれ
ど、ひとりにむきて、いふを、たのづから、^他人もきくにころあれ、よから
ぬ人は誰^{ニイフ}ともなく、あまたの^人中、うち出て、見るそのやうに語りな
せば、^{座中}皆れなじく笑ひ乃、^人い、^人とらうがはし、をかしま事をいひ
ても、^人いたく興せぬと、興なき事をいひても、^人よくわらふにぞ、^{其人}品の程
はかられぬべき

○あからさま かりうめに、ついちよつと、なといふ意也○けふ有つる 今日といへる
は珍しきことを人の聞かぬ先にこの意なるべし○いたく興せぬと 智ある人又上臈な
どは余り興じて笑はぬ○よく笑ふにぞ 智淺き女わらはなどはよく笑ふものこ

人のみさまのよしあし^{チ云ロ}さあある人は、うのそ^アなど定あへるに、^{徳智}れの

が身をひきかけて、いひ出たるいどわびし、

○人のみさまの云々 みさまは行跡様躰之其行跡様躰さやうなるはよしかやうなるは
あしきといひ又才智ある人にはかやうなる業ありなを評判しあふに淺智の人の我身を
定規にして彼れは我はどあらんか我よりは劣りたるなといひ出たるはわびしく聞にく
きとなり

〔弄〕人の語り出たる歌物語の、哥のわろきころほいなけれ、少しその
道しらん人は、^{ソロキ歌チ}いみじとれもひてはかたらじ、^{本意}すべていともしらぬ道
の物かたりしたる、かたはらいたく聞にくし、

此段はすべて前段の余論之我よからぬ歌を利口げに人に語るべからずすべてわが知ら
ぬ道をしたり顔にいひ出るはにがくしき事之只何事も言を憤むべしとぞ○ほいなけ
れ 詮方なしとぞ○かたはらいたく 傍痛の義傍に見聞することのたへがたきにいへ
り

〔弄〕道心あらば、住所にしもよらじ、^俗家にあり、^俗人にまじはるとも、後世
をねがはむにかたかるべきかは、^チいふは、^チさらば、後世しらぬ人なり

此段道心をすゝめて道心あらば世を離れて身を閑にせよ然らざれば道はもとめ易から
ずとぞ例のつれづれを本意とする意なるべし○道心 佛道をつとむる意なり○更に後

いみじとれもひては
枕草子にかたはら
いたきものことによ
しどもおぼえぬわが
歌を人に語りて人の
はめし事などいふも
かたはらいたし」と
いへる條にや

此世をはかなみ
体言を受くるをば一
種の係りにてくしき
のみに應ずるなり

世知らぬ 後世佛道の成就しがたきを知らぬ人なりとぞ

けには此世をはかなみ、必生死（佛門ニ入ラ）をいぞんと思はむに、何の興有てか、
朝夕君につかへ、家をかへりみるいとなみのいさましからん、心は縁（縁）
にひかれてうつる物なれば、閑ならでは、道は行じがたし。

○生死を出んと思はむに 不生不滅の悟を開かんと思ふに之〇いさましからん 何の
いさまかあらんいさまじきこと

そのうつはもの昔の人に及はず、山林に入ても、餓をたすけ、嵐をふせ
ぐ、よすがなくては、あらぬ業なれば、おのづから世を食るに似たる
事も、たよりにふればなごかなからむ、されはとて、そむけるかひか
し、さばかりならはなごかは、すてしあぞ、いんはむけの事なり、さ
すがに、一たひ道に入て世をいとはん人、たどひ望ありとも、勢ある
人の貪欲おほきに似るべからず、紙の衾麻の衣、一鉢のまうけ、あか
さのあつ物、いくばくか人のつひをなさん、もとむる所は易く、う
の心はやく足ぬべし

○世を食るに似たる 家にあり人にまじはる人の衣食ゆゑに食る事の多きやうになけ
れば似たるといへるにやおもしろし〇むげの事なり 一向に道知らぬ人のいふ事也き
こんには上中下のある事世にも正像末あれば人により時による事なるべしと也〇さす
がに 是より兼好徒然として閑居する本意をいふ也〇たどひ望ありとも云々 自然還
俗したりとも初より俗にてせんよくある人にはまさらん也まして出家をしどぐる人
は云々と下の句をいはんため也〇いくばくか 幾許かにていかばかりかに同じ

かたちにはつる
慈圓の歌に「なにゆ
ゑに捨ける身かどを
りくは姿にはちよ
墨ぞめの袖

かたちにはつる所もあれば、さはいへど、悪にはうとく善にはちかづ
く事のみぞおほき、人と生れたらむしるしには、いかにゆして、世を
のがれんこところあらまほしけれ、偏にむさぼる事をつとめて、菩提
におもむかさらん、萬の畜類にかはる所有まじくや

○さはいへど かの飢寒の故にて世を食るに似たりといへども也〇菩提 翻譯名義集
三菩提摩訶云道之極者稱曰菩提 秦無言以譯之 後代諸師皆譯爲道以 大論翻爲佛
道一故也

〔云〕大事をおもひた、ん人、は、去がたく、心にかゝらん、ことの本意を
といはずして、さながらすつ、べまなり、

さだしおきて「此
は下の物さわがし
らぬへかけていへり
下のしたゝめてのて
も同じ

一期「三藏法數三十
三期者謂人從
生至死也

此段は前段の余論にして菩提心を起さんとする人はたとひ心にかゝるいかやうの世事ありども即ちすて、願する事なかれ万事にさゝはりては一大事存命の中になり難しとの意なるべし因て第一節を一段の要領とす○大事 人間一生の一大事也前段に生死を出んと思ひ菩提におもむくべしなといへる是也○さながら、うのまゝに

若はし此事はて、れななくは彼事（カレコレト）さたしおきて、しかくのそ、人（年）の嘲（ニシテ）やあらん、行末（イコソレト）難なくしたゝめまうけて、年（ゴ）來もあればこころあれ、其事（仕果ルナ）またんほど、あらじ、物さわがしからぬやうに、なぞ思ひん（セン）に、ゆさらぬ事のみいとゞかさなりて、事（世間）のつくるかぎりもなく、思（大事）ひたつ日もあるべからず

○しばし此事はて、此事とは世間のいとなみ事をいふはて、は果しとげてなり○同じくは彼事さたし置て 彼事もまた世間のいとなみ事なりうの事多きを以てかれこれの事といへりさだしおきては定めおきて○しかくのこと 云々をよめり語の多きを略していふことばうれ、の事といふが如し○年來もあればこころあれ、この年こそ即ち今まで發心させで暮したる年もあればある程になり○ゆさらぬ事 ぬさらぬは得（大事）不（大事）去（大事）にて不（大事）得（大事）去（大事）といふが如し

れほやう（世間）人を見るに、少し心あるさ（ニテモ）いは皆此（道心ヲ起サン）「あらまし」にてぞ一期（世間）のすぐめる

○れほやう 大勢之○あらましにて かねての思ひはかりにて

よりも「このもは輕
くろふるもにて意な
けれどもはにも通ひ
てよりはなきもいは
るゝに

近き火などによぐる人は、しほし（コト）とやいふ、身をたすけんとするは、恥をもかへりみず財をも捨て（棄テ）のがれさるぞかし、命は人をま（命）つ物か（命）無常（無常ノ來ラン）の來るとは、水火の（身ヲ）せむるよりも速（速）のがれがたき物を、その時（無常ノ來ラン）老たる親、いとさなき子、君の恩、人の情、すてがたしとて捨（ナク）ざらんや（ナク）

○すてがたしとて捨てざらんや 命終る時は君も親も妻も幼稚の子も皆すて、行くならひなれば存命中うれにかゝはりては、一の大事成りがたしと世人をいささほりてかけるなるべし

〔六〕眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり、芋がしらといふ物をこのみて、おほく食ひけり、談義の座にても、おほきなる鉢にうづ高くもりて、膝もとに置つゝくひながら、文（経論聖教）をもよみけり、煩ふとあるには、七日二七日など療治とて籠居て、思ふやうに、よき芋がしらを擇（チリ）びて殊（オシ）に多くくひて萬の病をいやしけり、人にくはする事なし、た

三万疋一貞大雜記に
 錢壹貫文を拾疋と云ふ
 ひ百文を拾疋と云ふ
 こと奇異雜談に云ふ
 足十疋物の時云ふ
 之れ犬追物のとき
 原者犬をはなつに
 正はなては一貫と
 五十疋はなては五
 文と云ふ故に十
 錢にわたる故に十
 を一疋と云ふは文
 千疋と云へり是犬
 物より出たるは云
 々奇異雜談は室町
 の時代江州佐々木
 の家臣中村豊前守
 家にて記たる書
 ましかば云々てん
 ましかばといひか
 りたる時は未然言の
 ましにて結ぶは大方
 の格めなれと稀には
 んべきなとの未來詳
 にて結べるもあり
 人にひとしく一此に
 はどに通ふににての

如くにといふ意

獨のみぞくひける、きはめて貧かりけるに、師匠死にさまに、錢二百貫と、坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、かれ是二三万疋を、芋がしらのあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づゝとりよせて、いもがしらを乏しからずめしけるほごに、又こと用にもちふることなくて、うのあしみなになりけり、三百貫の物を、まづしき身にまうけて、かくはからひける、誠（世二）にありがたき道心者なりとぞ人申ける、此僧都ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり、（百ツル）どはなにものぞと人のとひければ、さるものを我もしらす、若あらましかば、この僧のかほにまてんとぞいひける、此僧都みめよく力つよく大食にて、能書學匠辨説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかく思ひたる曲者にて、萬自由にして、大方人にしたがふといふ事なし、出仕して饗膳なごにつく時も、皆人の前（世）すゑわたすをまたず、我前にすゑぬれば、やがてひとり打くひて、歸りたければ、ひとりついたらちてゆきけり、とき非時も人（世）にひとしく

く定てくはず、わがくひたき時、夜なかにも曉にもくひて、ねぶたければ、晝もかけ（イ）こもりて、いかかる大事あれども、人のいふを聞いれず、目さめぬれば、いく夜もいねず、心をすましてうろぶきありきなど、尋常（スル）ならぬさまなれども、人にいとはれず、萬ゆるされけり、徳のいたれり、けるに（下）や（下）

此段は前段の意を受けて道心だに堅固ならば其行跡自由なるも皆人ゆるすべし盛親道を破れども一大事を明らめたればいと心にくしとぞ ○眞乘院 仁和寺の院下也 ○談義の座 宗の義をどく講釋の座也 ○三万疋 三百貫也 ○うのあし 錢を料足といふ意也 ○しろうるり 入江昌喜云此白うるりといふを秘事傳授なごいはん事うけられず卅一編の文意疑なき歎たとへば白うるりといふべきを盛親しろうるりといひ誤られしを傍人、どはいかなる物ぞとこがめし時屈せずして我も知らずといはれしを後人の知りたるよしにて傳授なごいはん事心あらん人誰か容るべき云々 ○宗の法燈 宗は眞言宗なるべし法燈とは宗門につきての棟梁也 ○曲者 うへはろしりたるやうなれど下心はほめたる詞也 ○ついたらちて にはかに立ちて也 ついは急の字の意也 ○とき非時 ときとは日中午の時に齋食する也非時とは佛家の法に食にて日中を過ては物をくはず或一人の沙彌ありて一度の齋飯にたへかねければ佛ゆるして晩にくはしむ是を非時とす ○徳のいたれりけるにや 一段の要領之此法師の行跡無禮至極なれど少も人にへつらはす又人を輕しめ人をないがしるにせず故に人ろの無禮をとがめすすべてゆるされけり是道

徳の至れる故なるべしとぞ

〔云〕御産の時マツナホトナレバ餼おとすとては、さたまれる事にはあらず、御胞衣とゞこはる時のまじなひなり、滞らせ給はねはこのとをなし、下さまよりことおこりてマツナホトナレバさせる本説なし、大原の里のこしきをめす也、古カき寶藏の繪に、賤き人の子うみたる所に、餼おとしたるをかきたり、

此段故實をいひ明せり物のまじなひはかやうのはかなき義をとるものとぞ○既れとす既こしきとよみて飯を炊ぐ器也之を御殿の棟より轉かし落す事はこしきは腰氣とよみの通へる故こしの氣を引下す爲にとのまじなひなるべし○御胞衣 ねなは胎兒の臍のぞにつけるものにて母の胎内にある間かふりてをるもの也之を女の後産といへり○大原の里 大原といふも大腹と通するゆゑ也是も産後の大腹となりて胞衣のと、こはらずくたる様にとの義也

〔云〕延政門院院、いときなくおひしましける時院へまゐる人に、御ことつてとて申させ給ける御歌、

ふたつ文字牛の角もじすぐなもじぬがみもじとぞ君はおほゆる、
こいしく思ひまゐらせたまふとなり、

此段いとけなき姫宮には奇特なる御歌なりとて記せるならん○延政門院 八十二代後

こいしく「仮字」か
ひにてはこひしくと
昔くべきなれど此時
は其さいまだ行は
れざるにやたとひは
たありとも幼少の姫
宮なればとがむべき
にあらす

嵯峨院の皇女也

〔云〕後七日の阿闍梨阿闍梨ニ武者をあつむること、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人として、かくこととゞしく成にけり、一年の吉凶相は此修中の有様にころみぬなれサレば、兵を用むと、おたやかならぬとなり、

此段もまた前々段の如く故實をいひ明し且道衰へたる世には物事の作法もあしくなれる事を暗にいひ歎きたる之○後七日 公事根源に云真言院の御修法正月八日より七日おこなはる云々後七日の御修法とは此事也云々禁中元日より白馬の節會までは公事多き故に沙門参らす八日より始る也云々○阿闍梨 名義集唐言軌範附言正行一能糾正弟子行一故也とあり此御修法をつとめ給ふ師也

〔云〕五車の五緒はかならず人によらず、其身ほごにつけて、其家相當きはむるつかさ位キハムレにいたりぬれば、のるものなりとぞ、ある人仰られし、

此段もまた故實をいひあかし且車の五緒は極位の人ならでは乗るまじきを近代多く乗用するは道のすたれたる故なるべしとぞ○車の五緒 文段抄に云桃華莖葉、車、部、云、云々然れば五緒はすだれのかざりなる事知られ侍り云々或説に世俗に御所車といふは五緒車をあやまれりといへり七緒といふ事もあれば中略如何にや猶可尋之

なりたるなり」異本
此句の下に「とぞあ

る人おほせられし」
の句あり

桶をもちたる人は、はたをつぎて今用るなり、

此段前段に車の事をいへるに因みて冠の事をかけりさて今の世の冠は古へに變りて美麗になりゆき物皆奢侈に赴けりと雖古への冠桶の端をつぎて用ふるは聊古へを忘れぬ心ばへなるべしとぞ○冠桶 冠箱とて曲物に梨地蒔繪なせして内を錦を以て張り冠を入るゝものなり○はたをつぎて うの端をつぎて之是また作り直さばいよ、奢侈の至りなるべしとぞ

〔六七〕岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙を添て、此枝に（コノ枝チ）つけて

衆らすべきよし、御鷹飼、下毛野武勝に仰られたりけるに、花（花ノ枝）に鳥つ

くるすべし（チ）しりさふらはす、一枝にふたつつくる事も存知候はずと申

ければ、膳部（膳部）に尋られ、人々にとはせ給ひて、又武勝に、さらばおのれ

が思はんやうにつけてまるらせよと仰せられたりければ、花（武勝カ覺エシヤ）もなき

梅の枝に（梅ノ枝）一つをつけてまるらせけり、武勝か申侍りしは柴の枝に、梅

の枝つほみたると散たるとにつく、五葉（五葉）などにもつく、わたの長さ七

尺、或は六尺かへし刀五分にきる、枝（枝）の半に鳥をつく、つくる枝（鳥ノ足チ）ふま

する枝あり、しぐら藤のわらぬ（モ）にて（鳥ノツチ）二所つくべし、藤のさきは、ひう

柴の枝「古寫本枝の字の下ににの字あり今之に従ふ而して此には散たるとにのにもじともにつくの詞に應ずるなり

花に鳥つけずとは云々「此義古今卷十に「我やどの花ふみちらす鳥うたん野はなけれはやていにしもくるとあるを兼好心付すはた鷹のこを委しくえ知らぬ故かゝる疑ひありしなるべしされば貞徳も此花に鳥を付すといふより以下かゝすといふれきたき義は是程のあやまちありども愚なる兼好とは申がたしといへり
長月「稻新月の略言なるべし

ち羽のたけにくらべて切て、牛（ウシノサキチ）の角のやうにたはむへし、初雪のあした、枝をかたににかけて、中門よりふるまひて参る、大みぎりの石をつたひて、雪の跡をつけず、雨はほひの毛を、少しかなぐりちらして二棟の御所の高欄（鳥ノ枝チ）に（鳥ノ枝チ）よせかく、祿を出さるれば、肩にかけて拜して退く、初雪といへども、沓のはなのかくれぬ程の雪には参らず、あまればひの毛をちらすとは、鷹はよわをこをどるとなれば、御たかのとりたるよしなるべしと申き、花に鳥つけずとはいかなる故にか有けん、長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、君が爲にとをる花は、時しもわかぬといへると、伊勢物語にみゆたり、造り花はくるしからぬにや（ニ）

此段鳥柴の古實の正しからざるを正してかけり○岡本關白 關白從一位左大臣家平公岡本と號す近衛殿の一流なり元享四年三月廿九日出家し同五月十四日薨す○鳥一雙 たいに鷹の鳥といへば雉の事也一雙は二羽にて一つがひ也○かへし刀 木竹によらずはすに切りて其うらをきりうらをかへし刀といふ○しぐら藤 俗につぐら藤といふもの也○ひうち羽 鳥の羽先にすぐれて長き羽あり火打のなりに似たり○中門 大門と寢殿との間にある扉重門之○ふるまひて 容貌威儀をつくろうて也○大みぎりの石 軒下の石也○雨はほひの毛 雉の尾のつけきはにある毛にて下にいふよは腰の毛也○

二棟の御所 棟二つあるやうに作りたる御所にて攝家のさま也○祿 拜領物褒美のこ
と也○長月 陰曆九月の異名也○きみが爲にと云々 伊勢物語九十八段に「我たのじ
君が爲にとぞる花は時しもわかぬものに予ありける

ちかければと「此と
は上のやよゆか、り
てと受たる格なれ
ばとの上に結ぶべき
詞あるべきをよぐめ
てと受たる也
はべれを「此とはこ
ろの結び辞を轉じて
下へづいけたる格に
てすべて此格の意
もは「されども」の意
也

〔六八〕賀茂の岩本橋本ハカは業平實方ノチなり、人の常にいひまがへ侍れば、一
年まゐりたりしに、老たる宮司のユキ過しをよびとゞめて尋ね侍しに、實
方はみたらしに、影カゲのうつりける所と侍れば、橋本ハシや猶水のちかけ
ればシレハこれほけ侍る、吉水ヨシミヅ和尚、月をめで花をながめしにしへのや
さしき人はこゝにありはら、とよみ給けるは、岩本の社とこゝ承れき
はべれサレ「これのれらより、中く御存知なきもこゝろさぶらひめど、い
どうやくしくいひたりしころ、いみじくればほけしか、今出河院イデカ近
衛チノとて、集ツクどもにあまた入たる人は、若かりける時、常に百首の哥を
よみて、かの二つの社の御前の水にて書て手向られけり、誠にやんで
となきはまれ有て、人の口にウタある歌おほし、作文詩序など、いみじく
かく人なり、
此段前段をうけて物の知れぬことを明し終りに近衛の局の信心のしるしをいひて次々

の段を起せり○業平 平城天皇の御孫阿保親王の五男なる故在五中將といへり○實方
小一條左大臣師尹公の孫侍從定時の子にて一條院の御時大納言行成卿と口論の事によ
りて陸奥に左遷せられ給ひし人也○みたらし 御手洗也神山より出で片岡の森など過
て流れ行く川也さて御手洗とは賀茂のみに非ずすべて神社の前にある池川の水をいふ
○吉水和尚 粟田口青蓮院の慈鎮和尚也東山の吉水に居る故に吉水の和尚と稱す和尚
は佛家にては師の義或は僧位とす○今出河院近衛 今出川院に宮仕せし近衛の局の事
也今出川院とは龜山院の後常盤井の相國實氏公の孫中宮燈子なり○やんことなきはま
れ 常並ならぬはまれ也

何がしの「ろの名た
しかならぬゆゑたい
何といへりかしは助
辞

〔九〕筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなるもの、有けるが、土お
ほねを、萬にいみじき薬とて、朝ごとに二つづ、焼てくひける事、年久
しくなりぬ、或時館のうち、人もなかりける隙をはかりて、敵襲來り
てかこみせめけるに、館の内に兵二人出きて、命ををします戦て、皆追
かへしてけり、いとふしきにおほけて、日比こゝにものし給ふとも見
ぬ人々の、かく戦し給ふは、いかなる人ぞと問ければ、年來たのみて朝
なくめしつる、土おほねらにさぶらふといひて失にけり、ふかく信
をいたしぬれば、かゝる徳も有けるにコト

此段前段に近衛局か信心によりて歌道の冥加にかなひし事をいへるを受けて土大根といへども深く信するときは其徳ある物語をかけり○筑紫 西海道九ヶ國をすべいふ○押領使など云々 國司にあらすして二郡も三郡も代々領する押領使などいふ類ひのもの也○襲來りて 人の思ひまうけぬ所へだましくるこものし給ふとも 物するとは上にいふ事がらをこの物といふ字にこめて見る習ひなれば此處におはせしともいふ意也○ふかく信を致しぬれば 深くの字に心を付くべしかく無情の物の奇特をわらはせるは土大根のいたす所に非ず全く信力の深きより致す所にして佛神の感應ともいふべしとぞ

〔七〕書寫の^{性空}上人は法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり、旅の飯屋に立入られけるに、豆のからをたきて、豆を煮ける音のつぶくとなるを聞給ければ、^{豆ノニル音ガ}うとからぬれのれらしも、恨めしく我をば煮て、からさめを見する物かなといひけり、たかる、豆がらのはらくとなる音は、我心よりする事かは、^{イハカバカリ堪ガた}はいかばかり堪がたけれども力をなきてなり、かくな恨給ひるとぞ、^{豆カラノ音ガ}聞けける、

此段も亦前段をうけて上人の法華讀誦の功の顯れたるは全く信心懈怠なきの致す所なるをいひて今人に信をすゝめたり○書寫の上人 播磨の書寫山に居住せる性空上人也 上人とは沙門秀業の稱○六根淨 法華を讀誦する功德によりて眼耳鼻舌身意の六根清

かくな恨給ひる」此なは續用言の上にありて下をうとどぢむる格なればなを下の語の上につけてな恨給ひるとやうに心得べし

元應の「此下に比の字なきは下の下の比の字にかけて上を略せるなるべし」先柱を「先の字字眼なり柱は琵琶には四つありめくら法師のは五つあり

淨になること法華功德品にとけり○豆のからをたきて 魏の文帝弟の曹植に七歩に詩を作らしむ若成らずんば大法に行ふべしと則聲に應じて曰く煮豆燃豆箕一豆在釜中泣本是同恨生相煎何太急」此詩を以て性空上人に徳をつけて諸人の教となせり○おのれらしも れのれは人をいやしめていふ詞にて豆がらをさしていへる也

〔七〕元應の清暑堂の御遊に、^{後編}立上はうせにし比、^{ナレバ}菊亭の大臣、^{兼季}牧馬を^{ノ琵琶}彈じ給けるに、座に着て、先柱を探られたりければ、一つ落にけり、御懷に^{大神宮}ろくいを持給たるにて、つけられければ、^{大御}神供のまるる程によくひて、^{女房}事故なかりけり、いかなる意趣か有けん、物見ける衣かづきのより、^{イナ}てはなちて、もとのやうに^{イナ}れきたりけるとぞ、

此段前段に性空の法華信心の益をかけるにつぎて菟亭殿の常に藝能をたしなみ信せられし故に事故なくはれの琵琶を弾きすまし給へることをいへり藝能をたしなむ人思ふべき事になん○清暑堂の御遊 天子御一代に一度大嘗會をおこなはせ給ふ時清暑堂の御神樂といふ事有りて其後御遊ある事也御遊には催馬樂あり○立上 禁秘抄に立上は累代の寶物なりといへり○牧馬 古事談に牧馬と立上とは一雙の名物之時人勝劣を辨へすといへり○柱を探られたりければ 柱琴にてはことごとよみ琵琶にてはぢうといふまづ柱をさぐられたるは氣づかひ給へるなるべし此義此段の眼目にて用心諸藝にわたるべき也○衣かづき 見物のとき小袖をかづく女房也

いかなる折なり「此が
は問ひかくるがにて
上に何等の疑ひの辭
をおきてすと切る、
格也
有しが「此しがは強
め辭のしに願ふ心の
がのろひたるとは異
にて有しを有しにな
せいへる心をがにか
へて云へる俗言の格
にて雅言にはあらず
調度」上に見ゆたり
でうと濁りてよひ
べし一切の道具なり

あいなさ「諸書を校
訂するにあひなきと
かけるもあり然ると
きは無合の義にて
人づきなしといふ意
なるべしといへり

〔七〕名を聞より、やがて（其人）れもかけは推はからるゝ心ちするを（ソノ人チ）みる時
は、又兼て思ひつるまゝの顔したる人ころなけれ、昔物語を聞ても此
比の人の家のそこほにてぞ有けん（モソナルチ）と覺ゆ、人も今みる人の中に、思
ひようへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや（其處）又いかなる折ぞ、只今人のい
ふても目にみゆる物も、我心の内も、かゝるものいつぞや有しがと覺
て、いつとは（スレカニ）思ひ出ねどもまさしく有し心地のするは、我ばかりかく
おもふにや（トモ）

此段はすべて一切の事の推量は必ず違ふ事ありといふ理を知らせたり古歌に「きし
より見どころまさされ松島の霞がくれに似る浦もなし」といへる意なり○いつぞや
過し方を大方にいふ詞にて俗にいふと同じ

〔七三〕いやしげなる物「居たるあたり調度の多き、硯に筆のおほき、持
佛堂に佛のおほき、前裁に石草木のれほき、家のうちに子孫のおほき、
人にあひてことべのれほき、願文に作善おほく、書のせたる」おほくて
見ぐるしからぬは、文車の文、ちり塚の塵（チリ）

此段は枕草紙の文体にて多くて賤しき物と見苦しからぬ物とをかけり多くの字に心を

付くべし物皆いやしきにあらす只多きによれるのみ○家のうちに云々 子孫の多きは
家の肥たる也とてめでたき事なるにわしきものとするは、莊子に多男子則多懼とあ
るによれる兼好の趣意なるべし○願文 佛菩薩に申す文章也願はくは二世安樂なせ、
いふが如し○作善おほく 佛像を供養し堂塔建立經典書寫する事なせすべて已が日比
の善行いくつもかさ列ぬる也○文車 書物をつみたる車にて出火なせのとき引出さん
爲の用也今禁中にあり又東寺にもありといへり

〔七四〕世にかたりつたふるを、まゝ（トモ）はあいなさ（トモ）にや（トモ）おほくは皆虚言
なり、

此段は前段人にあひて言葉の多きを賤しき物の一ヶ條に書き載せたるをうけて世間の
小人の虚言妄語する品々を寫し出してうの人に対する心はへを教へたり畢竟は其事の
虚實を分別して覺悟すべしとの義○あいなさ 無愛にてまことのみにふは愛もな
く面白からぬ意也

ある（今）にゆすぎて人は物をいひなすに、まゝして年月過ぎ、堺もへたた
りぬれば、いひたさまゝに語なして、筆にも書とゞめぬれば、やがて
又（實事ト）さたまりぬ、

○あるにもすぎて 針を棒にいひなすの類なり○堺もへたゝりぬれば 國境もへたゝ
り遠國他境の身となれば也

道々の物の上手のいみじきことなど「カタク」かたくななる人の、うの道若らぬは、そゞろに神のごとくにいへども、道若れる人は更「道」よ信もおこさず、音「スベテ」にさくとみる時とは、何事もかはるものなり、

○音にさくとみる時とは云々、道々の物の上手のうへのみに限らずすべて耳にさくと目に見るとは違ふものなればうゝるに信をおこすまじきこと

かつあらはる「下手」を「カ」かへり見ず、口「カ」まかせていひちらすは「ヤ」やがてうきたる「カ」ときこゆ「カ」文「カ」われもまことしからずは思ひながら、人のいひしま「カ」、鼻のはさおをめていふは、うの人のうらことよはあらず「カ」ばよくしく所々うちおほめきよくしらぬよあして、さりながら「カ」つまづまあはせてかたるうらことはおうろしきことなり、わがため面目あるやう「カ」いはれぬるうらことは、人「カ」いたくあらがはず、

○かつあらはる、かつは是と彼と物二つまじはる時にいふ辭にて即ちかたへよりあらはるゝら言をもかへり見ず口に任せていひちらすとらへる意、○おごめてうごめくに同じ是は偽と心に思ふ事を顔にあらはしていふまじき○おほめき、はきとせず

どにもかくにも」どかくの二語の間に、もの辭をまじへたるにてどかくにといふに同じ

皆人の「カ」虚言は「カ」獨「カ」さもなかりし物をと、いはんも詮なく聞たる程「カ」、證人「カ」よさへなされて、いと「カ」さたまりぬべし、どよもかくよもそらでとおほき世なり、たゞ「カ」常「カ」ある、めづらしからぬ事「カ」のまよ心得たらん「カ」万「カ」たがふべからず、

○どにもかくにも云々、以下万たがふべからずまでは前の段々を結びて虚言をさく者の心入をいふ、さく人害にさへならぬ事ならばたと以後日の証人にせらるゝともめづらしき事を思ひうへすたゞ常にある事のまよにさく置くべし、まひてあらそはんも詮なき事なりとの教へなるべし

下さまの人の物語は、耳おそろくそのみあり、よき人はあやうきてをかたらず、

○下さまの人の云々、下さまのいふことはわやしう不思議なることとなりよき人はかく「カ」奇怪の事はかたらぬとなり

かく「カ」いへど、佛神の奇特、權者の傳記「カ」さのみ信せざるべき「カ」よもあらす、これ「カ」は世俗の虚言を念比「カ」よ信じたるもをこがま「カ」く「カ」よもあらじ「カ」なごいふも、詮なければ、大方はまとい「カ」あひ「カ」らひて、ひとへ「カ」よ信

をこがましく」をこともど國の名なり後漢書南蠻傳に烏潯人の事委しく見ゆて笑はしき事多かり是よりとりてはからしく又あほらしくなごいへりがましくは形容詞なり

せず、又疑ひあざけるべからず、

○權者 佛神なきのかりに人間にあらはれたる人といふ○さのみ 字眼なり然耳の義にて俗にうのやうになどいふ意なり○信せざるべきにもあらず 皆一々偽りと定めがたしと○をこがましく ばからしくこ

〔五〕蟻のどくよ集りて、東西よりぎ、南北よはいる、高さあり賤さあり、老たるあり若きあり、行處あり歸る家あり、夕よいねて朝よれく、いとなむところなよとぞや、生をむさざり利をもとめてやむとまな、

此段は皆人名利に使はれて静なる暇なく徒に一生を苦しむるは死の近きを知らず只常住ならん事を思へるが故なりといひて無常をすゝめたるなり○蟻の如くに 世間の人の多きにたとへたり○東西にいろぎ南北にはしる 名利につかはれてひまなき様をいふ○生をむさざり云々 以下營む所は是かと答へたるなり

身をやいなひて何事をかまつ、期する所、たゞ老と死とあり其來る事速よして、念々の間よとゞまらず、是をまつ間なよのたのしみかあらん、

○念々の間に云々 一念々の生滅する間も無常のせまき來りて老死の二つはしばらく

東西にいろぎ以下朝におくといふまで十品を對句にかける筆勢妙

念々の間に「此にはもの意にて常にあくまでも見るといふべき所をあくまでに見るといふが如し

利欲ニ

まごへるもの、これをたれられず、名利よれはれて、先途のちかきことをかへりみねばなり、れろかなる人の又これをかなし、常住ならんことを思ひて、變化の理をいらねばなり、

○先途 死して行く先の途にて冥途之○變化の理を 形をあらためずしてかはるを變といひ形をはなれてかはるを化といふ故に老病は變之死は化之是即天地の正理にして物皆此理にもる、事なし而して感なるものは此理を知らず只此世の常住ならん事を思ひて死を悲むと云

〔五〕つれづれわぶる人はいかなる心ならん、まぎる、方なくたゞひとりあるのみころよけれ、

此段は前段の余波にして人間一生涯はいろがはしき世事にあづからず身心共に静に徒然とあらまほしき事をいへり畢竟は老と死との速に來る覺悟なく世事に忙しき者の爲にうの之を待つ間のたのしみを教へたるなり○つれづれわぶる人は云々 名利に奔走して閑居をわびしく思ふ人はいかなる心やと自ら不審を起しさて其人は只一人あるよりよき事はなしと自ら教へたるなり

世よ一たがへば、心外の塵よろをはれて、まごひやそく、人に交れば言葉よろの間に隨ひてさながら、心よあらず、人よたはふれ、物よあらう

のみころよけれ」此外にはなしとかぎりたる詞なり

ひ、一たびは恨み、一たびは歡ぶ、其て（世間ニ從フガ故ニ）定れる事なり、分別みたりよれ
こりて、得失やむ時なり、まごひの上よるへり、醉の中よ夢をなす、
走（東西南北ニ）りていろがはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのごとく、

○心外の塵 本心六塵にうばそれまよふ事之六塵は眼耳鼻舌身意をいふ○得失やむ時
なし 或は利を得或は利を失ふ事やむ間なき○るひの中に夢をなす 眞實もなき事
をする由○はれて 放心したるにて心を勞するあまりにばけたる意

まばらしく「眞實の樂
に非ざる故にしばら
くといふ
生活人事云々」止觀
第四云縁務有二三
一生活二人事三
二技能四學問

いまた誠の道をいらすとも、縁をはかれて身を閑し、事よあづか
らずして、心を安くせんころ、はらく樂いぶともいひつべけれ、生活
人事、技能、學問等の諸縁をやめよとて、摩訶止觀よ侍れ、
○誠の道 是即ち生死出離の覺りをいふ○事にあづからずして云々 事にあづからず
して安きといふ處一段の眼目之ろは事有てもあづからねば事なきと同じ理なればなり
○生活人事云々 生活は身命を救ふ産業なり人事は人間の事に交りあづかる之技能は
万の藝能之學問は内外の書をよみ習ふなり○摩訶止觀 摩訶は梵語大と稱す止觀は天
台大師の述作法華を釋せし書之玄義文句止觀を天台の三大部といふ

〔老〕世のれほら華やかなるあたりよ、歎も悦もありて、人れほく行と
ぶらふ中よ、ひざり法師のまゐりて、いひ入（案内）たゞずみたるころ、さら
ずともみゆれ、さるべき故有とも、法師は人ようどくて有なむ、
此段は前段に世縁を離れて心を安くせよといへるをうけて俗人すら此の如くして沙
門は人間交りに疎くてありなるとて名利の僧を戒めたるなり○世のおほら華やかなる
貴人家家權勢の人○ひざり法師 官職のある法師ならんといへり○さるべき故あ
りとも 行かでかなはぬ故ありともとかたく法師をいましめたるこ

世の人の上は「この
いはをばの意のい也
古今一「春日野のけ
ふはなやさう云々の
いと同じ
しりけん」と「是はぞ
の結び辭のけんにて
切れぬべき處なるを
と、受けてつゞけた
る也

〔老〕世中よその比人のもてあつかひぐさよいひあへると、いろふべき
よはあらぬ人の、よくあないりて、人にも語りきかせ、問ひきゝたる
こそ、うけられね、その片はどりなるひざり法師なぞぞ、世の人の上は
我（身の上）ごとく尋き、いかで（益ナキ）かばかりの知りけん、と覺ゆるまでぞいひち
らすめる、

此段も前段と同じく法師の佛法を側にし世俗のことを能く知りたるはよろしからずと
て是また名利の僧を戒めたるなり○人のもてあつかひぐさ 世間の咄ぐさ○いろふ
べきに 係り合ふべきに又とり扱ふ意にもいへり○うけられね 承引せられぬ事す
とこ

又うけられね「識に
云又の一字は何れの
文勢にかたよるべき

〔老〕今様のとどもの珍しきを、いひひろめもてなすころ又うけられ
ね、世にことふりたるまで、いらぬ人の心にく、今更の人などのあ

是は一決して上と同一段と見るべきか。こゝもどに「このに」はるれにかぎりにていふ所にある辭にてのみにてといふ意也

されば世にはづかしき云々「讀に云世に」とは別の入なる故さばと發語の詞をおきて尤世には諸道に達して誠に心得たる人あるにこなたより人はづかしき方に思ひあがめたるをうの身もほこりてうの答ふと思へる氣色は例の道に入たちて難をいひ後には上品の難をいふほどが

人ごとに云々「一段の主意を先いひ出しにてまかにいふ文法なり

さそくし「さしよくの字音を約めて一の休言となしたる」武をこのむ「此語此段の病根也

る時他所ニハキヲ知ラテこゝもどにいひつけたるをくさ人ノ知ラス異もの「名など、心得たるどちかたのいひかは一、目見ありせわらひなどして、心しらぬ今更ノ同志人に心へず思ひすること、世ニモなれずよからぬ人の必有こと也、

此段もまた前段の余論にして人の物いひのよからぬことを教へ戒めたり○今様のことも時のほやり詞なるべし○世にことふりたる發端今様の事といふに應ず○今更の人更にはじめて他所より來りなごする人なり

「八〇」何事も入テぬさまじさるぞよき、よき人の知る事とて、さのみしりがほにや「いふ」サハインハツか、田舎よりさし出さる人こそ、萬の道に心得るよしのせしいらへいすれ、されを世田舎モノニハにづかしきホドかともあれどみづからいみじと思へるけしきかなくなり、よく辨へる道には、必口おもくどはぬかぎりいせぬころいみじけれ、

此段も又前段の余論にして上には他所より來る人をまじはすまじきをいひこゝには他所より來る人の心もちをいへりよく知らぬ事はさのみ知り顔にあるまじき事との戒めなり○世にはづかしき云々 田舎人には却て諸藝能によく長じて世間に心恥かしく思ふ人もあれど、こゝとはぬ限り、とへばいひこはねばいはぬころよけれとなり名聞をもとめざる故なるべし

「八二」人ごとに我身ニカトキにうときをのみぞこのめる、

此段は前段に聖法師などの似合しからぬ事をもなすを戒めたるをうけて我務むべき事をばせすしてなすまじき事をなすは各よからぬことなるをいへり或云此段は後鳥羽院後醍醐天皇など時の理勢を知らずして昔の王道になさんと思召大塔官の天台座主にて甲冑を帶し戒を好み給ふのあやまりを諷したるなるべし

法師兵のつはもの道のをて、夷は弓ひくをべしらす、佛法しりさるさうくし、連歌し管絃をさしなみあへり、されどれろかあるれのれが兼道兼よりは、猶人に思ひあかざられぬべし當時亂世ナレバ法師のみにもあらず、上達部殿上人かみさままでれしかべて武をこのむ人おほかり、

○つはもの、道をたて 兵の行ふべき道を旨と押たつる○夷 ぬびすとほもと陸奥に住める荒男らをいへれどこゝにてはるなかの武士と云ふ意なるべし○おろかなるおのれが道 好まぬによりて其家の事に疎くたろかなる○上達部 官は宰相位は三位以上をいへり又月卿と稱す○殿上人 四位五位六位をでも昇殿をゆるされたる人をいふ又月卿に對して雲客と稱す

百々び戦ても、々々び勝とも、いまた武勇の名を定めがさしうの故は、運に乗じてあたくたく時、勇者カレハにあらきといふ人かし、兵つき矢さ

はまりて終に敵に降らぎ、死をやそくしてのち始て（武勇）名をあらはせべき道あり、いけらんほどは武にはこるべからぎ、

○運に乗じて（生有）運とは氣運と時運と○勇者にあらざといふ人なし 運よき時は武勇を心得ぬ者も敵にかつ事ありされば人皆之を勇者といふべきも其實眞の勇者といふべきは云々と下へいひ及したる○始て あらたにといふが如し

人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、の家にあらぎを、好みて益かきことあり、

○ろの家にあらずば云々 此句一段の要領なり弓馬の家は義によつて人を殺すと雖ろの家にあらずして生物を害するハ人心固有の仁道に背き又人心なき禽獸のふるまひに近し故にかやうのふるまひ好みて益なしといひて當時其家にあらざる公卿僧侶などの兵を用ふるを深く戒めたるなり

〔八二〕屏風障子などの繪も文字も、かたくかなる筆様してかきたるが見にくきよりも、宿のあるじのつゝかくればゆるあり、ねほかともてる調度にては、心れとりせらるゝては有ぬべし（サレド）のみよき物を持べしと（云フ）にもあらず、損せざらんためとて、しあなく見にくきまにしあしめづらしからむとて（色々ノ細工ナド 品格）用かき事をもしうへ、わづらはしく好みかせるをいふ也、ふるめかじきやうにて、いゝことぐしからず（金）ついでもかくて物がらのよきが好あり、

大かたもてる調度にても云々第十段に大かたは家居にこそことさまはおしはかじらるれといへると同じ心ばへなり

心まさりて云々といへり
不具なるころよけれ
第二段にいふある
に従ひて用ひよの意

此段は家にある諸道具のよしあしにて主の心は知らるゝものなれば見にくく又用なき事をも仕うへなせするはあしきとなり是又上に吾道ならぬ事の用なきを好むを戒めたる心ばへなり○屏風 下學集云屏は退也退風之義也又屏は蔽也蔽風也○障子 ふすま障子とて間のへだてにたつるもの今略してふすまといふ○いふなり 前に心勞りせらるる事は有ぬべしといひたるはかやうなる事をいふがとの意也

〔八三〕（巻物ナドノ）うすものゝ表紙は、とく損ぎるがわびしきと人のいひしに、頼阿が羅は上下（ガ）はつれ、螺鈿の軸は、貝たちて後ころいみじけれと申侍しころ、心まさりて覺ゆしか、一部とある草子かとの、たかじやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が、物をかならぎ一具にとゞのへんとせるは、拙なきものゝせるとなり、不具なるころよけれといひしも、いみじくればほしなり、すべて何も皆そのとゞのほりゑるはあしき事なり、このこころを、さて打置ゑるは（ユタカニテ）たもしろく、いきのふるわざなり、内裏造らるゝにも、必作りはてぬ所を、残をとなりと、或人申（生）

内外の文「内典外典
と野菴云凡佛書を内
典とし儒書を外典と
する事浮屠氏より云
ふ私にて天下の公論
にあらす云々

侍しなり先賢の作れる内外典外の文にも、章段のかけたることのみぞ侍
る、

此段は前段損せざらん爲とて見にくき様に仕なしといへる余論にして物盈ればかくる
の理をいへり畢竟物は充分に調りたるはあしきことの心ばへなり○うすもの、羅の字
をよめり金紗などに似たるもの○頼阿 二條爲世卿の門弟にて古今傳授の一流○
螺鈿の軸 卷物の軸に青貝をすり入たるをいふ細は字彙に金華の飾りとあり○弘融僧
都 權少僧都貞和三年伊賀の國佛生寺に住居す○内裏云々 今もさひのひさしとい
ふ所を殘すとかや○章段のかけたる 天台の止觀にも十段のうち三段かけ毛詩三百篇
のうち六篇亡び周禮の六官も冬官かけたる類多し

〔八〕竹林院、入道左大臣殿、大政大臣にあがり給はんは、何のどゞこは
りかれはせんなれども、アガルベキ人ノアガルハ珍しけなし、一、上にてやみなむとて、出家し
給ひにけり、洞院左大臣殿このを甘心し給ひて、相國の望おはせざ
りけり、

此段もまた前段の余論にして上には器物の上は物のどゞのほりたるはあしきといひて
には官位に及びて満てるに居るべからずといふ其品異なりといへども畢竟物の
極る所をさらひたるものにて即ち名利のためかふりをやめて心をつれづれにせよとの意
なるべし○竹林院入道 西園寺公衡公之花園院延慶二年三月左大臣となり同帝慶長元

年八月出家し給へり○一上 哉原抄云左大臣一人相當正從二位宮中事一向左大臣統
領之故云一、上○洞院左大臣 諸抄左大臣實雄公といふはいふか洞院左大臣
實泰公なるべし其故は實泰公は公衡公と同時代にして實雄公は公衡公没後卅余年前ノ
人なれハ之○甘心し給ひて 口にて物を味ひ甘がるやうに心にて理を味ふをいふ之○
相國 大政大臣の唐名也

亢龍の悔ありとかやいふを侍るなり、月みちではかけ、物さかりにし
てはれとろふ、萬のそ、ささのつまりるは、破にちかき道なり、
○亢龍の悔 亢は高也易、乾、卦、上九、亢龍有悔といへり意は天上へのはり極めたる
龍はくだるべきより外なし故に悔あるこ

〔八五〕法顯三藏の天竺に渡りて、古郷の扇を見てをかなしび、病にふし
ては、漢の食をねがひ給けるをききて、さばかりの人の、むげにころ
心よはき氣色をひとの國にて見ゆ給けれと人のいひしに、弘融僧都
いひて支那の地名と
いうに情有ける三藏かなといひしころ、法師のやうにもあらざ
心にく、れほゆしか、

此段は孔融のやさしき心ばへを感じてかけり法師といへば皆人無情の枯木のやうに
思へど法師は世を救ふ大慈悲心あるものにて情あるものなればさやうにはあらすとの

かや「是はかと切る
いに歎息のやのろは
れると第十二段にい
へるが如し

天竺一和漢三才圖會
に云按天竺者西
域中南國也云々今
ハ印度國是なり
漢の食一野菴云支那
は上唐唐三代より下
元明に至るまで數千
年の間漢といひ唐と
いひて支那の地名と
することは漢は世を
たもつこと四百年に
余り李唐は三百年に
及ぶ故に其全盛の時
をとりて号とするこ

意なるべし○法顯 晋の安帝の隆安三年己亥の歲渡天せし人○三藏 經律論の三ツを修め得たる人をいふ○漢の食 漢とは漢朝をいふにはあらず天竺にてもろこしをいふ之是即ち故郷の食○さばかりの人の云々 法顯は世の大智者恩愛執着ありてまよひの上にて古郷をなつかしく思ふにあらざしてやさしき情の發動する故なり世人は知らずしてろしれり孔融能くわきまへてはめられし故兼好も又孔融のやさしき心ばへを感じてかけり

〔八〕人の心すおはならねば、偽あきにしもあらず、されども、（ソノ中ニ）れのづから正直の人なぞかなからん、（廉直）れのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむはよのつねなり、

此段前段に人情を論ずるを受けて人心のことにいひ及し假令已賢ならずとも賢を見てはひとしからん事を思へ又假令愚ならずとも愚を學ぶべからず偽りても賢を學ぶべしとの意なるべし○人の心云々 人は氣質にひかれ人欲におほはれてろの心多くすなほならねば偽いふ人もあれども人の性は善なるもの故其中には自然と正直の人もなほかなからんと云

至りて愚なる人は、たま／＼賢なる人を見てこれをにくむ、（其類ニ）大なる利をむむがために、小しきの利をうけず、偽かさりて、（ツカ）名をたてむとすところしる、れのれが心にたがへるによりて、此嘲をなすにて知りぬ、此人は下愚の性（ウツル）うつるべからず、偽て（大利ノハサナキ）小利をも辭すべからず、

下愚の性云々 論語陽貨篇三云上智與下愚不移

かりにも愚を云々 此愚の字本によりては賢の字に作りて賢者をろしれる下愚の人は偽て小利をも辭すべからずかりにも賢を學ぶべからずとの對句の文法ととてはへりされど賢を學ぶべからずといひては下愚の性うつるべからずといふに語重れるに似たれば次の詞へかけて愚を學ぶべからずといふ方前後の節の偽りて云々とかなひて聞ゆ

○大なる利を云々 至愚の人の賢人をろしる詞なり其意賢人は大利を得んが爲に賢人だてをして不義の小利をうけず心はさなきも偽りかさりて我名を立てんが爲に無欲の体をよらはふなりとろしる也なり○しりぬ 此句は次の句へかけて見るべし下愚の人はかりにも賢にうつるべからず又たとひ偽りても利をも辭退すべからずとしりぬと云かりにも愚をまかぶべからず、狂人のまねとて大路をはしらは則狂人なり、悪人のまねとて人をころさは悪人なり、驥をまかぶ（馬）の驥のたぐひ、舜をまかぶ（人）は、舜の徒なり、偽ても賢をまなはんを、賢といふべし、

○かりにも愚を云々 たとひ假初にも愚人の真似をなすべからず其故は狂人悪人の如き愚なる所業を真似べは人之をゆるさす途には真となすべければ之學ぶは真似ぶの義也○偽ても賢を云々 此結句一段の眼目之人たとひ賢人の業は及ばずとも賢をうらやむは賢之驥をまなび舜を學ばんて賢なるべければ偽りても賢を學ばんを賢といふべしといひ結べる之偽りてといへる偽の字は上に愚人の偽りかさりてといへる詞に對したる云

〔七〕惟繼中納言は風月の才にとめる人あり、一生精進にて讀經うちして、（花園）寺法師の圓伊僧正と、同宿して侍りけるに、（山門ヨリ）文保に三井寺やかれし

今よりははらうしとて
 一法師を火爰しに
 いひかけたる也法師
 はもと字音にてほふ
 しなるを音便にてふ
 をうとよびうれを爰
 しにいひかけたる也
 火をほといふは火影
 火串など下に体言の
 つらなりたる時はほ
 に轉する格なれどこ
 こに用言の上につら
 なりてしかいへるは
 秀句なればなるべし
 爰しは用言也
 遁世の僧を「このを
 は俗にがにかよふを
 也大和物語に「朝ほ
 らけわが身は庭の霜
 ながら何を種にてこ
 ころおいけん」とい
 へるをの如し
 わやしきぞ」このぞ
 は切るゝすにて玉の

緒に語のどぢめにお
 くぞ也といへり又句
 のどぢめにありて切
 るゝも皆同じ格也

我こそ山だちよ「こ
 のころの係りはよに
 應ずる格にてよもじ
 の上になれど云ふ結
 辭の籠れるなり
 かたは「鳥の片羽よ
 りいでたる詞なれば
 かたわとかきて片輪
 の字をよめるはひが
 事也とぞ

時、坊主よあひて御坊をはてらほうしとて申つれ、寺はなければ
 今よりははらうしとてこそ申さめといされけり、いみじき秀句なりけり、
 此段前段に人心の直不直をいへるをうけて惟繼の秀句暗に寺法師の慢心を戒めたるこ
 とをいへり是惟繼の直を以て寺法師の不直をたしせりとの意なるべし○風月の才 詩
 歌の才○精進 弘訣云無雜故精無間故進云々其事を勉めて他事なきをいへり○寺
 法師 たいに寺といへば三井寺なり○秀句 俳諧の戯言よのつねはいひかけを秀句
 といへり

〔八〕下部、酒のまするを、は心すべきとあり、宇治に住けるをのこ京に
 具覺坊とてなまめきたる遁世の僧をこじうとなりければ、常に申
 つびけり、ある時迎に馬をつかはしたりければ、遙なるほどなり、口つ
 きのをのこに、先一度せさせよとて、酒を出したれば、ささうけささう
 けよとのみぬ、太刀うちはきてかひくしけなれば、たのもしく覺
 らて、めしぐしてゆくほどに木幡のほどにて、奈良法師の兵士あまた
 ぐしてあひたるに、この男立むかひて、日暮にたり、この山中にあやし
 きぞとまり候へといひて、太刀をひきぬきければ、人も皆太刀ぬき、
 矢はぎなごしけるを、具覺坊手をすりて、うつし心なく酔たるものに
 候、まけてゆるし給はらんといひければ、各あさけりて過ぬ、此男具覺
 坊に逢て、御坊は口をしきとしたりたまひつるものかな、おのれ酔たるを
 侍らず、高名仕らむとするを、ぬける太刀むなしくなし給ひつるゝと
 いかりて、ひたぎりに斬れとしつ、さて山たちありとのしりければ
 里人れこりて出あへを、我ころ山たちよといひて、はしりかゝりつゝ
 斬まはりけるを、あまたして、手たせ打ふせて、しをりけり、馬は血
 つきて、宇治大路の家に入りたり、淺ましくて、そのこどもあまた
 はしらかしたれたを、具覺坊はくちなし原に、によびふふたるをもとめ
 いで、かきもてきつ、からき命いきたれど、腰きり損せられて、かたは
 になりにけり、

此段前段に法師の事をいへるをうけて具覺坊の下部に多く酒を飲ませてよからぬ事を
 仕出まし事に及びすべて下部は物事につしみなく心をゆるして酔狂するものなれば
 心して飲ませよとの意なるべし故に下部に云々の起句を此一段の本意とす○なまめさ
 たる 出家なれども人情をも考へ知れるやさしき義なるべし下にむかひの男に酒のま

せたる事なんぞか、ん張本ならんか〇こじうと 箋註倭名鈔云爾雅云妻之昆弟曰甥
音生和名古之字斗とあり常には夫の兄の通稱となして兄公の字をよめり〇一度せさせ
よ 一盃せさせよとの義也土器に三度入五度入なせいふありは一盃つゝ三度五度汲入
る、程大なる土器をいふ也一説に一度は一土にて一土器と云ふ意也といへりこれも捨
つべからずと〇よ、とのみぬ 雅言集覽によれば涎のたるゝさまをいふといへり〇
かひしげなれば 物事にまめやかなる様なれば也〇ひたきり ひたものきりにて
ひたすらにきりたるをいふむしやうにといふが如し〇宇治大路の家に 大路は宇治の
町なり〇くちなし原 木幡の邊にくちなし原多し

〔元九〕或もの小野道風がかける、和漢朗詠集とて持たりけるを、ある人
御相傳（フツハ）うけるこには侍らじなれども、四條大納言撰はれたる物を、道
風か、むと時代やたがひ侍らむ、たほつかなくころ（コ）といひければ、さ
候へばこそ、世に有がたき物には侍りけれとていよく秘藏しけり、

此段は前段に醉狂人のことをいへるにうけて至りて愚なるもの、せん方なき物語をい
へり惣じて至愚なるものは理にうとく我非を知らぬ故過をかざり改めざるものなりと
ぞ〇小野道風 佐理行成と並べ稱して日本の三筆といふ能筆の人也村上帝康保三年十
一月に卒すといへり〇四條大納言 公任卿也康保三年に生る〇時代やたがひ侍らむ
道風死去は公任誕生の年也〇さ候へばこそ云々 愚なる者は我を折るといふことなし
是いはゆる下愚の性うつるべからざるものなり

何阿彌陀佛一貞徳が
説には陀佛の二字を
よまぬが習ひことい
へり
頃しも「玉緒云此し
もは二文字ともによ
すめたる辭なり
小川のはたにて「前
に行願寺といへる首
尾なり草堂昔は一
の北の小川にありし
を大閣秀吉公の時今
の寺町通二條より上
四丁にうつされたり
しとぞ
連歌「八雲御抄に連
歌書は五十韻百韻と
ついでに事はなしと
い上句にても下句に
てもいひかけつれば
いまなからを付ける
なま今の様にくさる
事は中比よりの事
といへり

〔元〇〕奥山に猫またといふ物ありて、人をくらふなると人のいひけるに
山ならねども、これらにも猫のへあがりて、ねこまたになりて、人とする
とはあなる物をといふもの有けるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける
法師の、行願寺の布どりに有けるが聞て、獨ありかん身は、心すべまこ
とにこそ（コ）、思ひける頃しも（コ）、ある所にて夜ふくるまで連歌して、只
一人歸りけるに、小川のはたにて、音にきゝし猫また、あやまたき足も
とへふとよりきて、やがてかきつくまゝに、頸の布をくはんとす、
肝心もうせて、ふせがむとせるに力もなく、足もたゝす、小川へころび
入て、たすけよや猫また（タスケ）よやくとささげべ、家々より松（マツ）どもともし
て、はしりよりて見れば、このわたりに見しれる僧なり、こはいかにと
て川の中よりいたされこしたれば、連歌のかけ物とりて、扇小箱なご
懐に持たりけるも、水にいりぬ、希有にして助かりたるさまにて、はふ
はふ家に入にけり（コレ）、かひける犬のくらげれど、主をしりて、とびつきた
りける（コ）とぞ

此段は前段に至りて愚なる者のことをいへるをうけて至りて愚迷なる者の前にはあらぬ者の現する外より来るに非ず皆我心の所爲なることをいへり平家の武者の水鳥の羽音に驚きし類思ひ合すべし○猫また 猫またのたけたるといふ意にてよべるなるべし古代は猫をねこまといへり又安齋隨筆に數年の老猫形大になり尾二岐になりて妖怪をなす是を猫またといふ尾に岐ある故なるべしといへり○何阿彌陀佛 何とは其名たしかならぬ也貞丈雜記に云阿彌陀佛は剃髮したる人の吾ぼめをして付くる名也同朋又出家などの名に何阿又何阿彌といふは何阿彌陀佛を畧して何阿彌といひ何阿彌を略して何阿といへる也○肝心もうせて 今云肝をつぶすといふ意也又氣も心もといへば彼是相對へたるもにてともに失せたる意也○猫またよやくと 猫またにて句をきりよやくとよむべし助けよやくの略也清少納言の集の歌に「忘るなよなよといひしは吳竹のふしをへだつるかすにぞありける」とある此忘るなよなよと重ねたる詞の体也古点に猫またよやく猫またよやくとよめるは非之○連歌のかげもの うの比は賭物とて何にても土産をくばりしと也○はふくく 俗にはふくくの体といへるに同じく苦しきを忍びてろくくに立かへるさま也○かひける犬の云々 我犬のむかひに出たりしを猫またと見ゆやまうしは平生猫またくとまよひの念ありし故なりすべてまよひは外より來るにあらす皆我心のしわざなりといふことをわかせり

〔五〕大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常に行かよひしに、ある時出て歸り來たるを、法印いづくへ行つるぞととひしかば、やすら殿のがりまかりて候といふ、うのやすら殿のは

男か法師かと又とそれて、袖かきあはせて、「いかゞ候らむ頭をハ見候はずと答へ申き、なぞか頭をかりのみぬさりけむ、」

此段は前段に愚迷の者の我と我身の害をなすを云へるを受けて一心迷亂するもの、已れが私事を人に問ひ詰められ俄にまよひて魚相なる答をせし事をいへり其事はいさゝか異なりと雖前段は前方より用心にすぎこゝは前方に用心なくして行あたりたるものなれば其心の迷ひにより魚相せしは相同じ ○大納言法印 大納言は法印なりし僧の名なるべし平家物語に中納言の律師なぞいふ類也聖道の僧の名に官名をつくる事寛平法皇の御時より始りけるとかや○袖かきあはせて はづかしき体之○なぞかかしらばかりの云々 此一句結句の評論也見ぬことはなきがおもひがけぬによりてふと行あたりたるとの義也

〔六〕赤舌日といふと、陰陽道には沙汰あきてなりむかしの人は是をいまず、此ごろ何者のいひ出ていみはじめけるに、この日有る事、すゑとほらすといひて、うの日いひたりして、したりしあとかなはず、得たりし物ほうしかひつ、くはたてたりしことならずといふ、たろかなり、吉日を撰てあしたるわざの末とほらぬを、かぞへてみんも又ひとしかるべし、うのゆゑは、無常變易のさかひありとみるものも存せず、始

何ごとか云々」この
かはかはの意のかに
てやはと回じくまづ
事のうらをいひ打か
へして表の事を知ら
する辞

あるとも終あし、志いとけき、望いたぐず、人の心不定あり、物みな幻化
なり、何ごとかしづらくも住する「日ヲタノムモノナリ」此理を知らざる「ガ故」なり、吉日に悪を
あすに、必凶なり、悪日に善を行ふに必吉ありといへり、吉凶は人によ
りて、日によらば、

此段は前段に一心迷惑のものの庵相の答をいへるを受けて徒に時日を撰ぶもの、愚迷
心を諭せりうは時日を撰ぶは世上のならひ万事變易の理を知らざるより起るものなれ
ばよく此理を辨へ平素の行爲を慎むべく徒に時日の吉凶にかはるべからずとぞ○赤
舌日 かなこよみにしやくと云日は也通書大全云赤口日忌會客證事買賣又云
主三口舌喧争赤口日の事清明が籠籠にあり其時陰陽家に秘して世上へ出さる故兼好
偶見ざるものか不審也○おろかなり 世上のならひ万事さだまらぬ理を知らずして忌
みさらふ事を専とす尤も恐なりとぞ物ごとのやふれあしくなるを日のしわざのやうに
思ふは皆まよひなるべしとなり○幻化 まほろしの如くわだなる意也幻化の字は佛經
に出たり○必凶なり 必の字肝要也いかなる吉日たりとも行ふこと悪ければ必わろし
又悪日とても行ふこと善ければ必よし

〔九三〕或人弓（イ）いることをならふに、もろやを手挟みて的（ニ）にむかふ、師のい
はく初心の人、ふたつの矢をもつてなかれ、後の矢をたのみて、はじめ
の矢になほさりの心あり、毎度たゞ得失（ホ）なくこの一矢に定むへしと

おもへと云ふ、

此段前段に時日の事をいへるをうけて又此段には弓（イ）いる事にたとへて道を學ぶものは
光陰を惜むべく暫くも心のゆるみあるべからずとの事をいへり○もろ矢 一手とて矢
二すぢを手狭みてもつ也初矢を甲矢といひ二度目にいるを乙矢といふ○得失なくは
じめの矢にあつる事を失ふとも後の矢にあつて得んと思ふ願みなかれといふ意也

なんぞ「あやしみど
がめたる詞にて句中
にれきて下に落着を
いふべき時にいへり

わづかに二の矢、師の前にて、一つをおろかにせんとれもはんや（ハ）懈怠
の心みづからしらすといへども、師これをしる、このいまめ萬事に
わたるべし、道を學する人、夕には朝あらんを思ひ、朝は夕あらん
ををれもひて、重ねてねんぞろよ修せむを期せり、況一刹那のうら
よおいて、懈怠の心有るを知らんや（ニ）なんぞ、只今の一念（オ）よおいてた
ぢちよ（イ）するその甚かたき、

○道を學する人 上に万事にわたるべしとて其中にて學の一道につきて其光陰を惜
むべきことをいへり○一刹那 名義集二云刹那翻爲一念とありたり一念の間を刹
那といふ也是即ち時の極少なるもの也○なんぞ只今の云々 なにとて道を修する事の
甚なしかたきと世人をどがめたる也

〔九四〕牛を賣るものあり、買人あすうのあたひをやりて、牛をとらんとし

なづら一此辭は續用
言又体言より受けて
物の本よりあるを其
儘にしおきて云々と
物するをいふ辭ん

おりたりけるを、相國のちに北面何がしは、勅書を持たながら下馬し侍
りし者なり、かほどの（實ヲ知ラサル）者いかに、か君につかふまつり候べきと申され
ければ、北面をはなれたれにけり、勅書を馬の上ながらさへけて見せ奉
るべし（馬ヨリ）たるべからずとぞ（イフナリ）

此段故實を記して勅使などに立つ人の心ばへを教へたりされば貴人高家の衆には私に
は下馬すべし公の御用の時は下るべからず宜しく其時を知るべしとの意に○常盤井
所の名に其處に住玉ふ故なるべし相國は大政大臣の唐名に○勅書 天子勅詔の御書に
○北面 院の御所に仕ふる武士をいふ即ち北面の侍是に白河院の御時始て置かる上北
面あり下北面あり上北面とは五位下北面とは六位に

〔九〇〕箱の（フタ）くりかたに、緒をつくるを、いつかたにつけ侍るべきとぞ、あ
る有職の人にたづね申侍りしかば、軸につけ表紙につくるを兩説な
れば、いづれも難なし、文の箱はおほくは右につく、手箱には軸につく
るも常のそなりと、仰られま。

此段もまた故實を記して物は一個に心得べからざる事を教へたり○軸につけ表紙につ
くる 軸とは左表紙とは右なり昔の文箱は巻物などのやうに緒一筋を一方につけ左右
のくわんを引通して一方に一結び結びたりと見たり結ぶ方をつくるとはいふに其左

右をわかつは蒔繪したる箱なれば蒔繪のものを我手前にして定むるに○手箱 貞丈雜
記に手箱は古へ常に手廻りの物を何にても入れ置たる箱に此物今は常に用ふる人なく
婚禮の時のかざり物にのみすることいへり

〔九七〕めなもみといふ草あり、くちらみになさへれたる人、かの草をもみて
つけぬれば、すあつちいゆとかん（イロハラ）見知りておくべし、

此段例の兼好の慈仁の心より薬法を記して人に示したるなるべし○めなもみ 或は蒼
耳といひ又地菘ともいへり本草によるに共に毒蛇の傷を治するの効ありされど地菘に
はもみて之をつくとあれば此書にかなふべくやなほよく考ふべし

〔九八〕の物につきて、其ものを費しそこなふ物、かすをしらす有、身に
虱あり、家に鼠有、國に賊あり、小人に財有、君子に仁義あり、僧に法有、
此段は兼好本意の徒然を本としてかけり而して其主とする所は君子に仁義あり僧に法
ありの二句にして君子にして仁義をたのます僧にして法をたのますればすべて心の煩
なく身神安樂なるべしとぞ○君子に仁義あり 君子は仁義の道を行ひてかへつて身を
害する事あり例へば比干が紂王をいさめて胸をさかれたる如きは仁義の君子をこそな
ひ敗れるなり○僧に法あり 僧は不惜身命とて法の爲に身命を惜まず人を度する中に
安樂法師が如き斬られし類ありこれ法の僧をつひやしうこなひたるに

〔九九〕たふときひじりのいひおさけるを書つけて、一言芳談とかや名

づけたる草子を見侍しに、心にあひておぼらじとぞもニ

此段は一言芳談にあることを所々かきぬきて通世閑人の上の事をいへり○一言芳談上下二冊ありたれの撰集とも知れず彼是の辭を一言づゝひるひのせたる書なり

一「しやせましせずやあらましとおもふては、おほやうはせぬはよナシきかり、
大 註

○しやせまし ますべきやなすまじきやと疑ひてなすべしと決定したる詞

一 後世を思はんものは糶汰瓶一も持まじきとあり、持經本尊に至るまで、よきものをもちつゝ、よしなきとあり、

○糶汰瓶 じんだはぬかみうの瓶は盡し○持經 所持の佛經

一 遁世者トモのなきにとかけぬやうをはホからひてホすぐる、最上のや仕うにてあるかり、

○なきにとかけぬやうを云々 何もなければも求むる心なければ事かけぬなりもどむるよりして足らぬ事はあるなり

一 上臈後世ヲ思フ 其位ニホコラズシテは下臈其位ニホコラズシテになり、智者其智ヲステテは愚者其智ヲステテになり、徳人有の貧其徳ヲステテになり能ある

人は無能其能ヲステテにかるべきなり、

○上臈 臈は臈次として事の次第する之然れば上臈下臈は上位下位といはんが如し

一 佛道をねがふといふは別のとをかし、いとまある身になりて、世の心を心にかけぬを、第一の道とす、

この外もありしとゞもおぼらす、

○いとまある身になりて 世事をいさゝかも心にかかず諸縁を放下するをいふこれらまことに愛好の意にもかなひぬべし前に静ならでは道は行しがたしなきいへるも此意なり

二〇〇堀河相國其具は、美男かのたのしき人にて、うのそとなく何ニモ過差何ニモをこの

み給けり、御子基俊卿を大理になして、廳務行はれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めぞたく作りあらためらるべきよし費仰られけるに、この唐びつは、上古より傳りて、うの始をしらす、數百年を経たり、累代の公物、古弊をもちて規模とす、たやすく改られがたきよし故實の諸官等申けれたうのとやみにけり、

此段は堀河相國の過差を好み給へる物語にして前段にしやせましせずやあらましと思

心身はいかゝあらんと知るべきなり

上臈は云々なるべきなり「直解に云かくの如く成得たる上の

一も「このものは歎息のものつよく力あるにて常になりとも又だにともいふべき所のも也

ふことは大やうはせぬはよきなりの意をいへり○堀河相國 岩倉内府具實公の一男
○たのしき人にて 物ごとに心たのしく華美を好まれし人○過差 奢の分に過た
るをいふ○大理 檢非違使別當の唐名○唐櫃 櫃に足あるもの長からびつ荷ひから
びつの別ありと雖皆足六つあり訴狀文書などを入置物なるべし○規模 規矩摸範にて
即ち手本にする意

〔二〇〕久我相國は、殿上にて水を（カコシ）めさけるに、主殿司土器を奉りければ
まがり（カコシ）をまるらせよとて、まがりしてぞ（カコシ）めしける、

此段久我相國のねり給はぬ物語によりて上にいふ上藤は下藤になりの意をいへり○
久我相國 六條の大臣顯房公の御子○土器 せきとよむべし土にて作る節會の時の
蓋なり○まがり 一條兼冬公御説に云まがりとは本名合子といふ出家などの用ふる丸く
塗られたる物の如し殿上人の殿上にて物なごくふ物なり昔は常に殿上にあるよし古書に
載す今はなして、にいふは主殿司相國なればわがめて土器を奉りければ相國はよし相
國にもあれ殿上にあるうへは殿上人の格なるべしとてまがり（カコシ）をめしけること（カコシ）雅言集
宛に合子は今の椀といへり

〔二一〕ある人任大臣の節會の内辨をつとめられけるに、内記のもちた
る宣命をとらすして、堂上（カコシ）せられにけり、きはまりなき失禮なれども、
立かへりとするべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、

衣かづきの女房（カコシ）一か
つぎをしたる女房を
いふ事は第廿一段に
見たり

衣かづきの女房をかたらひて、（カコシ）かの宣命をもたせて忍びやかに（カコシ）奉ら
せけり、いみじかりけり、

此段前段久我相國の有職のふるまひやんごとなかりしを記せるを受けて康綱の公事に
なれたる神妙なるふるまひをかけり○任大臣の節會 大臣に任せらるゝ式之事は江次
第に詳なり○内辨 節會の奉行其日の一の座の第一の大臣承明門内の事を辨脩する故
に内辨といふ○内記 詔勅宣命を書する官之而して節會の當日其宣命を持って仗座に候
する之○宣命 其人を大臣に任じ給ふ勅命をかき付たるもの之是は邦語を以て宣告す
るものにて詔勅の漢文体とはいさゝか異之○六位外記康綱 六位内記と書たる本あれ
ど康綱の系圖には大外記とあり官はうつりかはるものなれば爰の文義にては内記の時
の事にや内記は禁内の事を記す官たり又外記は天下の事を記すを掌り或は公事を奉行
すとあり

追儼（カコシ）第十七段に見
たり
又五郎男（カコシ）和名鈔卷
二六男、丈夫也和名
平乃古

〔二二〕尹大納言光忠入道、追儼の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣（カコシ）
殿に、次第を申請（カコシ）られければ、又五郎男を、師とするより外の才覺候は
じとぞのたまひける、かの又五郎は老たる衛士の、よく公事になれた
る者にてぞありける、（カコシ）近衛殿（カコシ）着陣し給ひける時、ひさつきを忘れて、外
記をめされければ、（カコシ）火たきて候けるが、先（カコシ）ひさつきをめさるべくや候
らんと、このひやかにつとよやきける、いとをかじかりけり、

先ひさつきを「先
字眼目」

此段前段に康綱が公事になれたるを受けて又五郎が才覺のよきをほめてかけり○尹大納言 大納言にて彈正尹を兼ねたる人之○衛士 衛門兵衛の被官火をたく者之○近衛殿云々 以下別事なれど又五郎が公事になれたるを取合せていへり○ひざつさ 小半盃のうすべり之名目抄に膝突の字を書たり

〔二〇四〕大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞくをつくりてとかれける所へ、くすし忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿我朝のものとも見ぬ忠守かなと、なぞくにつせられけるを、唐瓶子とせきてわらひあはれければ、はらたちて退出にけり。

此段は前段に又五郎の老いて知のまさりし事をいへるを受けて忠守の老いて不調法なるをいひて其氣品の賤しきをうしれり○大覺寺殿 後守多院嵯峨の大覺寺に御隠居有し故にかくいふ嵯峨の大覺寺にはあらず九重の内の院の御所と見るべし例へば後白川の御隠居所を法住寺殿といひしに内裏にての御所も法住寺殿といひし類なり○我朝のものとも見ぬ忠守 忠守は丹家康頼十一世の孫之丹家は後漢靈帝八世孫孝日王來朝して丹波の矢部郡に住て醫術をなし、ものゝ子孫なれば我朝のものとも見ぬといへるなるべし○唐瓶子 平氏の忠盛の義之心は我朝の物にあらぬは唐之忠盛は平氏之瓶子平氏聲相通ずる故に即ち唐へいしといふ

〔二〇五〕荒たる宿の人目なきに、女の世間チはる事あるころにて、つれづれ

遣戸「第五十六段に見たり

門よくさしてよ「てよは他を頼むにも常にいへれど、は他に物をいひつくるなればさしてよはさせよ也
雨もずふる「雨もやふらんとおしはかりていふ也玉緒云もずは行末をおしはかりて危ふむ意の辞也

とこもりたるを、ある人とふらひ給はんとて、夕づく夜の覺束なきはどに、忍びて尋ねればしたるに、犬のまじくどがむれば、けす女下種のいぞ、いづくよりキヤセシぞといふに、やがてソノ女ニあないせさせて入給ひぬ、心ほろけなる宿ありさまいかぞ案内過すらんと案内いと心ぐるし、あやさま板敷に、おぼし立給へるを、もてしづめたるけはひの、わかやかなる紅色して、こなたハ入り玉といふ人あれば、たてあけ所せけなる遣戸よりぞ入給ひぬる、内の様は外ノアレタルヤウニいたくすさまじからず、心にく、火はあなたにほのかなれど、物のまらかを見えて、俄にホノカナルいとなつかしう住かしたり、門よくさしてよ雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人下部共はろこく女房にといへば、こよひぞやすまいはぬべかめると打さめ私語くも、忍びたれど、ほそなければほのまきこゆ、さて此はどのとせも、こまやかにまきこ給ふに、夜深き鳥もなきぬ、こしかた行末かけて、まめやかなる御物語に、このたびは鳥もはなやかなる聲にうちしきれば、あけはなるよアサと聞給へど、夜ふかくいそぐべき所のさまにもあ

とぞ「人のうへをいふとさかく詞也」

らねば、アカマ心ニ任セテ少したゆみ給へるに、夜ノ明ケハナレテ物ノひまをろくなれば、忘れがたきとぞいひて立出給ふに、今別見ル体ハ梢も庭も珍しく青みわたたりたる、卯月ばかりの曙、其葉ノ前スケルニ艶にをかしかりしを、おほし出て、カケ桂の木の大なるが、かくる、まで、今も見れくりたまふとぞ、「ハナシ」

此段は艶にやさしき体を記して人は常々の心つかひによりてよくもあしくも後々までうの事の思ひ出でらるゝ意をいへり○夕づく夜 十五夜よりこなたの夕方の月夜○わやしき板敷 荒はて、板敷か何かとわやしむ程のよし也○もてしづめたる云々 物なれてしとやかなる氣色也○こよひぞやすき云々 今宵今此人のとまり給へば心安き寝入りとばせらるゝやうに思はるゝと也○夜深き鳥 一番鳥也 ○卯月 四月の異名也卯の花の咲く時なれば卯の花月といふを略していへる也

物語するさまこころ云々「是一の係結内に又一の係結のあらはるゝものにてこころはけれにて結びかはらんにて結ぶ是を二重にといふはふる辭といふ」

「二〇」北の屋かけにさくら残りたる雪の、いたうこほりたるにさしよせたる車の轆も、霜いたくきらめきて有明の月さやかなれども、水カケナド、くはあらぬに、人はなれなる御堂の廊下まなみく、人にはあらずと見ゆる男、女と下なげしにしりかけて、物語するさまこそ、なれごとにかあらん、「調モ 長押」づきすまじけれ、かぶしかたちなぞいとよしと見わた、ぬもいぬ匂ひの、さとかをりたるころをかしけれ、「彼ノ物語」けはひなぞ、はづれくきこはたるもゆかし、

此段もまた艶にやさしき体を記して終には色欲をはなれよとの戒めなるべし○有明の月 夜は已にあくるに月は猶入らであるをいふ即ち残月也○なげし 長押は上下にあり鴨居の上、又敷居の下に別に横に長くわたす材也、は下のなげし也○かぶし 石川雅望云かぶしは傾き伏したるをいふ古事記(上の卅二)に夜麻登のひととすとす、き宇那加夫斯とありてうなだれたぶくにいへりとぞさればこのかぶしは女の打かたぶけるをいへる也

やらむ「このやらむは今俗に何やら彼やらといふやうにて上にいふものとはいふか異なり」

「二〇七」高野の證空上人京へのほりけるに、細道にて馬に乗たる女の行合たりけるが、口ひきける男あしくひきて、ひじりの馬を堀へおとしてけり、聖いとほらあしくとがめて、こは希有の狼藉かな、四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおどり、びくによい優婆塞はおどり、うはうくより優婆夷のれとれり、かくのこどくのうはいなごの身よて、比丘を堀へ蹴入さする、「未曾有の悪行なりといはれければ、くち引の男いかに仰らるゝやらむ、さう聞きらねといふに、上人なほいさままきて、何といふぞ、非修非學の男と、あらゝかはいひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引かへしてにけられにけり、たふどか」

出家ノ本意アラハレテ
りけるいさかひなるべし、

此段前段に男女の物語をいへるに受けて證空の女に心を動かさる特勝なるさまをか
けり沙門はかくころありたけれの意なるべし○ひじり 聖をよめり獨知りの義也とい
へり○狼藉 狼の物をふみちらしたる如くみだれがはしき義也○四部の弟子はよな
比丘比丘尼優婆塞優婆夷これと四部の弟子といふよなは人にいひ示す詞也○比丘 二
百五十戒を持つ僧をいふ○比丘尼 女の出家して五百戒を持つをいふ也比丘尼は戒品
威儀みな比丘にしたがひて得る也事々比丘の心にろむくを破戒とす此故におどれり也
也○優婆塞 在家の男の五戒を持てるもの也○優婆夷 在家の女の男に嫁しながら五
戒を持を優婆夷といふ○いかに仰らるゝやらん 何と仰らるゝ事やらと疑ひなじりた
るなり○非修非學の男 道をも修せず學問をもせぬ男といふこと也

どかや「下へい
いけたる辞にて俗に
やらんといふ意也
やらむ」是は俗に云
意のやらむにてい
しげなる辭也されば
ろの事をうたがふか
の意なる故結ひもか
の格にしたがへり俗
にやうにどかなとい
ふ意也

(二〇八)女の物いひかけたるかへりごと、取あへず、よきはどにする男は、
有がたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房をもわかき男達の
まゐらるゝ毎、はとゞぎすや聞給へるといひて、こゝろみられける
に、なにがしの大納言とかや、はかすならぬ身は、聞さふらはすと答
られけり、堀河内大臣殿は、岩倉にて、聞て候ひしやらむと仰られた
りけるを、これは難なり、かすならぬ身むつかしきと、さためあはれ
けり、

此段は前段に證空の女に愛着せざる事をいへるを受けて女は男をたぶらかすものなれ
ば男は油断なくつゝしむべしとの誠りなるべし○しれたる女房 しれたるは痴れたる
にて俗にたわけたるといふが如し其行爲のよからぬを賤めたる詞也或はこゝはされた
るなるべしともいへり○なにがしの大納言 答へあしかりける故姓名を隠るなるべし

すべてをのこせば、女よわらはれぬやうよれふしたつべしとぞ浄土
寺前師教關白殿女ニ御申アルを、さなくて、安喜門院有子のよくをへまらさせさせ給け
る故に、御詞などのよきぞと、人の仰られけるとかや山階左大臣殿實雄
あやしの下女の見奉るも、いとほづかしく、心づかひせらるゝところ
仰られけれ、女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかよもあれ引つくる
ふ人も侍らじ、

○浄土寺前關白 九條師教公也浄土寺と號す○安喜門院 後堀川院の女御有子○山
階左大臣 洞院左大臣實雄公也八十四段に見ゆたり

かく人よ恥らるゝ女、いかばかりいみじき者ぞと思ふよ、女の性は皆
ひがめり、人我の相ふかく、貪欲甚しく、物の理をしらす、迷タの方に心
もはやくうつり、詞もたくみに、くるしからぬををもとふ時は、いはず、

用意あるかと思れば、又淺まじきことまで、どいず語りにいひ出す、ふかくたばかりかされる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、その跡よりあらはるゝをしらず、すなほならずして、拙きものは女なり、その心（グチナル女）は随ひて、よく思はれんとは、心うかるべし、

○女の性は皆ひがめり 此句此段の惣標なり○人我の相ふかく 我の人のとあるへだてをいふ也ふかくとあるは誰にも人我の相はある事なれどふかく女にのみあるよしなり

さればなまかは女のはづかしからむ、もし賢女あらば、夫も物うとくすさまじかりなむ、只まよひをあるじとして、かれ（女）にいたがふ時、やさしくもれもしくも覺めべきことなり、

○うれも物うとく云々 うれもとは其賢女さへといふが如し賢女はるの性すなはなれば好色のたはれたる方にはかへりて其樂みあるべからず也畢竟は賢女もいらぬ物よといふ意なるべし○只まよひを主として 以下通章の要点にして只此まよひを一身の主として女にたはれたる時はおもしろく思ふべけれ能く心ひらけては何のおもしろみもなしと好色者の毒を言外に戒しめたるなり

（二〇九）寸陰をしむ人なし、是（其チソマモ理チ）よくお（ユエ）れるが、おろかなるが、

只まよひをあるじとして云々一要紳に云世中の傾城くるひする人は皆かゝるたぐひなるべし人々の身の上にあるべき事をわりのまゝに書わらはしてつゝしむべきは此まよひなる事を能教へ道を學ぶべきことを示したりゆりかせに見すべしがたき段之是此段の要之

止言を受くるやと同じく續体言より受けて切れ止る格之下のおろかなるものも同じ而して此二つのるは此段の字眼之

刹那（第九十三段に見たり下に只今の一念といふ是即ち刹那）

何事をか云々一是は何事をかたのみいなまんの意にて其意一つなれば二つのかを一つ（一つの辭にて結べるなり）

此段は世間一切の雜事につきて空しく光陰を送り人間一生の大事を忘るゝ事なかれとの教へなり○しれるか 其寸陰ををしまぬは其生を食るまじき理を知れる故かと也○おろかなるか 愚にして生われれば死ある道理を忘れ茫然としてくらす故かと也

愚にしてをこたる人の爲に（其トヘチ）一錢かろしといへども、是をかさぬれば、まづしき人を富る人となす、されば商人の、一錢ををしむ心切なり、刹那覺ゆすといへども、是をはこびてやまされば、命を終る期忽

にいたる、されば道人は、とほく日月を惜べからず、只今の一念空しく過る（手モトノ近キ）ををしむべし、もし人來りて、我命あすはかならず失はるべしと、告しらせたらむに、けふのくるゝあひた、何事をかたのみ、なにごと

をかいとなまん（必未來ノコトヲ務ムベシ）我等がいけるけふの日、なんぞ其時節（縁ホケマリケル）にてならむ、

○愚にしてをこたる人の爲に云々 世人多くは寸陰のをしむべきを知らず是愚なり故に前節によくしれるの愚なるものと二様にどがめながら直に愚にしてをこたる人の爲にといふなり○道人 佛道に志す人○只今の一念空しく云々 商人の一錢を惜む如くすこしの間の一念のをこたりを惜むべしと云

一日のうち、飲食便利睡眠言語行歩、やむとを得ずして、れはくの時を失ふ、其あまりの暇、いくはくならぬうちに、無益の事をなしむやく

時をうつすのみならず、
云々「時をあらはし、
生をいふ文法に心を
つくべし」上に愚に
尤愚なり「上」に愚に
してをこたる人の爲
にといへる首尾なり

の事をいひ、無益の事を思惟して、時をうつすのみならず、日を消し月を渡りて、一生をれくる、最も愚なり、

○飲食便利睡眠言語行歩 此五事は人身の上になくてかなはぬものなればやむ事を得ずしてといふ之便利は大小用なり

謝靈運は、注華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀せしかば、
惠遠白蓮の交をゆるさざりし也、

○法華の筆受 梵語を唐土にて通事するを翻譯といひ、これを唐字にかき寫すを筆受といふ但法華には靈運が筆受なし涅槃には筆受の事三休詩の注に見ゆれば或は兼好の覺の違へなるべきかともいへり○風雲の思 常に名山名水に遊遊して風雲の風景を樂み寐ても覺ても其とを心にといめしと也是は靈運はもと晋の臣なりしが宋の代となりしを無念に思ひ宋を亡して二たび晋の天下となさんとの下心より故らに遊放自若の体をなししものなるべし一説に風雲の思ひとは臣下として君を思ふ義なり周易に雲は龍に従ひ風は虎に従ふとありて龍虎は君の象風雲は臣の象とすするなりされば靈運が二たび晋の天下となさんとたくむを風雲の思ひといふなりと其結局は前説と異なる事なし○惠遠白蓮の交を云々 惠遠は廬山の惠遠法師也白蓮は白蓮社とて惠遠が院の號也靈運が心外に馳せて眞實の道を修するを怠る故に惠遠白蓮社の交をゆるさざりし也
るをらくもこれなき時は、死人におなじ、光陰何の爲よかをしむとな

らは、内に思慮なく、外に世事なくして、やまむ人の止、脩せん人の脩せよとなり、

○やまむ人は止云々 止とは無爲寂滅にして一向に諸縁を放下するをいふ即ち心の觀法也修とは其閑なる心よりして佛道を修するをいふ即ち身の行法也此心身の二法は何れにても怠らぬやう光陰を惜めとすめたる意也

〔二〇〕高名の木のほりといひしをのこ、人を掟て、たかき木にのほせて、梢をさらせしよ、いとあやうくみわいほさぬいふてもなくて、れる、時軒たけはかりとなりて、あやまちすな心してありよと言葉をかけ侍をかはかりとなりては、とびれる、ともおりなん、いかにかくいふぞと申侍りしかば、うのそに候めくるめき枝あやうきはさぬ、おのれがれそれ侍れば申さずあやまちのやすき所になりて必仕る、よ候といふ、あやしき下藤なれども聖人のいましめよかなへり、鞆をかたき所を蹴出して、後やすくおもへば、かならず落と侍るやらむ

鞆「まりの始は用明
天皇の御時唐土より
渡れり」と云
やらむ「第百八段に
見ゆたり

此段萬事心をゆるして油断すべからず近き所とて油断すれば必ずあやまちある事をいへり○人を捉て 弟子に法度を教へて也○聖人のいましめ 易繫辭云君子安而不忘危云々○糊 革をもてふくろの如く丸くぬひたるものなり

雙六「梁武帝天監年中に日本へわたせり万葉十六の歌に「ひらふたの目のみにあらすいづゝむつみつよつさへありすくろくのさね」とある是れなり是はたいさねの數の一より六までの名をよめるのみなりと略解に見ゆたり

圍碁「博物志云堯造圍碁以教子丹朱或云舜以碁商均愚故作圍碁以教之其法非愚智不能也

「二」雙六の上手といひし人よ、そのてたてをどひ侍しかば、かたむとらうつべからず（二）ニカヘリミテまけじどうつべきなり、いづれの手かどく負ぬべきと案じて、うの手をつかはすして、一めなりともおろくまくべき手よつくべーといふ（三）コト道をいれる教（四）ニテ身ををさめ國をたもたん道もまこーかなり、

此段も前段と同じく油断をいましめたり其謂ふ所専ら双六の勝負にありと雖一切の事皆敬の一字に外ならざる事を知らせたるなり○國をたもたん道も 是皆我手前を大事にする事を要とするなれば國家を治むるも亂れぬやうにとすれば治りをさめんとすればみだれやすしとの義なり

「三」圍碁雙六このみてあかーくらす人、四重五逆よもまされる悪事とぞおもふと、或ひじりの申して、耳よどゞまりていみじく覺ゆ侍る（五）ナリ

此段前段に双六の打方をいへるをうけてこは只其手だての理にかなへるのみ是らの業

を好みて日夜を明しくらすは其どが輕からざれば常に慎みて人間一生の大事を忘るべからずとの意なるべし○四重 殺生、偷盜、邪淫、妄語此四つ也○五逆 殺父殺母殺阿羅漢破三和合僧出佛身血此五つ也○まされる悪事 四重五逆の大罪なるは皆人之を知りて犯すものなしたまへ之を犯すも一たびくひて佛道に赴けば其惡業忽ち變して善となる其双六を好める者は一切の用事をかき刺へ佛事を怠り遂に之を改むるの期なしこれ惡事のまされる所なるべし

「二」明日は遠國へおもむくべしときかかん人よ、心閑よなすべからむ業をば人いひかけてんや（一）ヒカケテ俄の大事をもちとなみ、せちよなげくとある人は、他のことを聞入ず、人の愁喜をもとはせず、とはすとてなごや（二）ナゴヤと恨むる人もなし、されば年もやうくくけ、病もまつはれ、いはんや世をもののがれらん人、又是（三）ナゴヤよおなじかるべし、

此段前段に佛道に志あるもの、其双六などに日を暮すは僻事なりといへるをうけて一大事の根本は佛道にあれば此道に志すものは諸縁を放下し世俗の毀譽を心にかけず早く遣世發心すべしとなり○明日は遠國へ云々 遣世發心のまことあるものは親子兄弟にても又は親しき朋友にてもなごやむまじきたとへ也○俄の大事をも云々 是又遣世發心のまことあるものは世間一切の雜事を放下すべきたとへ也○いはんや いふにも及ばす

いはんや「是は今いふ所の物と前の事とを相にする詞なり又是におなじかるべし」たとへど法と引合せてのべたる詞なり

人間の儀式、いづれのとかさりがたからぬ、世俗の「もた」がたき「隨て、これを必」とせば、ねがひも多く、身もくるしく、心のいとまもなく、一生の「雜事（世間）の小節（節）」はさへられて、むなしくくれなん、

○人間の儀式云々 人間の儀式とはかなたてなたのつけといけ商賈農業の仕業食事衣類の品々に至るまでをいふかゝる事をも心を付てとしてはならじかくしてはかなはとなど、世の人並に心を持っては一つとしてさうつべきものなしとこ

日暮途とはし、吾生既「蹉跎」たり、諸縁を放下すべき時なり、（道性セン人、信をも守らじ、禮儀をも思さじ、此心をも得ざらん人は、もの狂ともいへ、うつゝなし情なしとも）「たもへ、うゑるともくるしまじ、響むとも聞入じ、

○日暮途とはし 日暮は老たるにたとへ途とはきは修行の至らぬにたとへたり○蹉跎時を失ふ也とありて行きつまりたるをいふ○うしるとも云々 ぼむる人ろしる人とも此世にといさらず只此生死の急場のみ筆をさし置くにいとまなしとなり道心あらばの段を照し見るべし

「三四」四十にもあまりぬる人の色めきたるかた、おのづから忍てあらん「いかゞはせん、とにうちいせ」男女のそ人のうへをもいひたは

る「こう、にけなく見ぐるしけれ、

此段は前段に人の遁世發心すべき道理をいへるをうけて四十以後の人は色欲をすて、後世のみとねがふべし世にみぐるしきこと聞くるしきことかすく「あれど其甚しきものをおぐれば云々と第二節にあげたるなり○人のうへをも もの字味ふべし人のうへさへあしき事なれば我身の上の事は勿論也

大かた聞よく、見ぐるしきと「老人の若き人に交りて、興あらんと物いひるたる」數ならぬ身にて、世のおほいある人を、へたてなきさまにいひたる「まづしき所に酒宴このみ、客人に響應せんときらめきる」

○發露 あるじまうけとてふるまひの事○きらめきたる 盛にもてなしたるなり

「三五」今出河のおほい殿、嗟峨へればしけるに、有栖川のわりのりに、水の流れたる所まで、さい王丸御車を追ひたりければ、あがきの水、前板までさゝどかゝりけるを、爲則御車のしりに候けるが、希有の童かな、かゝる所にて、御牛をはおふものかといひたりければ、おほい殿御けしきあしくなりて、おのれ車やらんと、さい王丸まさりてなしらじ、

かゝる所にて御牛を
ばおふものかは一
解に云一説に云水中
にて車をおふもの
追はされば車轍沙に
入り輪めぐらぬもの
之是車を追ふ故實
とが

太秦一うちつまざと
よめるは倭訓栞に雄
略天皇の時に秦酒
公絹綿を多く積み奉
りしより姓をうづま
ざと給ひけるは埋み
まざるの義なるよし
見ゆたり

希有の男なりとて、御車に（爲則）頭を打あてられにけり、この高名のさい王丸（信清）、太秦殿の男料の御牛飼をかじ、此太秦殿に（ツカハ）侍りける、女房の名（信清）も、一人のひささち、ひとりはこのことつち、一人のはふをら、ひとりのをどうしとつけられけり、

此段は前段に己が身に似合はぬ事を好むを戒めたるをうけて爲則が己が知らぬ事をさし出て主君の氣にさかひたる事を記し世人にかゝる行爲あるまじき事の教戒とせしなるべし○今出河のおほいさの抄に今出河とは所也其所に居給ふ故なるべしといへり此公は菊亭兼季公也○有栖川 太秦より法輪へまゐる道にある小河也といへり○太秦殿の男云々 太秦殿は坊門内大臣信清公也さい王丸は此公に召仕はるゝ男にて即ち公の召料の牛飼也○女房の名も 是は太秦殿の牛をすき給ひて女中の名まで牛に事よせて付給ふよしといへり名義未詳一説に膝幸、種悖、胞腹、乙牛の義なるべしといへり

〔二六〕宿河原といふ所にて、ほろ／＼多くあつまりて、九品の念佛を申けるに、外より入来るほろ／＼の、もし此御中よ、いろをし房と申はるやれはしまそと尋ければ、うの中より、いろをし／＼にゆ、かくのさまふは／＼と答れば、しら梵字と申者あり、たのれが師、かにかと申

申さばや「ばやは未
然言より受くるばに
公所きの知のるへる
にてたれものぢやと
自願ふ辭
あなこしこ」第卅一
段に見ゆたり

人、東國よていろをいと申はるよころされけりと承りしかた、うの人にあひ奉りて、うらみ申さはやと思ひて尋申かりといふ、いろをしゆ／＼くもさづねたたりたり、さるて侍りき、こゝよて對面奉らは、道場をけがし侍るべし、前の河原へ参りあはん、あかかしてわきさしち、いつかをも見つき給ふか、あまたの煩よならば、佛事の妨に侍るべーといひ定て、二人河原へ出あひて、心ゆくばかりよ、つらぬきあひてともよ死よ、けり、ほろ／＼といふ者むかしはなかりけるよ（近）世よ、ほろん（梵）梵字漢字を云ける者、うのはじめなりけるとかや、世をそてたるに似て我執ふかく、佛道をねがふに似て鬪諍をそとせ、放逸無慙のありさまかれども、死を軽くあて、少もなづまざるかたのいさぎよく覺えて、人のかたりしまゝにかきつけ侍るなり、

此段は前段に女房の名のめづらしきをいへるをうけてほろん梵字漢字なせのめづらしき名に及びさて其ほろの師の敵を忘れず尋ね参り互に義を重じ命を軽くして少もなづまざる事兼好遷世の心によく適ひて勇ましければとてかくは記せるものならし○宿河原 攝津國島下郡宿久莊にあり○ほろ／＼ 又ほろともいひて梵論又異露とかけり

のうへまで御な
かたはさすむらせ
候とあれば貞丈雜記
の説正しかるべし

○御湯殿のうへ 是は御厨子所(盛所の事)の近くにある座敷にして香湯を初め諸事に用ふべき湯を沸しおく所上の字を付ていふは湯の給ふ湯殿の上の間といふ意なるの御厨子所につゞきてある故にには食物などを置くなりと貞丈雜記に見えたり

中宮の御方の、御湯殿の上のくろみ棚は、雁の見ゆつるを、北山入道殿實氏の御覽みてかへらせ給ひて、やがて御文にて、かやうの物、さながら其姿にて、御棚より候ひし事、見ならはすさまあやしき事なり、御近習二はかしくしき人のさふらはぬゆゑよころうなど申されりけり。

○中宮の御方 後深草院の中宮皇子也○北山入道殿 中宮の父西園寺實氏公也常盤井相國と号す○くろみ棚 黒く色付たる膳棚なるべし○さながら 庖丁もせずのまなり

かやうの物も「この
もはまてもの意にて
はへといふに同じ

〔二〇〕鎌倉の海よかつをといふ魚は、外ニハサマニナケレドモかのさかひにはさうなき物にて、この比もてなまものなり、うれも鎌倉の年よりの申侍しは、此魚のれら若かりし世までは、はかしくしき人の前へモテ出ると侍らざりき、頭は下部もくはずまりてきて侍りしものなりと申き、かやうの物も世の、するよなれた、上さままでも入たつわさよころう侍れ、

此段前段に雁を上の方に見習はずさまわしき事といへるをうけて雁の如きいやしき魚さへ世の末になれば上さままで入たつ事をいへりと雖其實に事よせて末世の道なきを悲みいさとはれるなるべし○鎌倉 相模の國にあり○かやうの物も云々 是兼好年寄の物語を受けて其意のべしものにてかやうのいやしき魚さへ世の末になれば上さままで入たつまして聖賢はずてられ愚不肖は用ひらるゝをやと慨歎せしなるべし入たつ業といへるにて全くかつをの事にあらざるを知るべし此句此段の要領とす

〔二三〕唐の物は、薬の外はかくとも事かくまじ、書どもは、この國に多くひろまりぬれた、カキヨウツシテかきもうつしてん、もうこし船のゝやすからぬ道よ、無用の物どものみどりつみて所せくわしめてくる、いとれろかなり遠き物を寶とせずとも、又得がたき貨をたふとますとも、モノトイフニ文も侍るとかや、

此段前段に末の世には上の方に用ひらるゝ物も多くなるをいへるをうけて唐の物も無用の物を多く用ひん事の愚なるをいへり奢をおさふるの意なるべし○かきもうつしてん うつしてんはうつさんと同意ながらうつさううつしておかうなど、つよくさく意也○所せく 所せばく多くわたすといふ○遠き物を云々 尙書旅熬、篇云不遠、實遠物、則遠人格、○得がたき貨 老子經云不貴難得之寶、使民不為盜

かきもうつしてん
かきうつしてんにて
もには意なし

「サレ此世ニ」かくてかなはぬものなれをいかにせん」其外ニ夜ヲ犬はまもりふせぐつとめ人にもまさりたれば、必あるべし、されど家ごとよある物なれば、爾家ノ大ナキ守リ「トさらよもせめかはきともありなん、」

此段は前段に唐船の無用の物を多く用ひん事を戒めたるを受けて無用の鳥獸を養ひかふ事の不可なるをいへり怨の道を行ふべしとの意なるべし

鎖をさされは被差にて他より然せる、詞なり入られも同じ

の外の鳥獸すべて用なきものなり、走る獸は檻にこめ鎖をさされ、飛鳥を翅をきり籠に入られて、雲をこひ野山をたれもふ愁止時なし、其おもひ我身よあたりて忍びがたくは、心あらん人これをたのしまんや、生を苦めて目をよろこばしむるは契紂が心なり、

○雲をこひ云々 雲をこひは鳥の上をいひ野山を思ふは獸の上へかゝるべし

王子猷が鳥を愛せし林はたのしむを見て逍遙の友としき、捕へ苦めたるよあらざ、凡めづらしき禽、あやしき獸國よやしなはずとて、文よも侍るなれ、

○王子猷 王徽之字は子猷、義之が子也、晋に仕へて黃門侍郎となる常に竹を愛し其竹間の烟に鳥の自から遊棲するを見て之を愛せしといふ○逍遙の友 遊びたのしむの友と

せし也逍遙は莊子の註に優遊自在貌とあり○めづらしき禽云々 此句は尙書旅獒篇に見ゆたり

詩歌にたくみに云々
一、直解に云、絲竹詩歌の禮樂を以て治世の益とも要ともすべし、道なるにくだりゆか世の有様實になげかはしき事

「三三人の才能は、文ノ道理ニあきらかたにして、聖の教を知れるを第一とす、次よは手かくて、むねとするとはなくともこれを習ふべし、學問よたよりあらむためなり、次に醫術をからふべし、身ヲを養ひ、人ヲをたすけ、忠孝のつとめも、醫にあらずは有べからざ、次よ弓射馬よ乗て六藝に出せり、必是をうかゞふべし、文武醫の道まことにかけては有べからざ、これを學はんをば、いたづらなる人といふべからず、次よ食は人の天なり、よく味を調へしれる人、大なる徳とすべし、次に細工ヲ萬ノに要れば、此外の事とも多能は君子の耻る處なり、詩歌よたくみよ絲竹に妙なるは、幽玄の道ニシテ古ハノ君臣これをれもくすといへども、今の世には、是をもちて世を治ると漸れろかあるよ似たり、金は勝れたれども、鉄の益ればきにかさざるがごとし、

此段は前段に無益の鳥獸をかふべからずとの事をいへる次手に人たるものさしあたりて必學ぶべき才智藝能の外にはさして用なき藝能を習ふべからず少しにても益ある事

をつとむべしとの意なるべし○忠孝のつとめも云々 君に忠をつくし親に孝をせんとするにも醫術の心なくしてはあはるべからず也小學内篇君有疾飲藥臣先嘗之親有疾飲藥子先嘗之といへり○六藝に出せり 六藝は禮樂射御書數にして即ち人事なるを今こゝに出せりといふは其事を記せる周禮といふ書に出せりといふ義にやはた六經を六藝ともいへるを古への學者多く誤りて禮樂射御書數の六藝と一つに思へれば兼好も亦誤れるにや○食は人の天なり 天は人の資生する所又食は人の命をつなぐ處なれば食は天なりといへり然らば五味をよく調和する時は食の爲に病める事なし○万に要おほし 諸の器を作るに細工の要用多しとなり○多能は君子の云々 才能のみをつとめて身の行を専とせぬをよからぬ事とするなり○幽玄の道 詩歌管絃の道の趣き幽かに深くして尋常の及びがたくすぐれたるをいふ○金は 詩歌管絃にたとふ○鐵の文武醫の道細工などの指當りて用を達するにたとふ鐵にてつくる器多し

〔三四〕無益の工をなして、時をうつすをおろかある人ども、僻事する人どもいふべし、國のため君のため、止むをわすして、なすべきことたほし、うのあまりのいとま、いくばくからずたもふべし、

此段は前段に人たる者の専ら務むべき才智藝能の事をいへるをうけて只藝能のみならず日用の上に於て尤大事なるは衣食居醫の四つにすぎざるを論じ其外をもとめ願はず安らかに過さまほしき事なるをいへり○うのあまりのいとま云々 是此段の要領なるのあまりのいとまに眞の道を修むべしといくばくならず思ふべしとは寸陰を惜むてゝろなり

國の爲君のため云々
「鐵」に云ていにいふ止ことをわすしては世法にしたがへる人のためしにしては我ためしに衣食住の得ざるより衣食住の三つを奪出せり兩所の不得止をば玩味すべし

人の身はやむをわすしていとまむ所、第一は食物、第二はきる物、第三は居る所あり、人間の大事この三はすぎず、飢す寒からず風雨よれかされずして、閑は過すを樂とす、たゞし人皆病あり、病よれかされぬれば、うの愁忍びがさし、醫療を忘るべからず、藥をくはへて、(食衣居醫)四のものを求得ざるをまづしとす、此四のけざるをとめりとす、この四の外をもとめいとまむを驕とす、四のを儉約ならば、誰の人(モノ)のたらずとせん、
○醫療を忘るべからず 醫の道を知て病を療治すべしとこ○四のこと儉約ならば 儉約はつゝまやかなる義のつゝまやかとは物事に少くしてしかもよく用を辨するをいふ此四の物共用に達するはともめねたる人をは誰人か事足らずとせんといふ
〔三五〕是法法師は、淨土(一ノ學問)宗(ノ學問)はぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世をすさありさま(タレモ)いとあらまほじ、

此段は前段にいふ四つの事たりて靜に過す證人を出せるは法師の專にすべき學匠をさへ立てざる事をいひてうの外を願はざる事をあらはせり例のつれづれの本意なるべし
○淨土宗 本朝法然流の正宗也○學匠をたてず 學問を以て人の佛道になりたてをせぬ也○やすらかに世を過す 安心決定の至極也

〔三六〕人に(シニ)わかれて四十九日の佛事に、或聖を請じ侍しに、説法いみじ

あへりし一あひてありしの約略なり
似候なん一似候はんにてなには意なし

もたぐる一持ちあぐるの約言

くして、みか人涙を流しけり、導師歸て後聽聞の人ども、いつよりもてにけふは、たふとくれはゆ侍りつると感じあへりし返事に、或もの、云、なにとも候へ、あれほど唐の狗に似候なんうへはと、いひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり、さる導師のほめやうやはあるべき、又人に酒すゝむるとて、たのれまづたべて、人にしひ奉らむとするは、劔にて人をきらんとするに似たるをなり、一方にはつきたる物なれば、もたぐる時まづ我くびをさるゆゑに、人をほききらぬなり、己先酔てふしなば、人はよもめさじと申き、劔にて斬試たりけるにや、いとをかしかりき、

此段は前段に是法々師が事をいへるをうけて學匠をたて、世に交る僧のよしなき批判を受けしことをかき顯はせり是法々師の如くならばかく犬なきにたとへらるゝ事はあるまじとの意なるべし○導師 法事の上首となりて人を導く人也○唐の狗に似候なむうへは 唐の狗は骨だかなるもの此僧やせつかれたるものと見たりかく其形の唐の狗に似候はん上ばなにもたふとくれはと○又人に云々 からの狗といふやうなるわけもなきことが又あると也是より別段にたて、發語に又の一字あるを斷續の妙所といふ説あり

〔三五〕はくちの負きはまりて、殘かく打いれんとせん、あひてはうつべからず、立かへりつゞけて勝べき時の至れるとしるべし、うの時を
しるを、よきはくちといふかりと、ある者申き、

此段ははくちの指南にはあらずかゝるあさましき事まで天地の理はのがれぬ意をいひ明せり陰極りて陽生するの理なるべし○はくち 博打にて即ち博奕を打つをいふ打つとは其事を行ふ也○あひては 相手と逢ひてにはあらず今これを上につゞけて逢ひてはと讀むときは句讀の長短にかなひがたし是たゞ勝負の相手と見るべきなり

〔三六〕あらゝめて益なきとは、あらためぬをよしとするなり、

此段世のならひ久しくて改むるもさして益なき事はあらたむべからずとの意なれど益ある事ならばとの意を言外にいひ明せり益の字一段の眼目とす

〔三九〕雅房大納言は、才かしく、よき人にて、大將にもなさはやと、しける比、院の近習なる人、唯今あさましきことを見侍りつと申されければ、何事ぞと問はせ給けるに、雅房公鷹にかはんとて、いきたる犬のあしをきり侍つるを、中垣の穴より見侍りつと申されけるに、ましくにく、おほしめして、日比の御氣色もたがひ、昇進もし給はざ

才かしく「才の字
さむとよむべし音
轉じて詞とする例

りけり、

此段は雅房の事をいひ出て君主の慈悲をほめ一切の有情を見て慈悲の心ならんは人倫にあらずとの事を論じ極めて仁心を發すべきことをいひ諭せり○大將にも云々近衛の大將なり大納言にて大將を兼官するを手柄とす○院の後宇多院なるべし其比院の御所三所あり後宇多後深草龜山院也雅房大納言の時分は後深草龜山の二院は法皇也○いきたる犬の足を云々生ながら犬の肉をろくは少し飼て餘肉を損せさせじと也○うとましく、さらわしく、

さばかりの人、鷹をもされたりけるは思はずなれど、犬の足は跡なき事なり、虚言は不便かれども、かゝることをさかされたまひて、よくませ給ひける、君の御心と、いとたふとき事なり、

○思はずなれど、雅房ほどの秀才善行の名を得たる人が遊山田獵の爲に鷹を養ひおけるは思ひかけぬ事なれど也○いとたふとき事なり、其殺生をいとひましたる仁心の有がたきを兼好感し奉る也齊の宣王の牛をたすけ宋の哲宗の蟻に水をかけ給はぬもいとしく此心也

大かたいける物をころし（或ハ）いため（或ハ）戦（或ハ）はしめてるまび樂まむ人は、畜生（今ハ）「殘害（ノ）の類なり、萬の鳥獸（ノ）ちひさきむしまでも、心をとめて有さまをみるよ、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともしなひ、ねたみいかり、

欲ればく、身を愛し、命をしめると、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりて甚し、かれにくるしみをあたへ、命をうははんといかでかいたましからざらん、すべて一切の有情を見て、慈悲の心ならん人倫にあらず、

○慈悲の心 法界次第云能與他樂之之心名之爲慈能拔他苦之之心名之爲悲

「三〇顔回は志人に勞をなごこさじと也すべて人を苦しめ、物をしへたぐるこ、賤き民の心さしをもうはふべからず、

此段は前段に一切の有情を見て慈悲の心ならんは人倫にあらずといへるを受けて其有情の最上たる人間にむかひて其心をいましめ其身をうこなふは不仁の甚きものなるをいへり○こころさしをもうはふべからず 志をうばふとは彼がせんとする事をうばひてすまじきと思ふ事をせめてさするをいふこころの心はいやしき民をもさやうにしへたげてあなぞり苦しめまじき事と也論語子罕篇匹夫不可奪志也とあるを活してかけり

又いとまきなき子をすかしれどし、いひはづかしめて興きる事あり、おとかしき人は、（其オシシ駐カシムル辭何）事にもあらず思へど、をささき心には、

人倫にあらず前に畜生殘害の類なりといふ照應なり

と也」この辭語末にあるとさは其下に見る聞く云ふ思ふなどの意味をうへてさく格なり

いとまきなき又いとけなきともいへり

身よしみてたろうしく、耻かしく淺ましきためひ、誠一切なるべし是
をかやまして興すること、慈悲の心にあらず、

○又いとしきなき子をすかし、すかしつたふらかす。○淺ましき、物事のおもひの外に
て驚きぬべくあるをいふ。○是をなやまして、是とは上にいへるをさなき心にはの心を
さしていへり

おとなしき人の、よろこびいかり、かなしびたのしふるも皆虚妄かれど
も、誰か實有の相に着せざる、身をやぶるよりも、心をいたましむる
は、人をうこなふをなほ甚し、

○おとなしき人の云々、虚妄とは空しさ妄念といふ事也たとへば先になかりし喜怒哀
樂の念の只今心上にありて程なくなるは佛老のいはゆる迷の種にして本来の心に
非ず故に皆虚妄とすされど只今實にある喜怒哀樂には皆人其虚妄の理をも辨へず先づ
ろの實有の有様に着して喜怒哀樂せざるものなしされば幼児のいつはりを興と思ひて
めいわくがる斗りにもあらずといへる也

病をうくるても、おほくは心よりうく、外より來る病はすくなし、薬を
のみて汗をもとむるには、一る一かきてあれども、一日はぢれうるゝ
とあれは、必汗を流すは、心のしわさなりといふをさるべし、淺雲の

淺雲の額を書て云々
此句發端の勢を施
さしどの詞に應じて
かけり

額を書て、白頭の人となりしたためしなきよあらず、

○淺雲の額を云々、心をいたため一時に年よりし例をいふ。三國史云魏明帝立、淺雲
觀、親先、釘以榜、乃以龍盛、章、引上、寄之去、地二十五丈、既下、鬚髮皓然、
還語、子弟直、絶、此法云々

〔三〕物に争はず、己を枉て人にしたがり、わが身を後よして人を先
にするよはしかず、

此段は血氣を以て人と争ふことなく惣て禮讓を専とすべきをいへり畢竟人と争ふは智
なき故なれば學問して智識を研さ大なる官職利徳をも辭しはなるゝが如き活斷あるべ
し、の意なるべし。○己を枉て人に從ひ、我慢の意をすて、時に從ふ意。○わが身を後
にして人を云々、所謂禮讓の道なりかくの如くにして争はざれば人皆是に從ふ

萬の遊びよも、勝負を好む人は、勝て興あらん爲なり、おのれが藝のま
さりたるをよろこぶ、されば、まけて興あくれはゆべきと又しられ
たり、我負て人をよろこばしめんとれもは、更に遊びの興なかるべし、
人にははいかく思はせて、わが心をかくさめんと、徳にうむけり、

○勝負を好む人は、勝負とは盤上博奕の類をいふ。○己が藝のまさりたるをよろこぶ
是己を狂げて人を先にするの道にあらぬよしをいへり。○わが心を慰めんこと、己が心
をばらさん事之古今集の序に歌にのみぞ心を慰めけるといふに同じ

されば「此三字を除
きてはの字を加へば
ついでたるあり
わが心を慰めん」慰
めんを異本に慰まん
どもいへり慰まんは
四段の活詞にて物の
おのづから然るをい
ふ詞印ち自動詞なれ
ば俗にいふ心はれや
かになる事なりされ
ば物を然する下二段
の活詞のなぐさめん
の方然るべし

たはるゝも「此もはさへに似通ひてられぬ云々」ときく意

むつまじきあかたはるゝも「人をはかりあさむきて、たのれが智のまさりたるを興とす、これ又禮にあらず、
○むつまじきなかに云々 禮に中に入れば、まじして疎きはどの意を含めり○人をよかりあさむきて、向ひの人をたばかり欺きて、一説に向ひの人の智をおしはかり、其淺きをあさけりて、いへりあさむくをあさけるといへるいかゝあらんはよく考ふべし

されははじめ（事女）興宴よりたこりて、あがき恨をむすぶ類多し、是皆争を好む失あり、
遊興 宴

○是皆争を好む失なり 此句は始に萬の遊びにもといふよりながき恨を結ぶ類多しといふ迄の結句之失とはどがといふが如し此一字慎の要領なり

人に勝らん事を思はは、たゞ學問して、其智を人よまさらむとおもふべし、道（聖人）を學ぶとからは、善に伐らず、ともがらにあらむべからずといふてをしるべき故あり、大なる職をも辭し、利をぬすつるは、たゞ學問の力あり、
聖人 官職 利

○大なる職をも云々 是は我にまされる賢人わらは其官職利徳を譲り與ふるものにてかゝる類ひは皆學問の力によりて仁義禮讓を知る故なりとす

知るべき故なり「弘人云此故の字衍字なるべきか此字を存するときは上のいひ係りの「道」を學ぶとすれば「道」を學ぶとはぬ心ちす

〔三三〕貧しき者は（大徳）財を（ツツクメ）もて禮とし、老たる者は（大徳）力を（ツツクメ）もて禮とせ、

此段の前段に禮讓をいへるにつきて世上におのが分にすぎたる業をなして禮とせるは禮にあらず全くおのが無智なるより起れる過失なれば深く其分を知らざるべからずとの意なるべし○貧しきものは云々 貧しき所に酒宴をなし客人に饗應せんとさうめき老人の若人にねとらすおたりち奔走するたぐひなり

おのが分をしりて、及ばざる時は、速にやむを智といふべし、（ツツクメ）ゆるさざらんは人のあやまりあり、分をしらずしてしひてはけむはおのれがあやまりなり、

○ゆるさざらんは云々 若他人しひて貧者にもふるまはせ老人にもおたりち奔走せさせてゆるさざらんは人のあやまりにておのれがどがにはあらずとなり
まづしくて分をしらされはぬすみ、力おとろへて分をしらされは病をうく、

○まづしくて分を云々 結句に至りて分を知らざる過失をいひはせきおのが分を知るは我身に大切なる事を知らしめたり

〔三三〕鳥羽の作道は、鳥羽殿建られて後のとにあらざ、むかしよりの名なり、元良親王元日の奏賀の聲、甚殊勝にして、大極殿より、鳥羽の

貧しき者は云々「禮記曲禮云貧者不以貨財爲禮老者不以力爲禮云々兼好は此古語を翻釋したうと見るべし

作道までまことおけるよし、李部王の記にシルシ侍るとかシラナ也

此段は古來鳥羽の作道といふ名のありしことをいひて知れぬ事を知らしめたり○鳥羽の作道 洛陽の南にあり○鳥羽殿 七十二代白河院應徳三年にたてらる仙洞の御所に城前の離宮と號する是○元良親王 五十七代陽成院の皇子○奏賀の聲 朝賀の時に奏賀奏端とて二人のもの庭にすゝみて祝申事之是は去年の目出たき端端ものゝるを國々より申せばうれを記て今日是を奏することテ○大極殿 朝堂院の正殿にて天皇朝政を聴き給ふ所なり元日には辰時に行幸なりて朝賀を行はせ給ふといへり○李部王の記 六十代醍醐天皇の皇子式部卿重明親王の記之李部は吏部にて即ち式部の唐名之此記は鳥羽殿より十二代昔になりしといふ

〔三〕夜のおとゞは、東御枕かり、大かた人東を枕として陽氣をうくべき

故に、孔子も東首し給へり、寢殿のしつらひ、或は南枕常の也也、白河院は、北首に御寝かりけり、北北の忌ことなり、又伊勢の南也、太神宮の御方を御跡よせさせ給ふて、いかゞと人申けり、但太神宮の遙拜は

巽東南にむかはせ給ふ、南に南とあらず、

此段も前段に次ぎて世に知れぬ天子の御枕の方角を知らしめ併せて白河院の北首し給ひし不善をいひあかせり○夜御殿 天子の御寝所禁秘鈔云夜御殿、四方有妻戸一南、大妻戸一間之御帳、同清涼殿注、東枕とあり○北首に御寝なりけり 白河院は佛者なるが故に釋尊の頭北面西の涅槃の姿をうらやましく思召て常に北首し給へりといふ○北

は忌ことなり 北方は陰氣のあつまる所天地の死氣の盈る方なればなり

〔三〕高倉院の法華堂の三昧僧、かよがるの律師とかやいふもの、或時鏡を取て、顔をつくくとと見て、我形の見にく、淺まきまを、あまりに心うく覺て、鏡さへうとままき心地一けれ、其後ながく鏡を恐

れて手にたよとらず、さらに人にまじはることなし、御堂のつとめばかりに出あひて、籠居たりと聞傳一しこそ世ありがたく覺わしか、

此段は律師の我と我身のうへを知りたるをはめて彼の身上を知らぬ者の事を後段に説めん爲の前置とせり○高倉院の云々 高倉の御時代の法華三昧の僧なり○法華堂 法華三昧を行ふ堂○三昧僧 法華三昧を修する僧之三昧とは専ら心をしづめてるの事を行ふをいふ又其事一色にして他事をませぬをいへり○律師 僧官之五位に准す○ありがたく覺わしが 此律師は身の程を知り心の分際を明めたる人と聞ゆれば兼好甘心してありがたく覺わしかと嘆稱せし

〔三〕かしてけなる人も、他のうへをのみはかりて、おのれをばしらざるなり、我ををらすして、外をあるといふ理り有べからず、さればれの、れをしるを物しれる人といふべし、

此段は前段已を知ることといへるを受けてなべて世人の人の非を論じて已が非を知ら

東首一論語朱子註云東首以受生氣也新安陳氏云天地生氣始於東方云々

鏡さへはさへの字心つくべし是は一つあるもの云々なるに是までも云々といふ所におく辭之を限りていふ辭にてうれさへなきいふ意

かしてけなる人も云々此段前段と連ねて一段となすの説あれども野道盤齊等の説に従ひて別段とす

にしろさればなり、

○命をとふる大事云々 決語の死生の一大事にして作者よの常の觀法なれば殊にたしかにといふ文字をおきて不知の二字をば書きとめたるなり

かや「このかは入道とか聞けると下へついくかに歎息のやのうはれるにてやはあるもなきも同じ事也」
「わらかひ」倭則茶に暴逆の義にやといへ

〔三〕資季大納言入道とかや聞けける人、具氏宰相中將に逢て、わぬし
のとはれん程のて、何事なりとも答申さざらんや「答申サメムアヤ」といはれければ、具
氏いかゞ侍らんと申されけるを、さらばあらがひ給へ「資季ニ」といはれては
かゞしき事は、かゝはしるまねびしり侍らねば、尋申までもなし、な
しとなきうづろことの中は、れはつかなき事をこそとひ奉らめと申
されけり「資季」とてこゝもとのあさき事は、何事なりともあきらめ申
さんといはれければ、近習の人々女房までも、興あるあらがひなり同
じくは御前にてあらうはるべし、負たらん人は、供御を設らるべし
とさためて、御前にてめしあはせられたりけるに、具氏をさなくより
聞からひ侍れど、その心しらぬて侍り、馬のきつりやう、きつりのをか、
なかくほれいり、くれんどうと申ことは、いかなる心にか侍らんうけ

たまはらんと申されけるに、大納言入道はたどのつまりて、是はうづろ
ことなれば、いふにもたらずといはれけるを、もとより深き道はより
侍らず、とゞろことをたづね奉らんと、さため申つと申されければ、大
納言入道負にかりて、所課いかめしく、せられたりけるとぞ「いふ」

此段は前段に人のうへをのみはかりて己を知らざるなをいひしを受けて資季己が分限
を知らず身に應せぬ過言して耻を万世にさらす事をいひ我智を自慢するもの、誠めと
せり○資季 法名を了心といひし歌人也○具氏宰相中將 從三位參議中將具氏卿也宰
相は兼官也○わぬし 吾主の義にて俗におぬしといふに同じ○いかい侍らん どうぞ
さらふかと少うけぬ意也○こゝもと 天竺唐に對して日本をさしていふ○供御 天
子の御膳之○馬のきつりやう云々 徒然草別傳に云く馬のきつりやうとは今の小荷
駄馬の腹當に仕合吉とかく古へは吉良とかさしなりきつにのをかは狐は死するとき
首「カネ」、丘「カネ」なりなかくほれいりは顔の凹なる人は伶俐なりくれんどうとは和名藤原とい
ふものなり陰干にして圃にかけなく時は糞土の匂ひを止むるものなり此等を一々如何
なるわけいかなる事かと問ひかけしなり○所課 課はおはすとよみてればすの轉語な
れば所課はまけたる人は供御をまうけらるべしと負はす所なり又字書に課は試也とあ
ればこゝろみおきし所也ともいへり

〔三八〕くすしあつしけ、故法皇の御前にさふらひて、供御のまゐりける

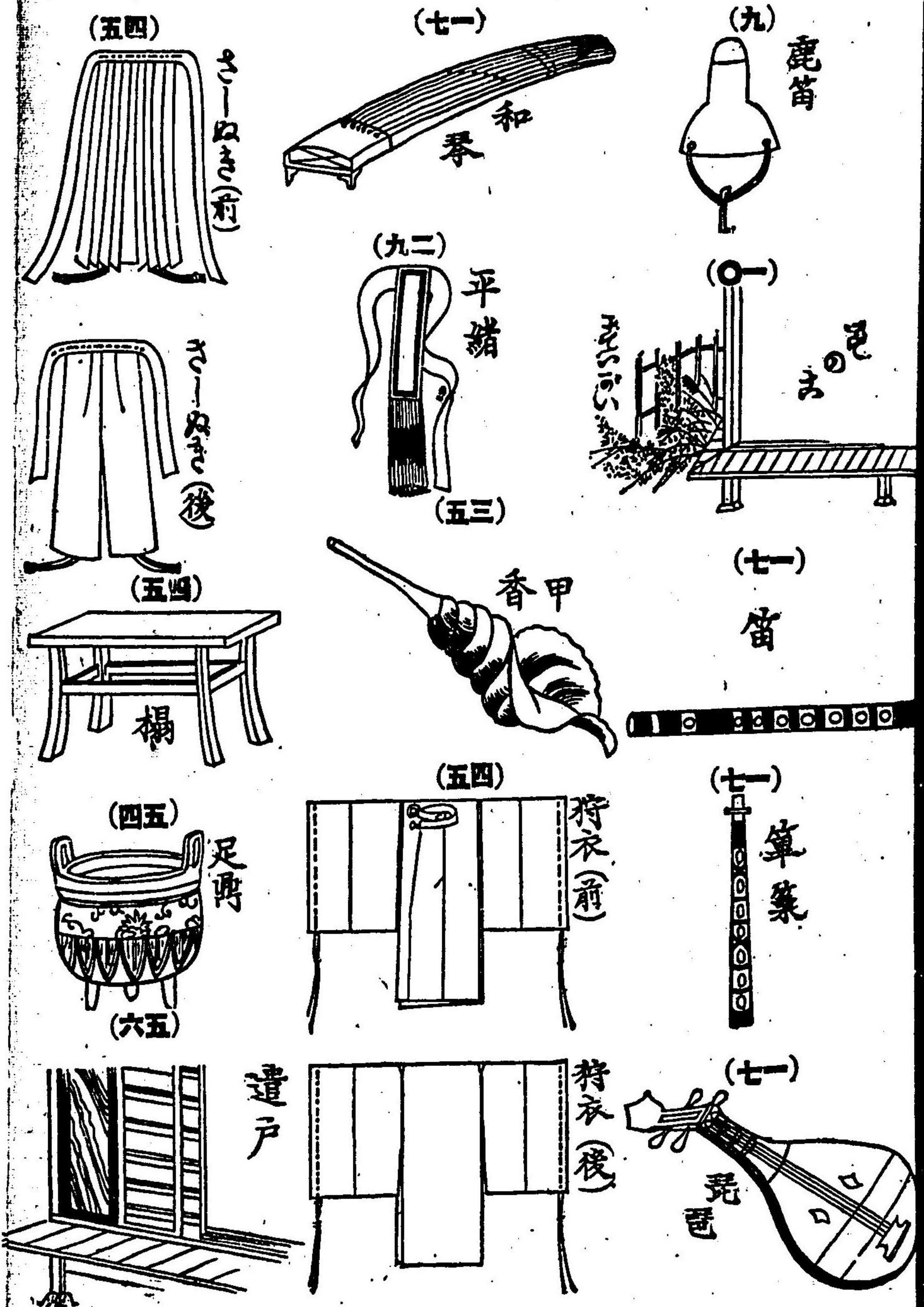
くすし「醫師をより
るは藥師の義なり

時しも「是は下をわ
れどちめて其時其
物にうちあひたる時
なれば時もあるべき
に六條故内府が云々
といへる意なり
とよみ」どの字清み
てよむべししたとよ
みなどついでにいへ
るは濁音と古音清
濁考にいへり

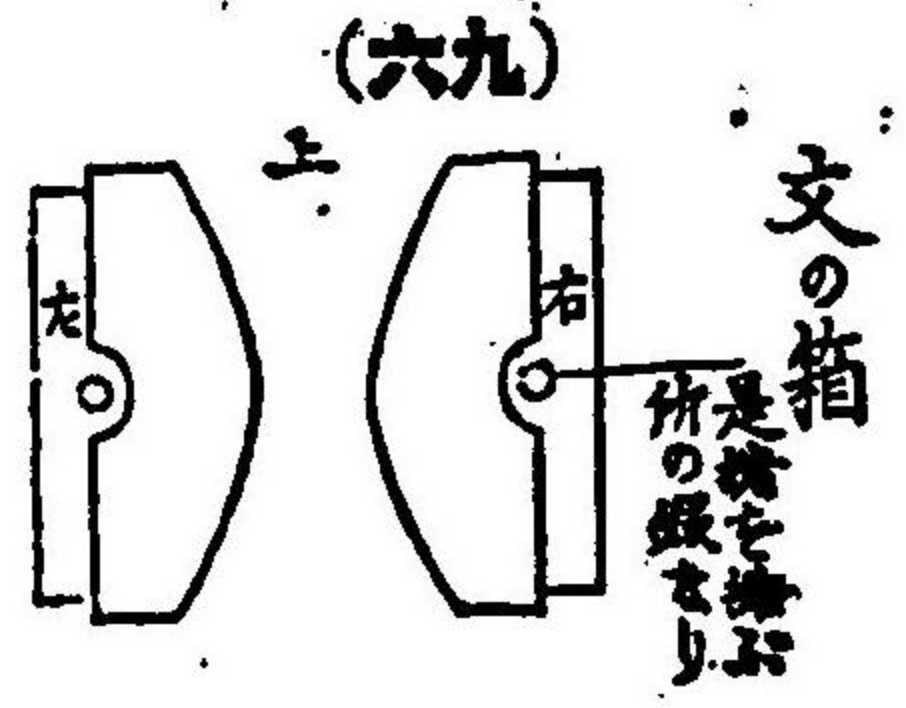
に、今まゐり侍る供御の色々を、文字も功能も尋下されて、さらに申侍
らば、本草に御覽じあはせられ侍れかし、ひとつも申あやまり侍らじ
と申ける、時しも「六條故内府参り給ひて、有房ついでに物ならひ侍ら
んとて、先しほといふ文字は、いづれのへんにか候らん」とはれたり
けるに、土へんに候と申たりければ、さうのはさすでにあらはれにた
り、今はさはかりにて候へ、床さところなすと申されけるに、とよ
みになりてまかり出にけり、

此段も前段と同じくあつしげ我才をたのみて放言し耻辱をかきたることをいひて過言
を戒めたり○故法皇 九十四代の帝花園院崩御後に記すゆゑに故といふ○本草 神農
百草をなめてはじめて作り給ふ本草の書あまたわれど今世にあまねく用ふるは本草綱
目也○六、條故内府 内大臣有房公和漢の才人能書歌人也故とは世を去りし後に記す
によりてなり○土へんに候 據は俗字也正字は鹽也○とよみ せつと笑ふ事にて即ち
其所ら鳴も渡りて也

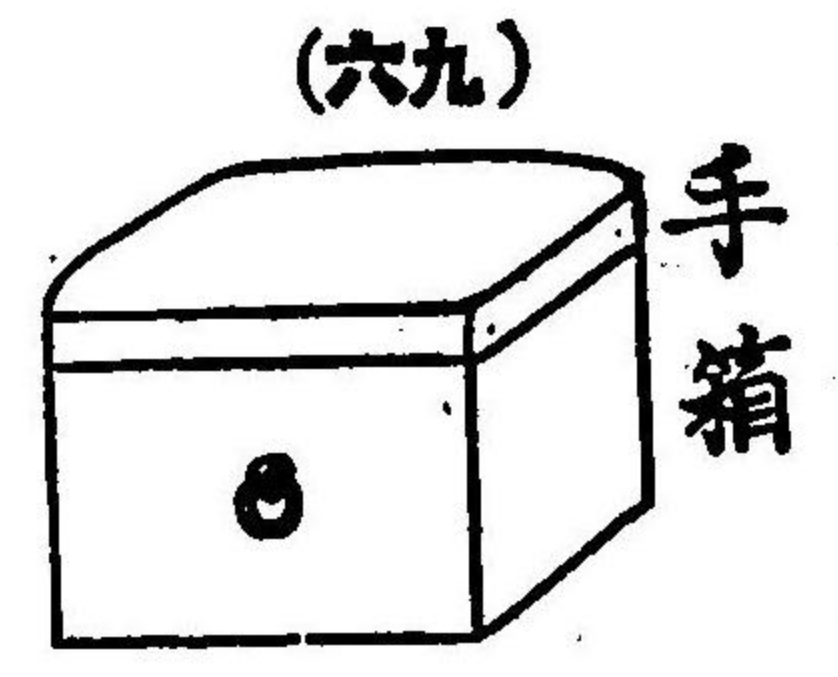
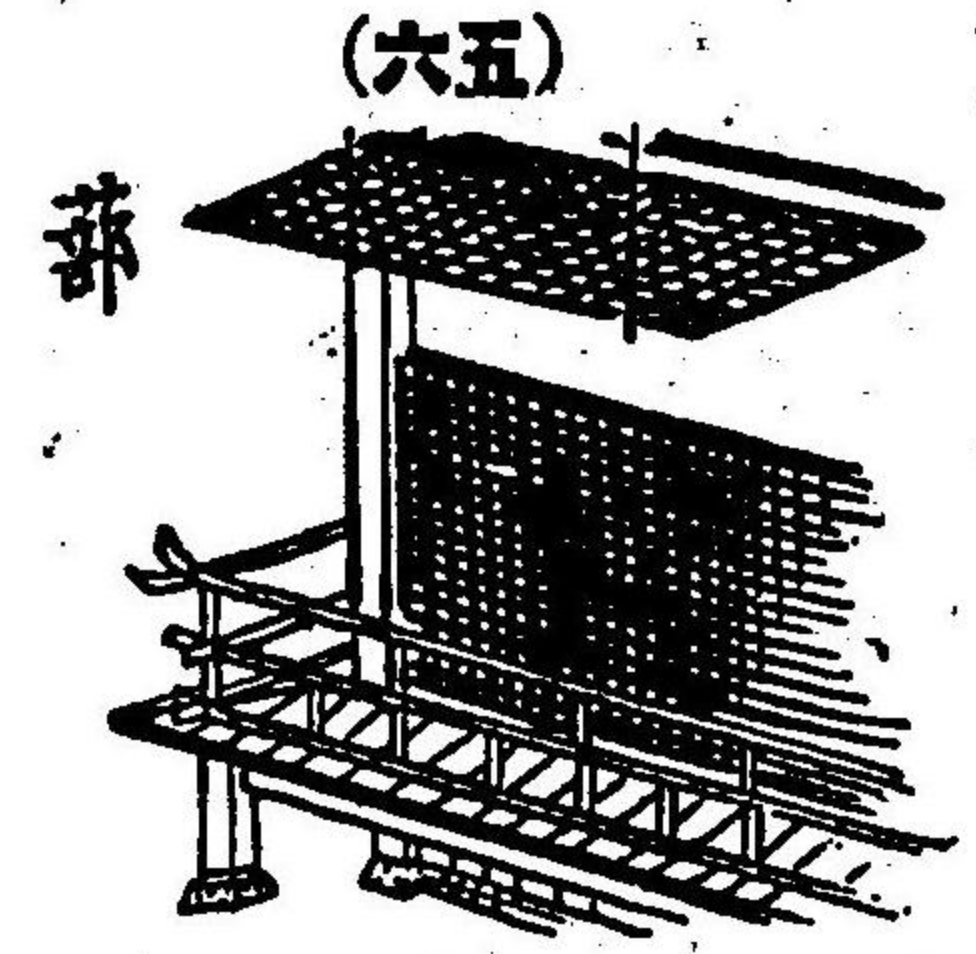
訂正増補徒然草新釋卷上終



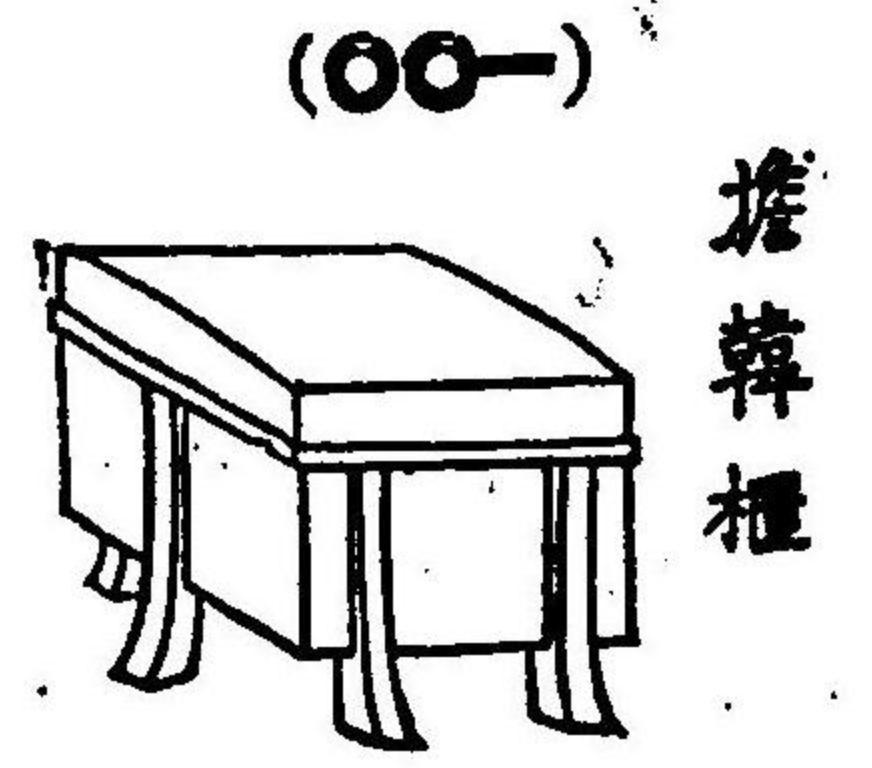
187
356



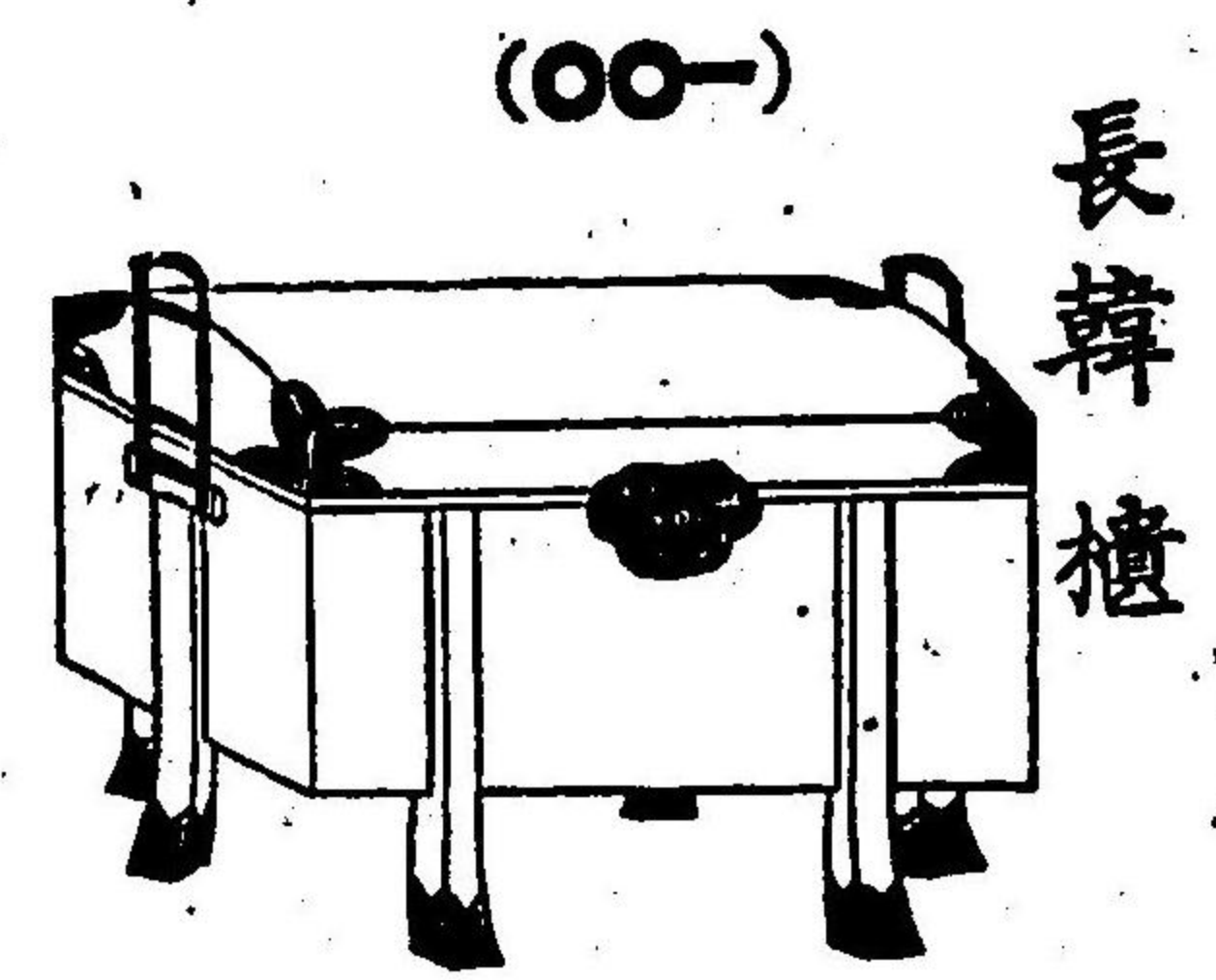
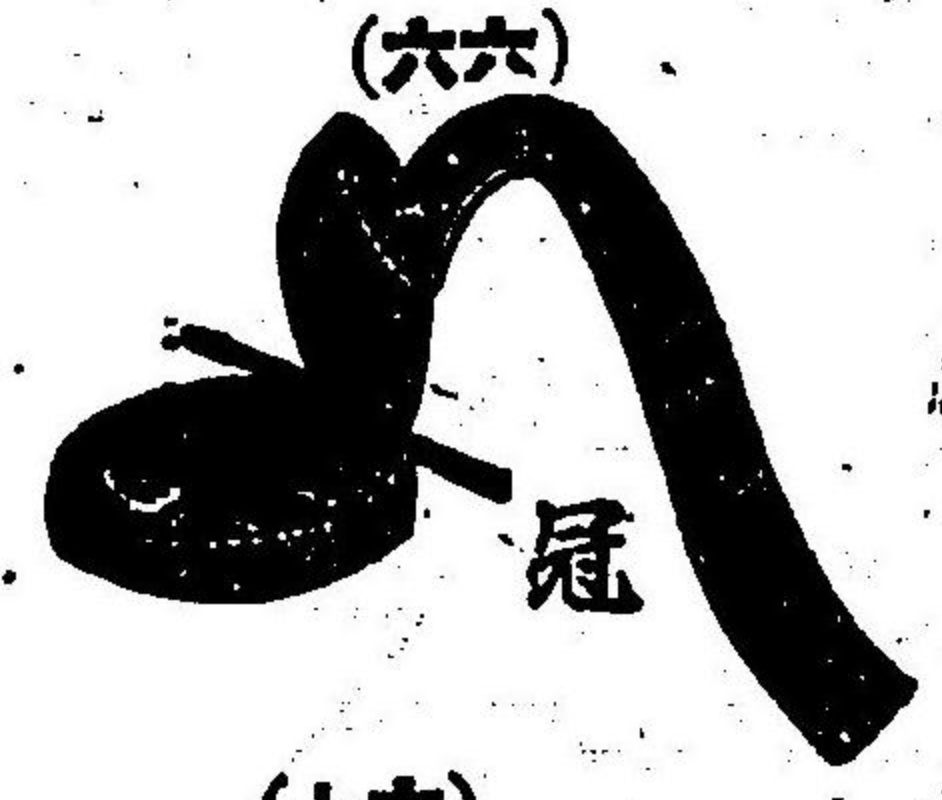
文の箱



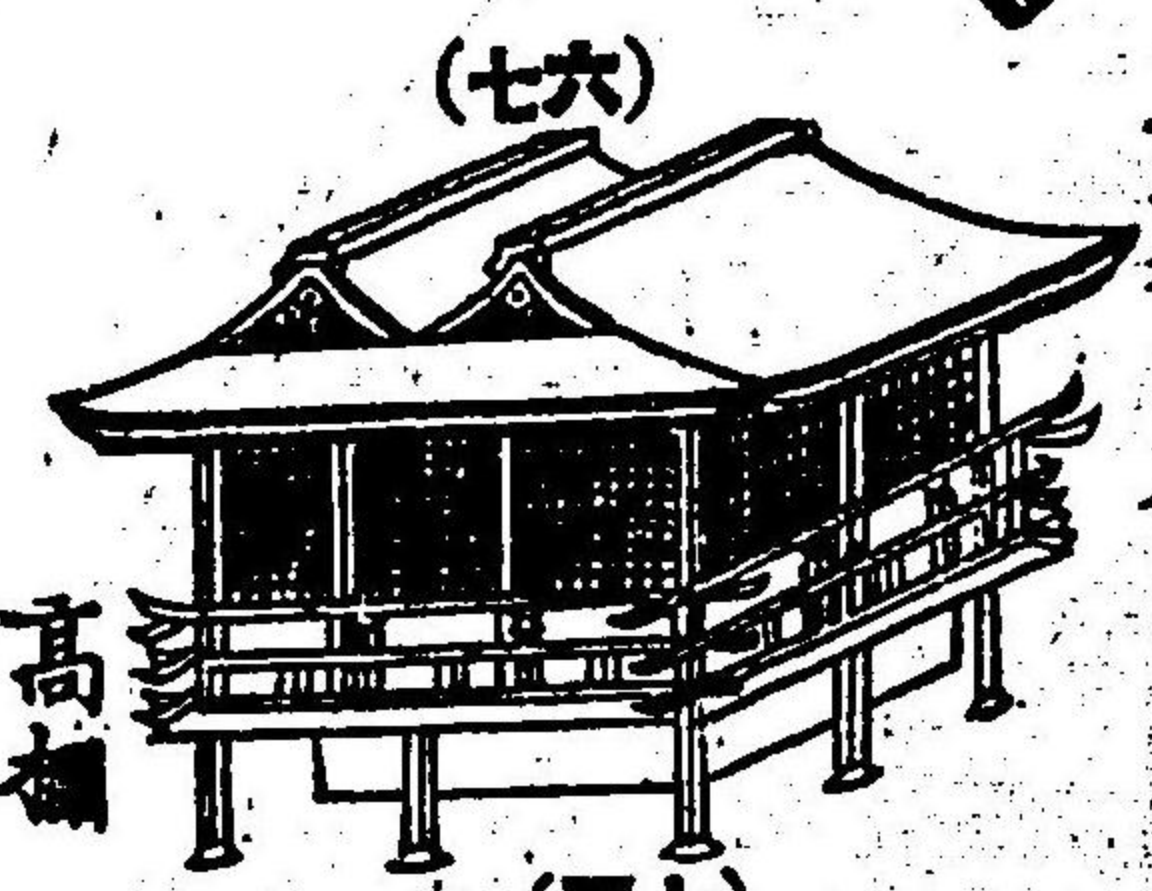
手箱



矮韓櫃

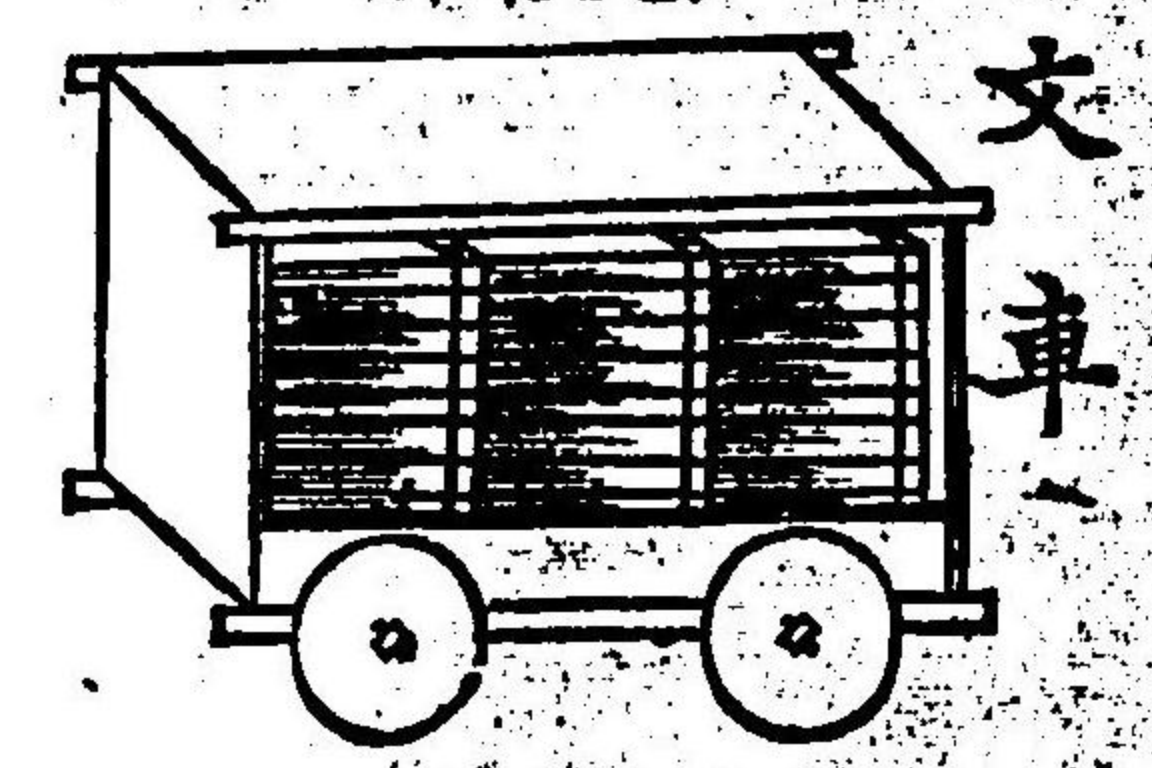


長韓櫃



高欄

二棟の柳所

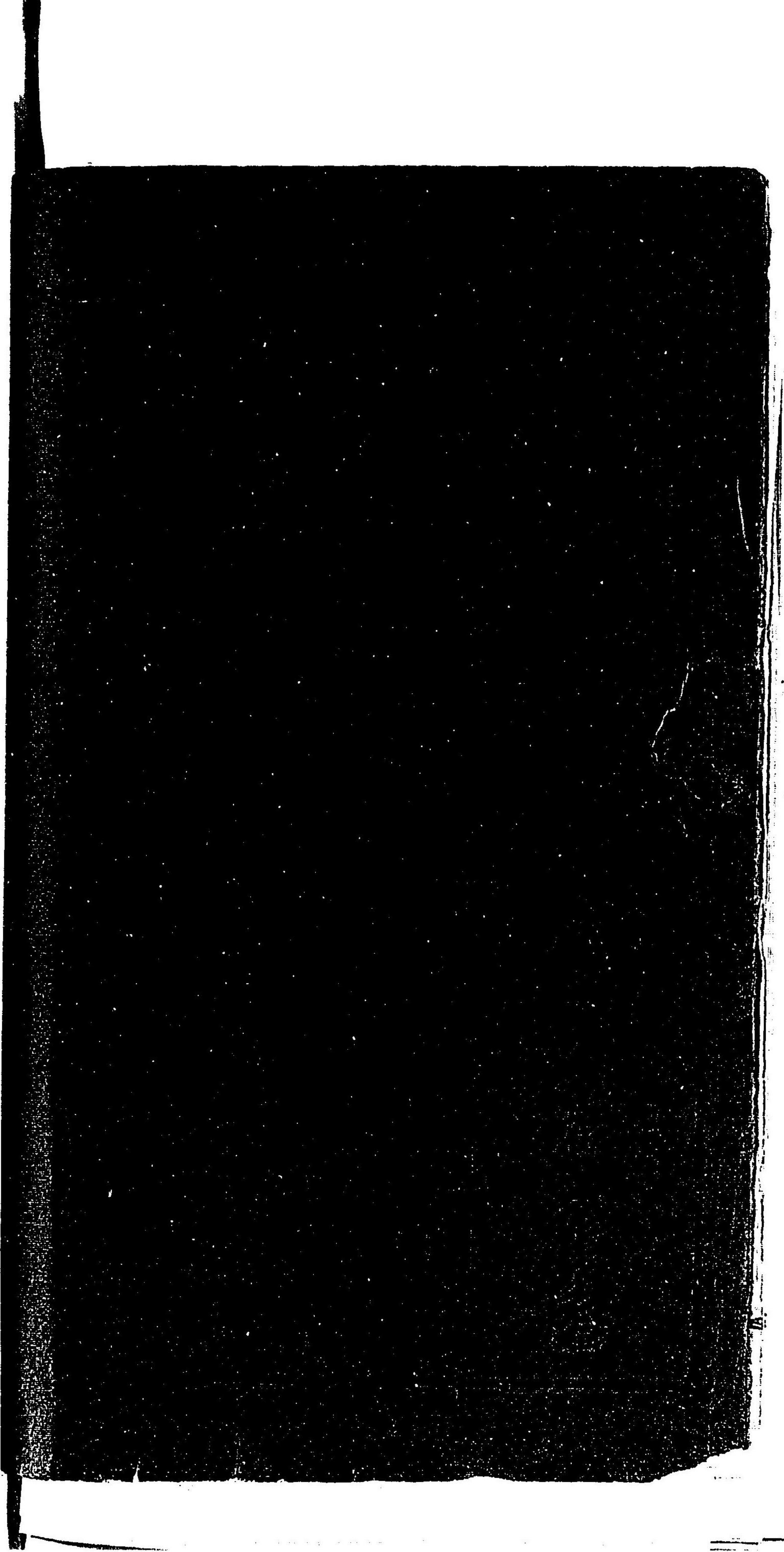


文車

187

35

訂正
增補
凌然
卓新
釋
卜
卷



下巻 目次

百三十九	花はさかりの段付祭見の事	七一
百四十	後の葵の段付周防内侍が歌の事并くす玉の事 辨乳母江侍従が歌の事	丁丁
百四十一	家に有らき木草の段	九
百四十二	身死して財残るの段	十一
百四十三	悲田院善蓮上人の段	十二
百四十四	心なしと見ゆる者もよき一言はいふ物なぞの段付子持て物の あはれしる事并民は凍餒のくるしみなき様よすべき事	十三
百四十五	人の終焉の善悪の相ははかられざる段	十五
百四十六	梅尾上人阿字觀の段	十六
百四十七	秦重射信願が落馬の相を見し段	十七
百四十八	明雲座主兵仗の相ありし段	十八
百四十九	灸治にけがれなきの段	同
百五十	三里の灸を常よりやくべきの段	同
百五十一	鹿茸を嗅べからずの段	同
百五十二	能をつかんとする人の心得の段	同
百五十三	年五十なるまで上手に至らざらん藝を捨べきの段	二十



百五十四 西大寺靜然上人の段付資朝卿むく犬の事 二十一丁

爲兼入道めしとられて六波羅へ行給ひし段

百五十五 付資朝卿うらやまれし事 二十二丁

資朝卿東寺の門にてかたは者どもを見られし段

百五十六 世にしたがふ人機嫌をしるべきの段 二十三丁

大臣の大饗の段

百五十七 筆をとれり物かゝれの段 二十六丁

盃のそこをすつるの段

百五十八 みなむすびの段 二十八丁

門より額かくるの段

百五十九 花盛の時節の段 二十九丁

遍照寺の承仕法師池の雁を捕へし段付基俊大納言

百六十 檢非違使別當の段 三十一丁

太衝の太の字の段

百六十一 世の人あひ逢時しはらくも黙止する事なきの段 三十一丁

僧俗共し我道よあらぬ事に交れる見苦しきといふ段

百六十二 人間の作業を雪佛にたとへし段 同

一道にたづさはる人あらぬ道のむしろに臨みて

百六十三 我道の事を自讃するの段 三十二丁

年老たる人の一事に才能ありての段

百六十四 何事の式といふ段付右京太夫が事 三十四丁

さしたるをなくて人のがりゆく段付阮籍が青眼の事

百六十五 貝覆ふの段付清獻公が詞の事并禹の三苗を征し給ふ事 三十五丁

若き時は血氣うちにあまりの段

百六十六 小野小町が段付玉造の文の事 三十六丁

小鷹よよき犬大鷹にあしきの段

百六十七 酒の善悪を論ずるの段 三十七丁

黒戸の段

百六十八 鎌倉の中書上にて御鞆ありし段付佐々木隠岐入道鋸屑用意せし事 三十九丁

并吉田中納言乾沙の名言の事

百六十九 或所の侍共内侍所の御劔をあやまりかたりし事 四十丁

道眼上人天竺の那爛陀寺の門の事を申されし段

百七十 同 四十八丁

さぎちやうの段

百七十一 同 四十九丁

ふれくこ雪の段

百七十二 四條大納言隆親卿からさげを供御にまゐらせらるゝ段 五十丁

- 百八十六 相摸守時頼の母松下禪尼あかり障子を手づからはられし段 同
- 百八十七 城陸奥守泰盛馬の勇めると鈍きとをよくしれるの段 五十三丁
- 百八十八 吉田といふ馬乗が馬に乗る心入をいひし段 同
- 百八十九 藝能の不堪と堪能とを論ぎる段 五十四丁
- 百九十 子を法師になすとて馬や早歌をならひし段付登蓮法師が薄の事
- 百九十一 今日へ其事をなさんと思へどの段 同
- 百九十二 妻といふものは持まじきの段 五十九丁
- 百九十三 夜に入て萬の物のさらあるといふ段 六十丁
- 百九十四 神佛にも夜參るべきの段 六十二丁
- 百九十五 暗き人は人をはかりしらぬの段 六十三丁
- 百九十六 達人の人を見る眼は誤らざるの段付偽りをきく人に品々ある事 同
- 百九十七 久我内大臣殿地藏を泥水にてあふひ給ひし段 六十四丁
- 百九十八 同人社頭よて警蹕せられし段 六十六丁
- 百九十九 定額の女孀の段 六十七丁
- 二百 揚名の介の段 六十八丁

- 二百一 行宣法印呂律の國を辨せし段 同
- 二百二 吳竹河竹の段 六十九丁
- 二百三 退凡下乗の卒都婆の段 同
- 二百四 かみな月の段 同
- 二百五 勅勘の所に靴かくるの段 七十丁
- 二百六 犯人をしもとにてうつの段 同
- 二百七 比叡山大師勸請の起請の段 七十一丁
- 二百八 牛はなれてはまゆかの上へのほりし段 同
- 二百九 龜山殿の地に蛇多くありし段 七十二丁
- 二百十 經文の紐を弘舜僧都ときてなほさせける段 七十三丁
- 二百十一 非道よて田をかる者の名言の段 七十四丁
- 二百十二 喚子鳥の段付招魂の法の事并萬葉集の雉の事 同
- 二百十三 萬の事はたのむべからざるの段付孔顔時にあはざる事 七十五丁
- 二百十四 秋の月はかぎりなくめでたきの段 七十七丁
- 二百十五 御前の火爐に炭れくの段 七十八丁
- 二百十六 想夫戀の樂のあやまりをたぐす段 同
- 二百十七 平時頼と同宣時と夜更て酒のまれし段 七十九丁
- 二百十八 同時頼入道足利左馬入道が許へ立入られて小袖をこはれし段

二百十九	大福長者のいひし段付癡疽のたどへの段	八十丁
	井究竟理即大欲無欲の辨の段	八十一丁
二百二十	狐は人よくひつくものゝ段	八十三丁
二百二十一	四條黃門龍秋の發明を感ふ給ふ段付景茂が評の事	八十四丁
二百二十二	天王寺の樂の段付鐘聲は黃鐘調たるべき事	八十六丁
二百二十三	放免のつはものゝ段	八十七丁
二百二十四	竹谷乘願房の段	八十八丁
二百二十五	たづのおほい殿の段	八十九丁
二百二十六	陰陽師有宗入道名言の段	同
二百二十七	多久助白拍子のれこりをいふの段	同
二百二十八	五徳冠者行長平家物語を作るの段	九十丁
二百二十九	六時禮讚の段付善觀房の事	九十一丁
二百三十	千本釋迦念佛の段	九十二丁
二百三十一	妙觀が刀の段	同
二百三十二	五條の内裏にて狐のはげし段	同
二百三十三	團別當庵丁の段付北山殿の評判の事	九十三丁
二百三十四	すべて人は無智無能なるべきの段	九十四丁

二百三十五	琵琶のちう落たりしに古きひさくの柄ありやといひし段	九十五丁
二百三十六	萬のどがあらじとおもはゞの段	九十六丁
二百三十七	人の物とひたる返事するにさまゞ有るの段	九十七丁
二百三十八	ぬしなき家は狐ふくろふ入くるの段	同
	付鏡に色かたちなきの段	同
二百三十九	聖上海人丹波の出雲へ参詣せし段	九十九丁
	付高麗狗後さまに立し事	同
二百四十	柳管の段	百丁
二百四十一	自讚七箇條の段	百一丁
二百四十二	八月十五日夜九月十三日夜の月の段	百七丁
二百四十三	忍ぶの浦の蜚の見るめも所せくといふの段	同
二百四十四	望月のまどかあるはしばらくも住せずの段	百十丁
二百四十五	とこしなへに違順につかひるゝといふの段	百十二丁
二百四十六	八になりし年佛の事問し段	同

訂正 徒然草新釋卷下

渡邊弘人釋

〔三元〕花は盛に月はくまなきをのみ見る物かは

見ルモノニハアラウ

花は盛に月はくまなきをのみ見る物かは
語に云々一徹の心機を
もよほたるものは世間
に愛するものは生得にて
有るは心は生得にて

ささぬべきはどの梢
云々一花の影は影
て月の影は影は影
略互の影は影



雨たひかひて月をこひ垂^垂こめて春のゆ^ゆくへしらぬも猶^猶あはれに
青^青のし^しささぬべきはどの梢^梢ちりしをれたる庭をこころ見所おほ

けれ歌の詞がさにも花見にまかれりけるよはやく散過にければど
もよほはるてありてまからでなほもかけるは花を見てといへるよお
とれるとかは花のちり月のかたぶくをしたふならひはさるよな
れぞ殊よかたくななる人ぞ此枝かのわたちりよけり今見所なし

萬の事も云々「上」に
月花をいひて下に男
女のことはいはんと
てかくかける詞つゞ
あはでやみにし「以
下色このむどはいは
めまでは戀の道を五
節にいひ分ち五節共
品をいひあらはせり

なほはいふめる、

○見所おはけれ 飛花落葉を見て無常を觀するによりて見所多しといふ也其多しとあ
るにてさかりは見所なしといふにあらざるを知るべし○殊にかたくななる 以下いふ
めるまでは心なきさもしき人の心はへといへり

萬の事も始終ころをかしけれ、男女の情もひとへにあひみるをばい
ふ物かはあはでやみにしうさを思ひ、あたなる契をかこち、長き夜を
ひとりあらし、遠き雲井をたもひやり、淺茅がやどに昔を忍ぶころ、色
このむどはいはめ、

○あだなる契 うは氣なる契約也○遠き雲を云々 遠境をへだつる妹を云雲はた
い遠き處をいへり○淺茅がやど 茅の淺く生ひ出で荒たる宿にて君まよぬ荒れたる處
なり

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉ちかく成て待
出たるが、いと心ふかう、青みさるやうにて、深き山の杉の梢に見ゆ
たる木の間の影、うち時雨たる村雲がくれの程、又なくあはれなり、
椎柴しらかしなほの、ぬれたるやうなる葉のうへに、さらめきたる

友もがな」もがなは
云々あらまはしきよ
し願ふ辭なり

をかしけれ」或説に
俗にれもしろしとい
へる意のかしはは
の仮字といへるは
誤なりといへり

遊歌して「筑波開答
に日本武尊東夷征伐
の時酒折の宮にて一
にひはりつくばをす
ぎていくよかねつる
なかりしに火をとも
す童是をつく「かい
なへてよにはかを
よひにはとをかを

ころ、身にしみて、心あらん友もがな」と、都戀しうおほゆれ、

○椎柴しらかし 椎の木と白樫の柴となり柴とは小木の繁りたるものをいふ白樫
には大木なしといへり

すべて、月花をばさのふめ、にでみるものかは、春は家を立さらせも
月の夜は闇のうらながらも、おもへるころ、いとたのもしうをか
しけれ、

○すべて月花をば云々 此句肝要也凡月花は目にふれて後心にたのしむにはあらず先
心に花月の如くなる飽なる處ある人ころ花月の風流を知るべき道理なれば目にて見る
物にはあらず心にて見よといへる處なり

よき人はひとへに、すけるさまにも見えず、興するさまも等閑なり、か
た田舎の人ころ、色こく萬はもて興すれ、花のもとははねぢより立寄
り、あからめもせず守りて、酒のみ連歌して、はては大なる枝、心なく
折とりぬ、水よは手足さしひたして、雪よは、たり立て跡つけなき、万
の物よろながら見るをなし、さやうの人の祭みしさま、いとめづら
かりき、見ていとおろし、其やどを機敷不用なをとして、れくあるやよ

是連歌の初とていへり上古は百韻なといふことなくして上の句をいへば下の句を付なんせし今この連歌もそれと知るべし

酒のみ物くひ、圍碁雙六など（モテ）あそびて、棧敷（見ハリノ）に人をあきたれた（只今）わたりたをさぶらふと云時よ、たのしく肝つふる、やうに（ワレ先ニト）あらうひ走りのほりて、（落ツキ）落ぬべきまで簾さりいでてれし合つ、一事も見もらさじとまもりて、とありのりりと物ごとにいひて、渡り過ぬれば、又（他ノ見物）わたらん（オホ）までといひて、（サツキ）たりぬ、たゞ物をのみ見んとするなるべし、都の人のゆゝしけなる、ねおりていともみず、若くする、なるは宮づりへれたる、人のうしろにさぶらふと、さあしくも（雨ナド）たよびの、らすわりなく見んとする人もなし、

○色こく、しつこく也○あからめせず、他所目もせず也○よろながら見ることなし、たゞこれを見ることなく其物に近づきて心なき所爲をなすをいふよろながらは遠方よりといふが如し○見ごととおろし、見る物ごとのわたる間甚おろきに今いふねり物などをいへるなるべし○棧敷不用なりとて、不用は無用の義也祭のわたらぬ間は棧敷にをる事無用ことなり○ゆゝしげなるは、優々しげなるにてこゝにてははめたる也○宮つかへに、是はもと大宮に使はれ奉るより轉りて大宮ならぬ所に仕ふるといへり俗にさほうこうといふ○わりなく、理なくの略にてむりになをいふ意也

何となくあふひかけわたして、（オホ）あまめかきさよ、明はなれぬと（只今）さる

待つけぬべし「待つくべし」と云に同じうはぬべしのぬは奈行變格のぬの語のいきはひにてろはれるものなれば本言へもさしてさくべければ、下のうきぬべしも意同し鳥部野「第七段に見ぬたり

のひてよそる（物見）車ごものゆかしきを、うれ（ソノ）かかれ（ソノ）かなぞ、思ひよそれ（ヤス）は、牛飼下部なごの見知れるもあり、（ヤス）をかしくもきらく、しくもさましく、一行かふ、みるもつれ、くならせ、くる、ほどには、たてならべつる（物見）車ごも、所なくなみるつる人も、いづろへか行つらん、程なくまねになぞて、（カハル）車ごものらうびさしさをみぬれば、（棧敷）簾た、みもとりてらひ、目の前にさびしけになりゆくころ、世の（ワツリカハル）かめしも、（カクヤト）たもひ若られてあそれなれ、（ゴ）大路（休）み、さるころ、（オレ）祭見たる、（本意）にてはあれ、かの棧敷のまへを、こゝら行かふ人のみしれる、あまた有にて若りぬ、世の人敷もさのみはおほからぬにころ、（オレ）この人皆うせなんのち、我身若ぬべきにさたまりたりとも、ほどなく、（其死）待つけぬべし、大なる器に水を入れて、ほろき穴をあけたらんに、また、るをすくなしといふとも、をこたる間かくりもかは、やがてつきぬべし、都の中はほき人、死なざる日はあるべがらぎ、一日はひとりふたりのみならんや、（多）鳥部野、船岡さらぬ野山にも、おくる敷おほかる日、あれど、おくらぬ日はなし、（其）され